

製塙土器がある。壺(1237・1245・1246)は全て直口壺である。甕(1242~1244・1247)はいずれも布留式祖形甕で、(1247)のように庄内式甕の形態的特徴を残すものも認められる。高杯は椀形高杯Bと思われる(1241)が出土した。鉢(1238~1240)は全て有段口縁鉢で、外面はハケを中心とした平滑技法で仕上げられている。小形丸底土器(1236)はBに属する。製塙土器(1249)は脚台の小さいCである。

S A 2220の床面ではほとんど遺物を検出することができなかったが、床面上50cmの厚さで堆積した住居内埋土の上層から、本様相に属する土器群が面的にまとまって出土した。S A 2220の経営時期はさらに遡る可能性があるが、本堅穴住居が廃絶して土砂の自然堆積をみた後、本様相の中で廃棄あるいは祭祀的行為の結果、形成された土器群と考えられる。上層出土土器には壺、甕、高杯、鉢、小形器台がある。壺には直口壺(1575~1578)、複合口縁壺X(1579)が認められる。(1579)は外来系土器I類で、遺構内では口縁部だけの破片が正立状態で検出された。甕は布留式祖形甕(1564~1566)、庄内式甕A(1561~1563)、甕X(1567)で構成され、弥生形甕は存在しない。高杯(1574)は口縁部の破片で、体部径が極めて縮小した有稜高杯A₂の形態をとる。鉢には有段口縁鉢(1572・1573)、小形鉢X(1568)がある。小形器台(1569~1571)はいずれもBである。

第3節 和泉地域北部における後期弥生土器・古式土師器編年の試み

第1項 編年にあたって

歴史的にみれば和泉の地は、和泉監が設置される西暦716年まで河内国に属しており、本来は河内の南部一帯に相当する地域である。旧国の国境が律令時代以前のどの時点にまで遡り得るのかは知る由もないが、和泉一帯は地理的にみると西を大阪湾、北を和泉丘陵、南東を和泉山脈に囲まれた半閉鎖的な地域である。こうした地形的な制約もあるうが、畿内中堅部を占める大和・中河内地域の至近距離にありながら、少なくとも庄内式併行期における土器の変容は先鋭的ではなく、先進地に比してやや遅れた動きをみせるようである。既に大和・河内地域では、旧国単位あるいは小地域ごとの詳細な編年案が構築されつつある。しかし前述の理由により、同じ畿内といえども和泉地域の土器の変遷過程について、他地域で組まれた既成の編年案にそのまま横並びさせることは、少なからず危惧の念を抱かざるを得ない。このため和泉地域で蓄積された当該土器資料について、下田遺跡出土土器群による編年案を基準に整理して資料的相互補完を行い和泉地域の土器様相に光を当てると共に、その中の小地域性が抽出できれば併せて指摘しておきたい。下田遺跡は地理的に和泉の最北部に位置して河内との旧国境にも近く、この地域の代表的な上器の動きを示す可能性が高いと考えられ、実際におよそ岸和田市以北の当該期土器様相は、総体的に下田遺跡のそれと矛盾のない変遷を辿るようである。なお、下田遺跡に代表される土器様式の及ぶ範囲は、ある程度まとまった当該期土器資料が得られる和泉中部よりも北側の地域、岸和田市以北を中心に想定している。これに対し南部地域は「泉州・紀北」と併称されるが如く、紀伊北部の影響をも射程に入れる必要があるが、その土器様相について現段階では資料の制約がある。従って下田遺跡土器編年案を以て、和泉地域全体を包括できるとは考えていない。南部地域での古式土師器の動態については、今後の資料蓄積に期待するところが大きい。

第2項 和泉地域の古式土師器研究小史

和泉地域での古式土師器に関する最初の編年的考察は、森浩一・田中英夫により石津川下流域に所在

する石津遺跡から出土した土器群によって実施された(森・田中1954)。石津遺跡は石津川流域で最も河口付近に位置する遺跡で、堅穴住居の存在が確認されている。資料は石津川の改修工事の際に発見され回収された壺・甕・高杯・小形丸底土器・小形器台などの土器群で、出土層位の所見から第V様式に統一須恵器I以前の土師器について「土師器I型」「土師器II型」に分別、さらに「III型」の存在を示唆した。そして布留式はII型を中心とした前後を包括すると推定している。また改修工事後の通水により河床から出土した土器群についても、先の編年観に従って「石津I型式」「石津II型式」に発展させ報告した(森・田中1961)。例えば石津I型式には東海系のS字状口縁台付甕が含まれ、石津II型式には小形丸底土器や肩部に波状紋を有する直口壺などがある。しかしこれらはいずれも不幸な状況下で回収された資料であり、担当者が指摘するように詳細な編年研究には不足する点がある。しかし概ね布留式前半の範囲で捉えられるこれら土師器の検討により、当該期に属する石津遺跡の存在を明らかにできた意義は大きい。

和泉地域の庄内式土器については、初めて「庄内式」土器の存在を提唱し古式土師器研究の方向を決定づけた田中琢の研究で触れられている(田中1965)。田中は庄内式土器の畿内での分布論に及び、摂津・河内・山城での存在が確かなことから、和泉でも庄内式土器が出土する可能性を示唆した。

これより以後、和泉地域では資料数の増加と共に編年の研究が進められることになる。より具体的な和泉地域の土器様相は、酒井龍一が和泉市上町遺跡の出土遺物を整理し、その結果を基礎として先駆的研究を行い(酒井1975)、さらに泉大津市豊中遺跡出土土器の検討を通じてその考えを発展させている(酒井1976)。酒井は各遺跡出土の土器様相を通じ、和泉地方では第V様式以後も伝統的技術体系が存続するという結論に達し、こうした「在地系」土器群を表象するものとして、認識論的に「伝統的第V様式」の概念を設定した。そして第V様式と布留式の間を「過渡期」とし、これを都出比呂志の「第六様式」(都出1974)にほぼ該当するとした。またこの期の中で、時間的な推移による器種構成の変化に着目して、この期が「過渡期I・II・III」と段階的に捉えられることを指摘している。即ち第V様式以後続しながらもなお庄内式甕の出土をみない段階として過渡期I(池上遺跡I・K・C・II・B-10地点土器窯)を設定し、続く過渡期IIについては庄内式甕の出現期を古相(上町遺跡「井戸」状遺構)、数量的増加をみせる盛行期を新相(豊中遺跡「河川」状遺構)に位置づけた。そして新相の段階では「小型三種」土器群が未完成であって、そのうちの小形器台のみが出現する事実を報告している。また過渡期IIIは標識とした豊中遺跡C地区出土資料について時間幅が存在する危惧を抱きつつも、庄内式甕の減少と「伝統的第V様式」土器群に加え、「極めて「布留式」を呈する」土器群が出現する段階とし、併行する遺跡として七ノ坪遺跡を挙げた。酒井は広義で捉えた布留式の中で、「小若江北式」土器群がやや後出の要素をもつことを認めながらも、過渡期IIIをそれより僅かに先行する段階に位置づけている。このことより過渡期IIIは、布留式古段階を念頭に置いたものと把握されるが、これをあえて布留式に含めなかったのは「伝統的第V様式」土器群の存在を重視したためと思われる。以上のような編年観は資料数の増加をみた現在でも、大筋において大幅な修正の必要は認められず、当地における土器相の変遷を的確に概観した所見として高く評価される。

鈴木陽一は、石津川の上流域に立地する堺市小阪遺跡出土の土器群について、遺構ごとの編年観を述べている(鈴木1992)。鈴木はまず庄内式・布留式土器について、古墳出現期後の古相を呈する土師器との立場から両者を「古式土師器」とし、また下限については須恵器出現によって土師器の様式・構造が変質する直前までの土器様式とした。そして小阪遺跡出土の古式土師器の土器様相を分析し、和泉地域

北部の遺跡出土土器との比較対照からその編年的位置づけに及んでいる。編年の基準としては、大和・河内地域では壺が採用され易いが、和泉では壺がその両地域とは異質な様相を呈する点を指摘、一瀬和夫による河内地域の加美遺跡での試行(一瀬1988)を例に挙げて高杯の変遷過程に着眼しつつ、和泉でも編年の標識土器として高杯が有効性をもつことを指摘する。変遷案では弥生時代後期末～古墳時代前期の土器について「第Ⅰ段階」～「第Ⅳ段階」の区分が設けられている。各段階はさらに細分され、第Ⅰ段階を2小期、第Ⅱ段階を3小期に分割されている。その時代的区分については、第Ⅰ段階-1を弥生時代後期末(上町遺跡「井戸」状遺構)、2を庄内期古段階(府中遺跡第1号住居址、池上遺跡)とし、さらに第Ⅱ段階-1を庄内期中段階(池上遺跡、小阪遺跡溝32)、2を庄内期新段階(小阪遺跡溝30-a、豊中遺跡大溝、豊中・古池遺跡「河川」状遺構、小阪遺跡溝24)、3を布留期古段階(東雲遺跡溝-1)に当て、第Ⅲ段階(東雲遺跡溝-2)及びⅣ段階(船尾西遺跡S G-001、小阪遺跡土坑40)を布留期新段階に相当させている。本考察はあくまで小阪遺跡出土土器の編年学的序列関係に主眼が置かれた編年観であり、大まかな土器の変遷が提示されている。

和泉の庄内式併行期の土器について樋口吉文は、地域内でも庄内式土器の共伴が北部と南部で受容に差異のあることを指摘した上で、当該期について「庄内並行1段階」～「庄内並行5段階」の都合5段階の編年細分試案を提示した(樋口1992)。1段階(府中遺跡S D09、西大路遺跡922-O R)は上六万寺式から北島池式に概ね相当するとし、複合口縁壺・手焙の一般化、加飾性の強い壺・高杯の存在をあげている。第2段階(府中遺跡第1号住居址内土器1群、西大路遺跡533-O X)は庄内式壺の共伴をみなないが存在の確実視される段階として捉えた。3段階(四ッ池遺跡S K30、四ッ池遺跡NW-16区画土器窓、古池北遺跡大溝)は庄内式壺(米田編年II～III)の共伴が一般的となり、壺の体部内面へラ削りの一般化、丸底化追求の傾向を指摘した。4段階(小阪遺跡溝8、四ッ池遺跡S A01住居址内埋土)は米田編年庄内期III～IVに併行し、第V様式系土器群でも丸底の胴体が増加するとした。5段階(四ッ池遺跡S A01住居址内カマド一括、四ッ池遺跡S A03住居址内床面各遺構、船尾西遺跡S G001)は最終末の庄内式壺を伴い、V様式系土器群の消滅、丸底で内面へラ削りの壺、及び器台・小型丸底壺のセットの一體化など、布留式直前の段階と把握し、寺沢編年の布留1式期にあたるとする。これら細分について第1段階～第4段階までは「弥生第V様式の形態・技法を踏襲し発展させた土器群」が主流で、また畿内中心部地域に比して変遷も遅いが、第5段階以降はV様式系土器群の消滅や生駒西麓の胎土を有する土器の稀少化など、速やかな変遷を辿るとした。またこの段階で吉備系・北陸系・東海系土器の出土量が増大することを指摘、布留式という畿内齊一の土器様式の和泉での確立、及び古墳文化の到来をして「広域政治社会」への編入段階と捉えた。土器様相の変遷と庄内式壺の受容の各段階に画期が求められている。

坪之内徹は、和泉地域南部(泉南)に位置する泉南郡熊取町大久保遺跡の当該期土器資料について、細分の見通しを述べた(坪之内1992・1996)。これらは自然流路出土の土器群であるため、型式学的方法による細分が試みられ、さらに遺跡の立地的な観点から紀伊地方、特に紀ノ川北岸地域の出土資料を視野に入れた比較検討が行われている。壺・高杯、その他の器種の形態的特徴を抽出して分析を加え、古相を示す庄内期前半(纏向2式)、新相を示す庄内期後半(纏向3式)の2様相に遺物群を分離している。古相では伝統的第V様式壺が圧倒的に優位であり、新相で上田町II式壺、小型丸底壺、小型器台が出現するが、この傾向は泉南・紀北の他遺跡に共通する特徴であるとしている。また上田町II式壺を比較的多く出土する遺跡は、豊中・古池遺跡など限られた存在であり、池上遺跡、七ノ坪遺跡、府中遺跡、上町遺跡など大津川流域の遺跡では出土量が少ない点から、中南河内、大和東南部などの中枢部以外の地域

製塙土器がある。壺(1237・1245・1246)は全て直口壺である。甕(1242~1244・1247)はいずれも布留式祖形甕で、(1247)のように庄内式甕の形態的特徴を残すものも認められる。高杯は椀形高杯Bと思われる(1241)が出土した。鉢(1238~1240)は全て有段口縁鉢で、外面はハケを中心とした平滑技法で仕上げられている。小形丸底土器(1236)はBに属する。製塙土器(1249)は脚台の小さいCである。

S A 2220の床面ではほとんど遺物を検出することができなかったが、床面上50cmの厚さで堆積した住居内埋土の上層から、本様相に属する土器群が面的にまとまって出土した。S A 2220の経営時期はさらに遡る可能性があるが、本堅穴住居が廃絶して土砂の自然堆積をみた後、本様相の中で廃棄あるいは祭祀的行為の結果、形成された土器群と考えられる。上層出土土器には壺、甕、高杯、鉢、小形器台がある。壺には直口壺(1575~1578)、複合口縁壺X(1579)が認められる。(1579)は外来系土器I類で、遺構内では口縁部だけの破片が正立状態で検出された。甕は布留式祖形甕(1564~1566)、庄内式甕A(1561~1563)、甕X(1567)で構成され、弥生形甕は存在しない。高杯(1574)は口縁部の破片で、体部径が極めて縮小した有稜高杯A₂の形態をとる。鉢には有段口縁鉢(1572・1573)、小形鉢X(1568)がある。小形器台(1569~1571)はいずれもBである。

第3節 和泉地域北部における後期弥生土器・古式土師器編年の試み

第1項 編年にあたって

歴史的にみれば和泉の地は、和泉監が設置される西暦716年まで河内国に属しており、本来は河内の南部一帯に相当する地域である。旧国の国境が律令時代以前のどの時点にまで遡り得るのかは知る由もないが、和泉一帯は地理的にみると西を大阪湾、北を和泉丘陵、南東を和泉山脈に囲まれた半閉鎖的な地域である。こうした地形的な制約もあるうが、畿内中堅部を占める大和・中河内地域の至近距離にありながら、少なくとも庄内式併行期における土器の変容は先鋭的ではなく、先進地に比してやや遅れた動きをみせるようである。既に大和・河内地域では、旧国単位あるいは小地域ごとの詳細な編年案が構築されつつある。しかし前述の理由により、同じ畿内といえども和泉地域の土器の変遷過程について、他地域で組まれた既成の編年案にそのまま横並びさせることは、少なからず危惧の念を抱かざるを得ない。このため和泉地域で蓄積された当該土器資料について、下田遺跡出土土器群による編年案を基準に整理して資料的相互補完を行い和泉地域の土器様相に光を当てると共に、その中の小地域性が抽出できれば併せて指摘しておきたい。下田遺跡は地理的に和泉の最北部に位置して河内との旧国境にも近く、この地域の代表的な上器の動きを示す可能性が高いと考えられ、実際におよそ岸和田市以北の当該期土器様相は、総体的に下田遺跡のそれと矛盾のない変遷を辿るようである。なお、下田遺跡に代表される土器様式の及ぶ範囲は、ある程度まとまった当該期土器資料が得られる和泉中部よりも北側の地域、岸和田市以北を中心に想定している。これに対し南部地域は「泉州・紀北」と併称されるが如く、紀伊北部の影響をも射程に入れる必要があるが、その土器様相について現段階では資料の制約がある。従って下田遺跡土器編年案を以て、和泉地域全体を包括できるとは考えていない。南部地域での古式土師器の動態については、今後の資料蓄積に期待するところが大きい。

第2項 和泉地域の古式土師器研究小史

和泉地域での古式土師器に関する最初の編年的考察は、森浩一・田中英夫により石津川下流域に所在

する石津遺跡から出土した土器群によって実施された(森・田中1954)。石津遺跡は石津川流域で最も河口付近に位置する遺跡で、堅穴住居の存在が確認されている。資料は石津川の改修工事の際に発見され回収された壺・甕・高杯・小形丸底土器・小形器台などの土器群で、出土層位の所見から第V様式に統一須恵器I以前の土師器について「土師器I型」「土師器II型」に分別、さらに「III型」の存在を示唆した。そして布留式はII型を中心とした前後を包括すると推定している。また改修工事後の通水により河床から出土した土器群についても、先の編年観に従って「石津I型式」「石津II型式」に発展させ報告した(森・田中1961)。例えば石津I型式には東海系のS字状口縁台付甕が含まれ、石津II型式には小形丸底土器や肩部に波状紋を有する直口壺などがある。しかしこれらはいずれも不幸な状況下で回収された資料であり、担当者が指摘するように詳細な編年研究には不足する点がある。しかし概ね布留式前半の範囲で捉えられるこれら土師器の検討により、当該期に属する石津遺跡の存在を明らかにできた意義は大きい。

和泉地域の庄内式土器については、初めて「庄内式」土器の存在を提唱し古式土師器研究の方向を決定づけた田中琢の研究で触れられている(田中1965)。田中は庄内式土器の畿内での分布論に及び、摂津・河内・山城での存在が確かなことから、和泉でも庄内式土器が出土する可能性を示唆した。

これより以後、和泉地域では資料数の増加と共に編年の研究が進められることになる。より具体的な和泉地域の土器様相は、酒井龍一が和泉市上町遺跡の出土遺物を整理し、その結果を基礎として先駆的研究を行い(酒井1975)、さらに泉大津市豊中遺跡出土土器の検討を通じてその考えを発展させている(酒井1976)。酒井は各遺跡出土の土器様相を通じ、和泉地方では第V様式以後も伝統的技術体系が存続するという結論に達し、こうした「在地系」土器群を表象するものとして、認識論的に「伝統的第V様式」の概念を設定した。そして第V様式と布留式の間を「過渡期」とし、これを都出比呂志の「第六様式」(都出1974)にほぼ該当するとした。またこの期の中で、時間的な推移による器種構成の変化に着目して、この期が「過渡期I・II・III」と段階的に捉えられることを指摘している。即ち第V様式以後続しながらもなお庄内式甕の出土をみない段階として過渡期I(池上遺跡I・K・C・II・B-10地点土器窯)を設定し、続く過渡期IIについては庄内式甕の出現期を古相(上町遺跡「井戸」状遺構)、数量的増加をみせる盛行期を新相(豊中遺跡「河川」状遺構)に位置づけた。そして新相の段階では「小型三種」土器群が未完成であって、そのうちの小形器台のみが出現する事実を報告している。また過渡期IIIは標識とした豊中遺跡C地区出土資料について時間幅が存在する危惧を抱きつつも、庄内式甕の減少と「伝統的第V様式」土器群に加え、「極めて「布留式」を呈する」土器群が出現する段階とし、併行する遺跡として七ノ坪遺跡を挙げた。酒井は広義で捉えた布留式の中で、「小若江北式」土器群がやや後出の要素をもつことを認めながらも、過渡期IIIをそれより僅かに先行する段階に位置づけている。このことより過渡期IIIは、布留式古段階を念頭に置いたものと把握されるが、これをあえて布留式に含めなかったのは「伝統的第V様式」土器群の存在を重視したためと思われる。以上のような編年観は資料数の増加をみた現在でも、大筋において大幅な修正の必要は認められず、当地における土器相の変遷を的確に概観した所見として高く評価される。

鈴木陽一は、石津川の上流域に立地する堺市小阪遺跡出土の土器群について、遺構ごとの編年観を述べている(鈴木1992)。鈴木はまず庄内式・布留式土器について、古墳出現期後の古相を呈する土師器との立場から両者を「古式土師器」とし、また下限については須恵器出現によって土師器の様式・構造が変質する直前までの土器様式とした。そして小阪遺跡出土の古式土師器の土器様相を分析し、和泉地域

北部の遺跡出土土器との比較対照からその編年的位置づけに及んでいる。編年の基準としては、大和・河内地域では壺が採用され易いが、和泉では壺がその両地域とは異質な様相を呈する点を指摘、一瀬和夫による河内地域の加美遺跡での試行(一瀬1988)を例に挙げて高杯の変遷過程に着眼しつつ、和泉でも編年の標識土器として高杯が有効性をもつことを指摘する。変遷案では弥生時代後期末～古墳時代前期の土器について「第I段階」～「第IV段階」の区分が設けられている。各段階はさらに細分され、第I段階を2小期、第II段階を3小期に分割されている。その時代的区分については、第I段階-1を弥生時代後期末(上町遺跡「井戸」状遺構)、2を庄内期古段階(府中遺跡第1号住居址、池上遺跡)とし、さらに第II段階-1を庄内期中段階(池上遺跡、小阪遺跡溝32)、2を庄内期新段階(小阪遺跡溝30-a、豊中遺跡大溝、豊中・古池遺跡「河川」状遺構、小阪遺跡溝24)、3を布留期古段階(東雲遺跡溝-1)に当て、第III段階(東雲遺跡溝-2)及びIV段階(船尾西遺跡S G-001、小阪遺跡土坑40)を布留期新段階に相当させている。本考察はあくまで小阪遺跡出土土器の編年学的序列関係に主眼が置かれた編年観であり、大まかな土器の変遷が提示されている。

和泉の庄内式併行期の土器について樋口吉文は、地域内でも庄内式土器の共伴が北部と南部で受容に差異のあることを指摘した上で、当該期について「庄内並行1段階」～「庄内並行5段階」の都合5段階の編年細分試案を提示した(樋口1992)。1段階(府中遺跡S D09、西大路遺跡922-O R)は上六万寺式から北島池式に概ね相当するとし、複合口縁壺・手焙の一般化、加飾性の強い壺・高杯の存在をあげている。第2段階(府中遺跡第1号住居址内土器1群、西大路遺跡533-O X)は庄内式壺の共伴をみなないが存在の確実視される段階として捉えた。3段階(四ッ池遺跡S K30、四ッ池遺跡NW-16区画土器窓、古池北遺跡大溝)は庄内式壺(米田編年II～III)の共伴が一般的となり、壺の体部内面へラ削りの一般化、丸底化追求の傾向を指摘した。4段階(小阪遺跡溝8、四ッ池遺跡S A01住居址内埋土)は米田編年庄内期III～IVに併行し、第V様式系土器群でも丸底の胴体が増加するとした。5段階(四ッ池遺跡S A01住居址内カマド一括、四ッ池遺跡S A03住居址内床面各遺構、船尾西遺跡S G001)は最終末の庄内式壺を伴い、V様式系土器群の消滅、丸底で内面へラ削りの壺、及び器台・小型丸底壺のセットの一體化など、布留式直前の段階と把握し、寺沢編年の布留1式期にあたるとする。これら細分について第1段階～第4段階までは「弥生第V様式の形態・技法を踏襲し発展させた土器群」が主流で、また畿内中心部地域に比して変遷も遅いが、第5段階以降はV様式系土器群の消滅や生駒西麓の胎土を有する土器の稀少化など、速やかな変遷を辿るとした。またこの段階で吉備系・北陸系・東海系土器の出土量が増大することを指摘、布留式という畿内齊一の土器様式の和泉での確立、及び古墳文化の到来をして「広域政治社会」への編入段階と捉えた。土器様相の変遷と庄内式壺の受容の各段階に画期が求められている。

坪之内徹は、和泉地域南部(泉南)に位置する泉南郡熊取町大久保遺跡の当該期土器資料について、細分の見通しを述べた(坪之内1992・1996)。これらは自然流路出土の土器群であるため、型式学的方法による細分が試みられ、さらに遺跡の立地的な観点から紀伊地方、特に紀ノ川北岸地域の出土資料を視野に入れた比較検討が行われている。壺・高杯、その他の器種の形態的特徴を抽出して分析を加え、古相を示す庄内期前半(纏向2式)、新相を示す庄内期後半(纏向3式)の2様相に遺物群を分離している。古相では伝統的第V様式壺が圧倒的に優位であり、新相で上田町II式壺、小型丸底壺、小型器台が出現するが、この傾向は泉南・紀北の他遺跡に共通する特徴であるとしている。また上田町II式壺を比較的多く出土する遺跡は、豊中・古池遺跡など限られた存在であり、池上遺跡、七ノ坪遺跡、府中遺跡、上町遺跡など大津川流域の遺跡では出土量が少ない点から、中南河内、大和東南部などの中枢部以外の地域

では、庄内式壺が必ずしも圧倒的優位を占めないとした。すなわち周辺地域は古墳時代初頭の段階では一般的に伝統的第V様式が根強く残存する社会であって、庄内式壺の出土量の多寡については、旧国単位、さらに小地域間の格差として理解されている。大久保遺跡資料は、層位的把握が伴わない点で資料の一括性には欠けるが、遺跡の位置する泉州地域は当該期遺跡の分布が稀薄で、また土器資料も限られているため、その空白を埋める貴重な報告・分析といえよう。

和泉地域の当該期土器様相は、他地域で組まれた土器編年との併行関係を知る上でもその変遷が追究されている。古式土師器研究に多大な影響を与えた纏向遺跡土器編年において、関川尚功は大和・纏向遺跡を中心に畿内各地の当該期土器を比較し併行関係を検討した(関川1976)。和泉地域については資料的制約を受けながらも、前述した酒井の研究成果に沿って、上町遺跡、豊中古池遺跡の例を挙げつつ対比を行い、纏向1~3式と過渡期I~IIIがほぼ併行関係にあるとしている。

寺沢薫は、まず大和での古式土師器の細別試案を提示した上で、畿内各地との併行関係に及んでいる(寺沢1986)。そして「須恵器の普及と定型化によって土師器に大きな様式構造上の変化が認められる時点まで」を古式土師器の範疇に規定し、その様式変遷の実際として庄内式を0式~3式、布留様式を0式~4式に細分を行う。そして和泉を含め各地域において様式内容に若干の相違を認めつつ、時間的併行関係の検討の結果として和泉地域諸遺跡・諸遺構出土土器の併行資料を挙げている。寺沢編年諸様相と和泉地域当該期遺跡出土資料の、布留式前半までの併行関係についてみると、まず酒井が「過渡期II」とした上町遺跡第1次井戸出土資料を庄内0式期まで通らせる。中枢部において出現期の庄内形壺が存在する庄内1式期は、各地域における様式内容の地域的偏差を重視し、尖底壺の存在から府中遺跡第1次1号住居跡をこの期に当てる。この地域的偏差は、和泉・南山城・北河内の地域では布留0式までの存続を認めており、続く庄内2式期には併行資料が多く周辺地域における典型的な庄内形壺の欠如を指摘、さらに庄内3式期には四ッ池遺跡83地区S K30焼土壇、古池北遺跡大溝が併行するとした。そして布留様式に至り、各地域における様式内容に地域的偏差が減少するとし、庄内式~布留式の過渡期に位置づけた布留0式期に、四ッ池遺跡83地区S A-01住居跡、土器溜(S R)、及び豊中・古池遺跡河川状遺構の下限を置く。次の布留1式期併行資料に船尾西遺跡S G-001、七ノ坪遺跡第2地点土器群を挙げ、布留形壺の他に微量ながらも布留式影響庄内形壺、弥生形壺の共存を指摘する。続く2式期の河内における併行資料は小若江式を典型とするもので、和泉では七ノ坪遺跡(III)土壤1、溝1、府中遺跡(中央線)S K-54を古相、府中遺跡(中央線)SD-12、SX-03上層を新相としている。

一方、米田敏幸は八尾南遺跡出土土師器についての予察的見解(米田1981)をさらに発展させ、庄内式壺の変遷を中心に据えて河内地域での編年作業を進めている(米田1990・1991)。また河内の近接地域への庄内式壺の移動について、摂津・和泉・近江地域へは庄内式古段階から庄内式期Vまで移動が行われたとし(米田1992)、庄内式期I~Vの各段階における河内周辺地域の出土例を掲げた。その併行関係を示す表によれば、和泉地域では庄内式期Iを府中遺跡第1次第1号住居址土器群、IIを豊中遺跡「河川」状遺構、IIIを四ッ池遺跡、IVを脇浜遺跡、そしてVを船尾西遺跡SG001に相当させている。主として和泉地域に搬入された庄内式壺の形態から併行関係が求められている。

古墳出現期の各地の土器についてまとめた置田雅昭は、河内・和泉・摂津について庄内式壺が圧倒的優位を保つ「第一次的な分布地域」とし「生産者から直接交易物としての壺を継続的に入手していた」と推定する(置田1982)。そして大和・山城・播磨・紀伊は庄内式壺の出土が少なく、直接継続的ではない「第二次流通」経路と考えた。

庄内式土器の移動の問題を、西日本的な幅広い視点から取り上げた阿部嗣治は、河内周辺地域における生駒西麓庄内式壺の出土量は、摂津・和泉・大和が他地域を圧するとして、摂津・和泉では、小形壺以外の大部分は生駒西麓庄内式壺の供給を受け、在地産壺が減少すると指摘している（阿部1985）。

やはり西日本を対象とした広範な地域で土器の移動を論じた森岡秀人は、畿内での庄内式土器の分布に関してその構造にも踏み込み、畿内内部でも庄内式土器の普及率に地域的偏差が存在することを指摘する（森岡1985）。これは後に「近畿内偏差」と称されることになるが（森岡1991）、庄内式土器の浸透度がほぼ同じ20%前後の値を示す和泉・東摂地域について、和泉が弥生型壺に強い独自性があり地型庄内式の製作に消極的であるとし（存在形態A型）、対する東摂では庄内式影響下の庄内模倣壺・弥生型壺を有する点（存在形態B型）で受容のあり方に大きな差異を認め、和泉が新たな土器作りに関して保守的な地域であった点を強調している。

以上の如く和泉地域の編年研究は、資料数の増加に伴い徐々に進展をみせている。各研究者による基準遺跡・遺構の編年序列関係は大筋において概ね齟齬はないと考えられるが、特に弥生後期末と庄内式併行期の境界の設定、並びに庄内式併行期の内部構造については細部に相違点がある。いずれにせよ和泉地域は、大和・河内など畿内中枢部に比して庄内式併行期～布留式期の遺跡は決して多いとはいえない、また比肩しうる内容を備えた遺跡にはほとんど恵まれなかった。このため編年研究上に有効な一括性の高い資料が限定されること、一遺跡内で長期に及ぶ土器様相を示す例が僅少であることなど、資料の質的・量的制約が細分の障害となっていた状況は否めないであろう。

第3項 和泉地域の遺跡概要

編年対象となる第V様式後半～布留式前半期を中心とする時期に営まれた、和泉地域の遺跡の状況を概観することにしたい。網羅的に拾えばさらに数は増加するが、主要な当該期の遺跡は、およそFig. 439に示すような分布状況を呈する。

堺市内では石津川流域を中心に、下流から石津遺跡・船尾西遺跡・四ッ池遺跡・下田遺跡・鶴田町遺跡・小阪遺跡・大庭寺遺跡・昭和池遺跡などの存在が知られている。これらのうち、石津・船尾西・下田・鶴田町の4遺跡は下流域の沖積平野上、四ッ池遺跡は下流域低位段丘北端の台地上、および周辺沖積平野上に営まれている。また中流域には小阪遺跡・大庭寺遺跡・昭和池遺跡が位置する。四ッ池遺跡では台地上を中心に弥生時代中期を最盛期として大集落が形成される。台地から見おろすように平野上には方形周溝墓群が形成され、生活域と墓域とが地形によって区画されていた。しかし後期以降、集落は少なくとも台地上から姿を消し、石津川左岸寄りの沖積平野上にその位置を移すようである。石津川流域における後期前半の遺跡は稀薄で実体を把握しにくいが、四ッ池遺跡では沖積平野で若干の土器が出土しており、小規模な生活の痕跡が窺える。また四ッ池遺跡では同じく沖積平野において古墳時代初頭から前期までの集落が形成され、竪穴住居などが検出されている（樋口・土山1984）。その北西側には船尾西遺跡があり、井戸内から古墳時代前期初頭の古式土師器が出土した（樋口1978）。また船尾西遺跡の東側の沖積平野上には石津遺跡が立地し、古墳時代前期前半の竪穴住居などが検出されている（森・田中1961）。下田遺跡の南方500mの至近距離には鶴田町遺跡があり、弥生時代後期・古墳時代前期の竪穴住居・掘立柱建物などが検出されているが、主体となるのは弥生時代末葉である（池峯1995）。小阪遺跡は石津川の支流のひとつ、陶器川が右岸で合する付近に位置し、古墳時代初頭から前期の集落が検出されている（大阪文化財センター編1992）。初期須恵器窯が発見されたことで名高い大庭寺遺跡は、石津

川とその西を流れる支流の和田川に挟まれた中位段丘面上に位置する遺跡で、古墳時代前期までの集落は未発見ながら、1987年度の調査によって前期初葉に属する井戸が検出されており(森村・有井編1989)、調査地周辺での集落の存在が十分に予想される。和田川の左岸段丘上に立地する昭和池遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居などで構成された小規模な集落が検出された(土山1993)。土器量はいずれも僅少であるが、弥生時代後期の土器は後半を主としながら前半のものを含み、また古式土師器は布留式前半に属するものであろう。石津川河口南西、大阪湾海浜部の高石市域には羽衣砂丘遺跡があり、農業経営に適さない砂堆上に立地することから、專業的漁労集団の集落と考えられている(宇田川1959)。明確な遺構は未検出であるが、古墳時代初頭から古墳時代前期に至る土器が出土している。

石津川水系から南へ目を転じると、石津川左岸に広がる信太山丘陵を挟んで、南西側を流れる大津川水系やその周辺に大小の遺跡が点在している。和泉山脈に源を発する横尾川・松尾川・牛滝川の3河川は、それぞれ丘陵を開析しつつ下流域で合し、大津川と呼称を変えて大阪湾に注ぐが、主としてその中

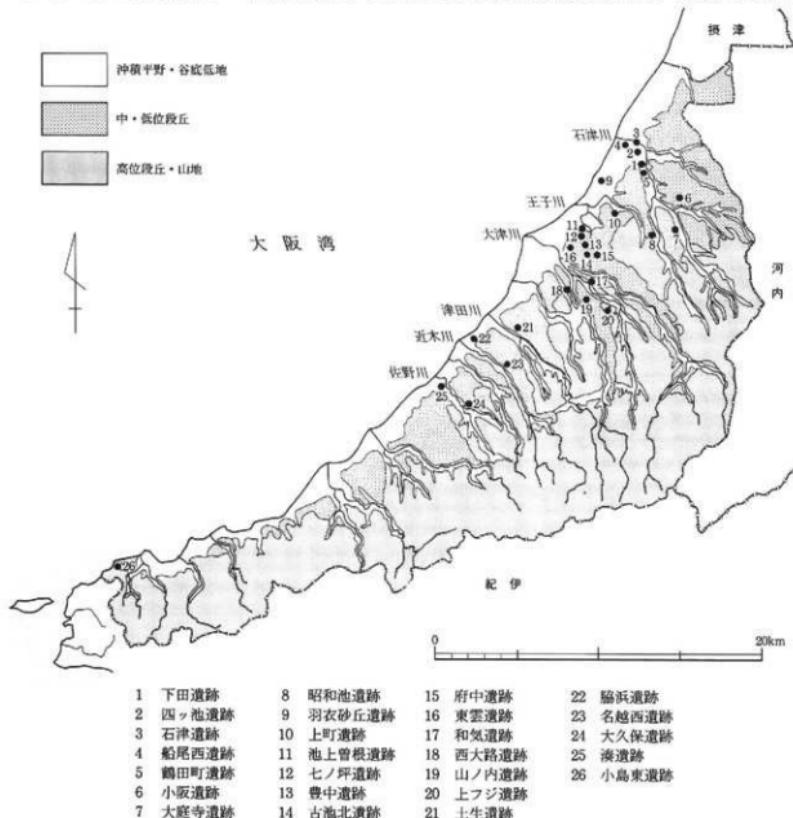


Fig. 439 和泉地域の弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の主要遺跡分布

下流域の中位段丘面上に当該期の遺跡が展開をみせている。大津川北東の段丘縁辺部には泉大津市と和泉市にまたがる弥生時代の大遺跡として名高い池上曾根遺跡がある。櫛尾川・松尾川下流域ではその他、泉大津市域の豊中遺跡・古池北遺跡・七ノ坪遺跡、和泉市域の上町遺跡・府中遺跡・和氣遺跡などがある。そのほとんどは櫛尾川の右岸側に立地するが、和氣遺跡は櫛尾川と松尾川に挟まれた幅狭い段丘面上に営まれている。これらのうち、大津川の本流からやや離れて営まれた池上曾根遺跡・豊中遺跡・七ノ坪遺跡・上町遺跡などの各遺跡は、直接的には水源を大津川に求めたのではなく、現在では化石谷としてほぼ完全に埋没しているが、かつて信太山丘陵先端の段丘面を刻んだ開折谷に依存したと考えられている(石神・鈴木1978)。池上曾根遺跡からは古式土師器の出土が知られているが、集落は弥生時代中期を頂点としながら、以後は集落が分散縮小化することは四ヶ池遺跡と同じで、古墳時代初頭以降の土器出土量も激減している(大阪文化財センター編1979)。池上曾根遺跡の南側に隣接した豊中遺跡では、「河川」状遺構から多量の古式土師器が検出されている(豊中・古池遺跡調査会編1976)。古池北遺跡は豊中遺跡の南西に位置する遺跡で、第1次調査では古墳時代前期の堅穴住居(井藤1974)、第2次調査では大溝などが検出されており(石神・鈴木1978)、大溝からは古式土師器が大量に出土した。七ノ坪遺跡は池上曾根遺跡と豊中遺跡の西に隣接した遺跡で、これまで数次に及ぶ調査が実施されている。主要な遺構として庄内式併行期~布留式期の堅穴住居、方形周溝墓(中井・井藤1974)や、古墳前期の古式土師器がまとまって出土した溝などが検出されている(坂口・貴志・楠山1982)。上町遺跡は石津川と大津川のほぼ中間を流れる小河川、王子川の左岸段丘面上に位置する古墳時代初頭の遺跡で、検出された「井戸」状遺構から古式土師器がまとまって出土している(灰掛・酒井1975)。府中遺跡と和氣遺跡は大津川水系に直接依存した遺跡である。府中遺跡では古墳時代初頭の堅穴住居に伴って多量の古式土師器が出土し(灰掛1978)、また和氣遺跡でもこれと相前後する時期の堅穴住居が確認されている(久米1985)。

和泉中部域の岸和田市では、山ノ内遺跡・西大路遺跡・上フジ遺跡・土生遺跡などの存在が知られている。さらに南西を流れる津田川流域の土生遺跡を除いて、いずれも牛滝川下流域に分布する遺跡である。松尾川と牛滝川に挟まれた丘陵先端の段丘面上には山ノ内遺跡が位置しており、弥生時代後期後半の堅穴住居からなる小規模な集落が検出されている(渡辺・森井・虎間1988)。西大路遺跡は牛滝川下流域左岸に立地し、堅穴住居などで構成された小規模な集落遺跡である。弥生時代後期後半から古墳時代初頭まで継続して経営され、住居や旧河道などの遺構から古式土師器がまとまって出土している(橋本・岡戸・岡本1988)。牛滝川をやや遡った丘陵上に立地する上フジ遺跡は弥生時代後期後半の高地性集落で、土器資料は稀薄ながらも数棟の堅穴住居が検出され、なかでも大型の多角形住居からは銅鐸形銅製品が出土している(駒井1993)。なお、牛滝川が開析した山直谷と呼ばれる狭隘な谷地形の開発は、弥生時代の段階では技術的制約から水田化が難航したとみられ、高地性集落以外の集落の週上は下流域を除いて果たし得なかったようである。牛滝川中流域右岸の段丘面上に立地する芝ノ垣外遺跡では、古墳時代前期後半の方形堅穴住居、掘立柱建物などで構成された小規模な集落が検出されており、この時期までには開発の手が谷の奥地まで及んでいたことが分かる。弥生中期の段階で中流域まで集落の形成が推し進められた石津川水系と比べ、牛滝川水系では開発の週上がかなり遅れたとみられる。

土生遺跡は津田川下流域右岸の段丘面上に立地し、住居跡(近藤・土師1978)、掘立柱建物(近藤・尾谷・酒井1976)などの他、周溝状特殊遺構(岸和田遺跡調査会編1975b)が検出されている。土器は弥生時代末葉から古墳時代前期までのものがあるが、なかでも多量に製塩土器が出土しており、遺跡内で土器製塩の煎熬が行われたと考えられる点において、他の内陸部の遺跡の状況とはやや趣を異にする。

さらに南西にあたる泉南地域には、貝塚市の脇浜遺跡(大阪府埋蔵文化財協会編1986)、泉州郡熊取町の大久保遺跡(坪之内1996)、泉佐野市の湊遺跡(鈴木1982)、岬町の小島東遺跡(広瀬1978)などの存在が知られるが、岸和田市以北の状況と比べて遺跡数が激減している。また脇浜・湊・小島東の各遺跡は、土生遺跡と共に製塩土器を多量に出土することで知られており、和泉地域における弥生時代から古墳時代にかけての製塩活動を特徴づけている。

以上のように遺物量が僅少な遺跡も含めれば、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半における和泉地域全体の遺跡はかなりの数にのぼる。しかしながら全体的にみて遺物出土量に乏しく、大和・河内など先進地の遺跡と比べてその内容には著しい格差がある。従って各遺跡出土土器を下田遺跡での編年観に当てはめようとした場合、一括性を期待できる資料はかなり淘汰されよう。また前述のように、概ね津田川以南の和泉南部地域では遺跡数が大幅に減じている。この傾向は、一般に南部地域ほど後後に控える和泉山脈が迫り出し、河川の総延長が相対的に短いことから、可耕地としての懷にゆとりがない地形的制約に起因すると思われる。南部地域では遺跡数が限定されることに加え、その中でも製塩遺跡など特殊性を帯びた遺跡が多く、あるいは一括性を信頼するに足る資料に恵まれていない。また既述の如く紀北との関連性を考慮する必要もあるため、ここでは泉南地域を除外した編年作業を行なうが、大久保遺跡の出土資料等からみる限り、北部の土器様相と決定的な齟齬は生じていないようである。なお和泉地域のうち、最密には堺市・和泉市の周辺が泉北と呼ばれる和泉地域北部であるが、本稿では一括資料の存在を重視して和泉のはば中央に位置する岸和田市の牛滝川流域までを編年の対象とした。また資料の抽出にあたっては、住居、土坑、井戸、溝、土器窯等の遺構出土土器に重点を置き、包含層、河道内堆積土など一括性について疑義が生じる余地の多い資料は基本的に排除した。

第4項 編年試案

1. 下田遺跡諸様相との対応関係

前節までに述べてきた下田遺跡内部での土器様相の変遷について、本項では時間的な解釈を加えると共に地域的・空間的な広がりを想定した土器様相として再構築を行う。具体的には弥生時代後期後半～古墳時代前期古段階に至る土器様相の連続的変遷について、和泉地域北部の第V様式として様相1～4を下田I式と設定し、さらにこれに後続する和泉北部の古式土器の様式として様相5～9を下田II・III式に再編した。器種ごとの編年試案をFig.440～450、および付図6～11に示す。

第2節で記述した土器諸様相と、土器編年案区分との対応関係をTab.41に示す。なお、編年試案の土器番号については、下田遺跡資料を図中で報告書番号をそのまま記すと共に、本文中では()内に入れた。さらに他遺跡のものは、図中、本文中とも当該報告書の挿図あるいは図版番号と遺物番号を一で連結し〔 〕内に表記した。

Tab.41 様式区分と土器様相の対応関係

大様式	下田I式				下田II式				下田III式
	1	2	3	4	1	(古)2(新)	3		
土器様相	様相1	様相2	様相3	様相4	様相5	様相6	様相7	様相8	様相9
時代区分	弥生時代後期				古墳時代初頭(庄内式併行期)				古墳時代前期(布留式期)
	後半古段階	後半中段階	後半新段階	末	古段階	(古)中段階(新)	新段階	古段階	

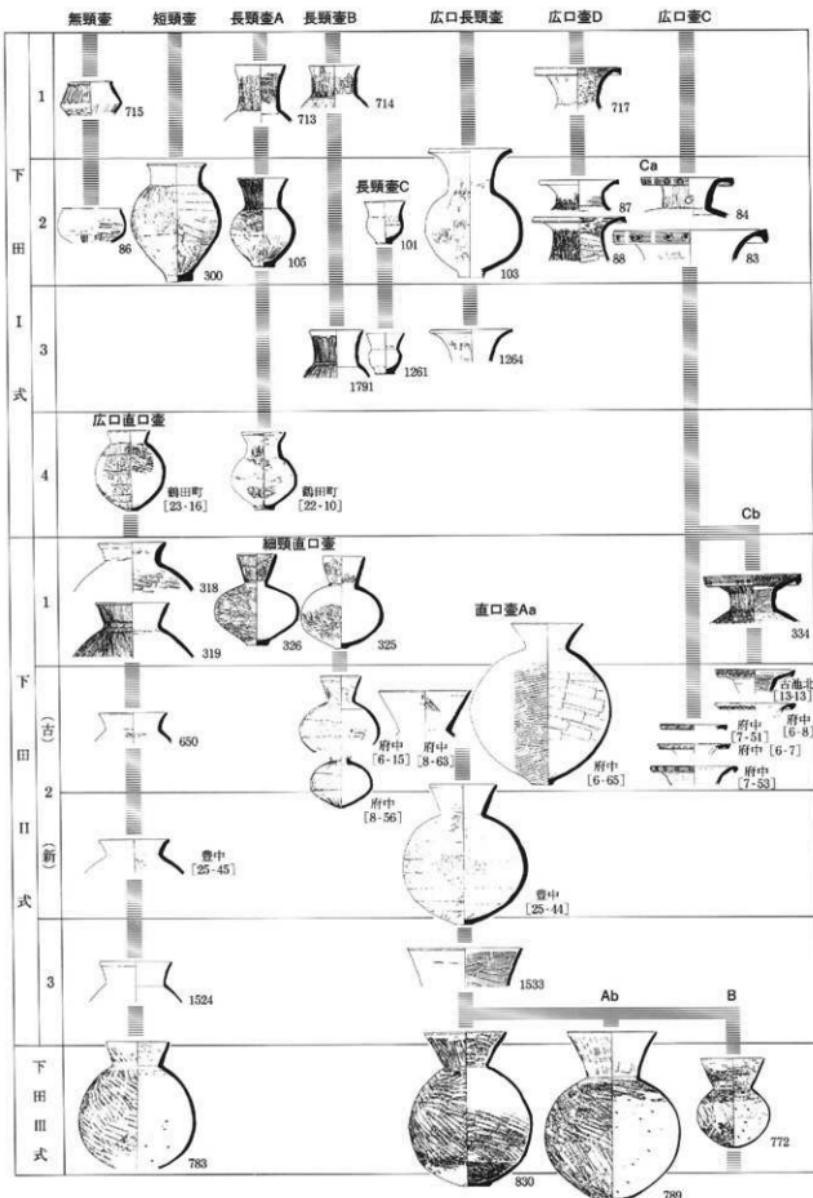


Fig. 440 下田 I ~ III 式編年試案(1) S = 1/10

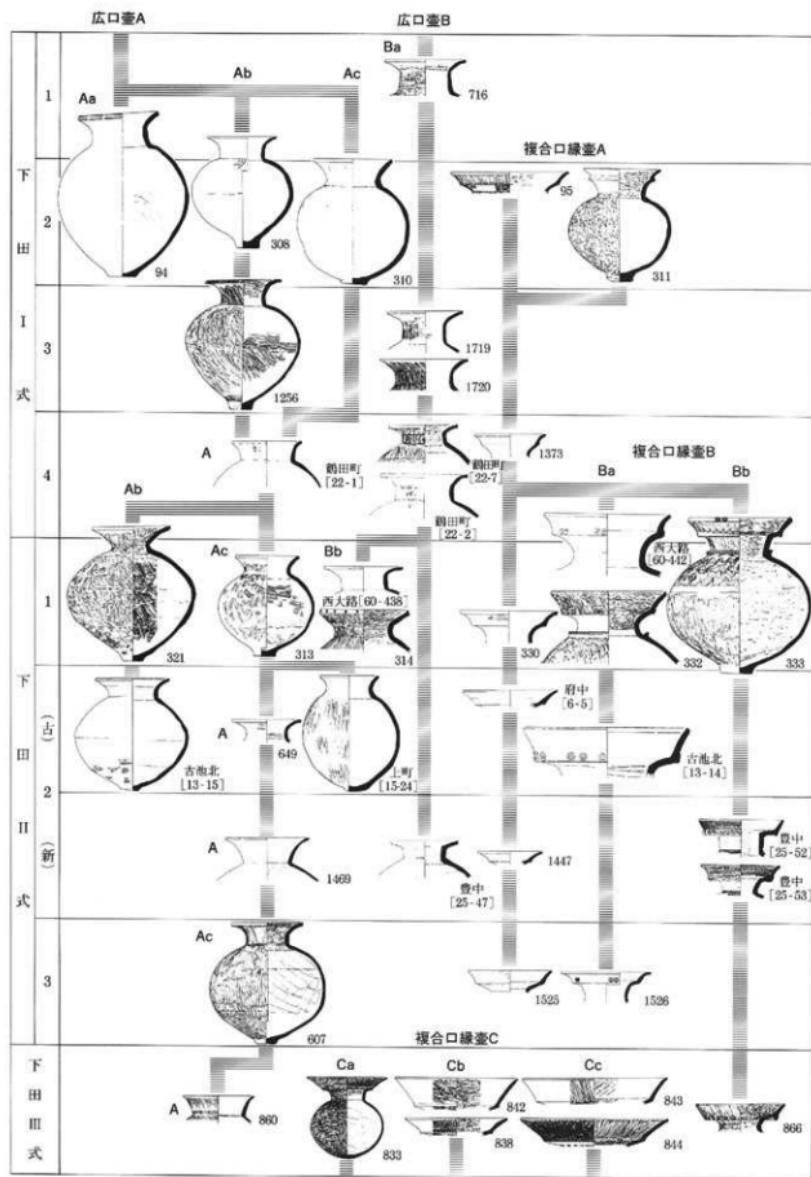


Fig. 441 下田 I ~ III 式編年試案(2) S=1/10

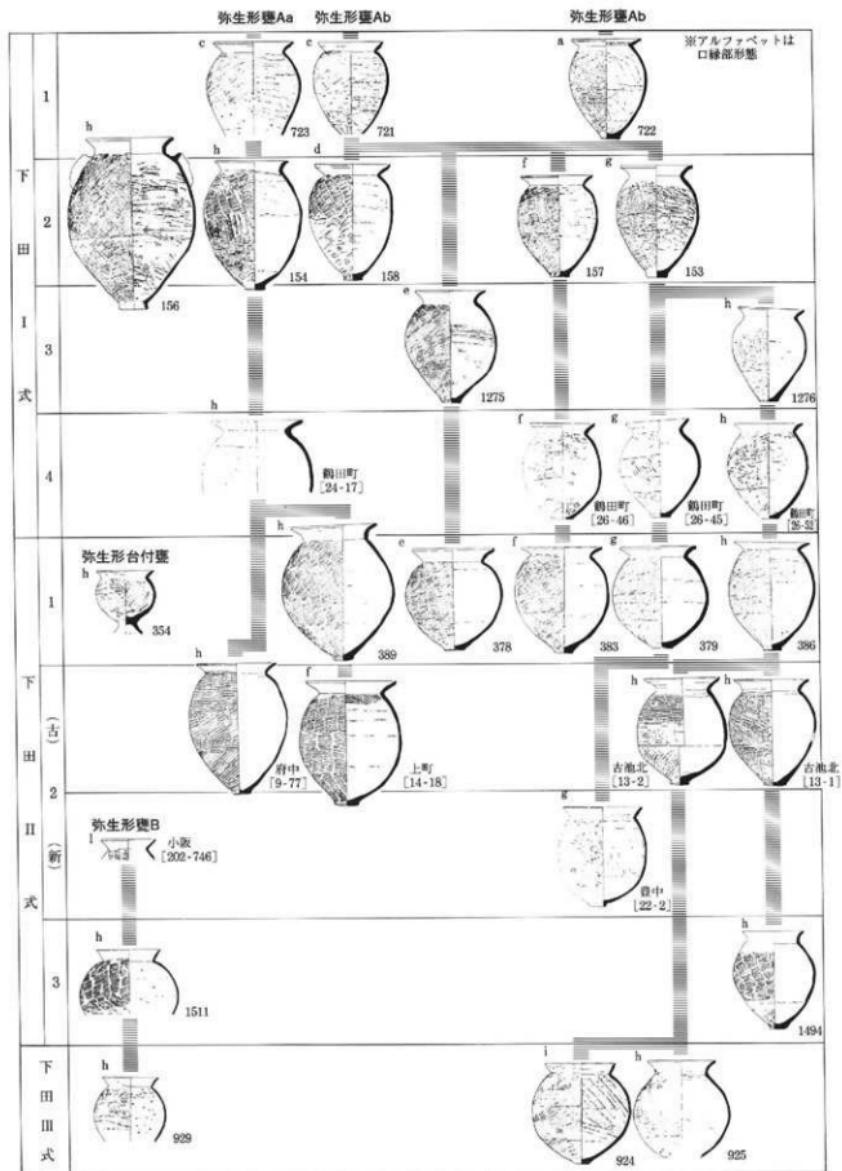


Fig. 442 下田 I ~ III式編年試案(3) S=1/12

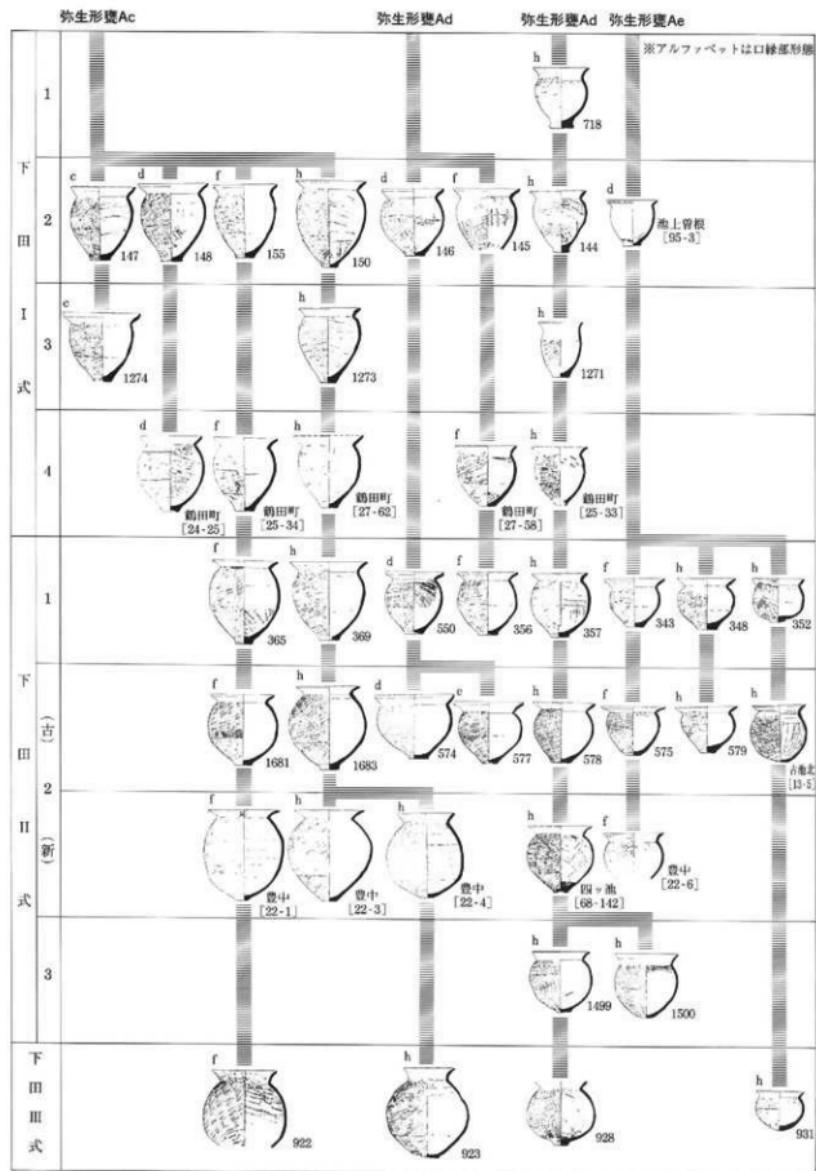


Fig. 443 下田 I ~ III式編年試案(4) S=1/12

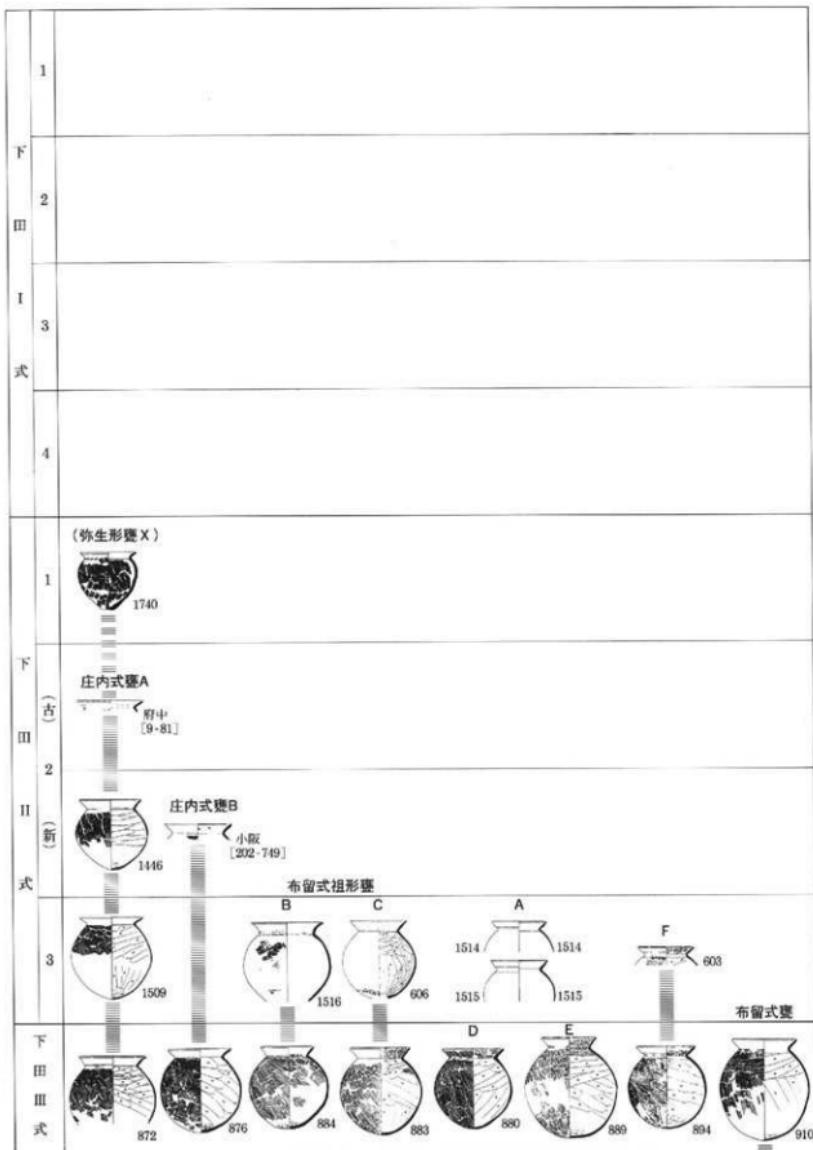


Fig. 444 下田 I ~ III 式編年試案(5) S = 1/12

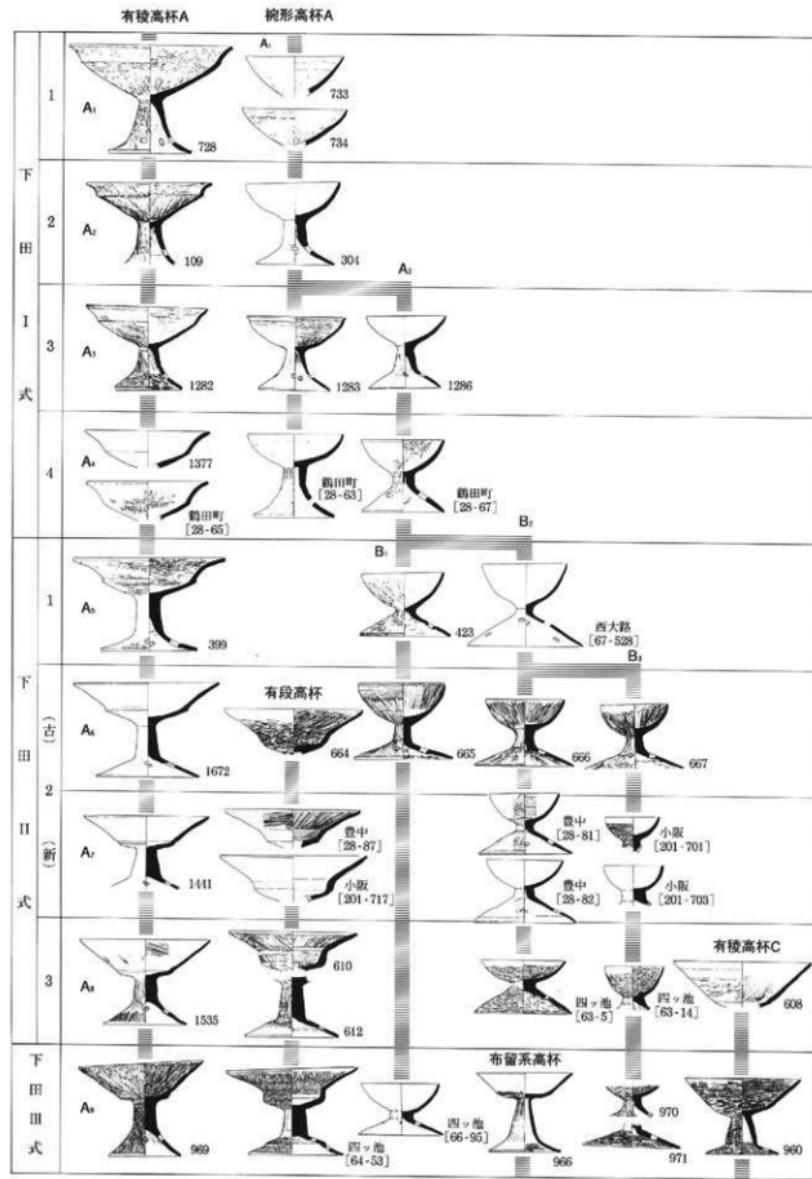


Fig. 445 下田 I ~ III 式編年試案(6) S=1/8

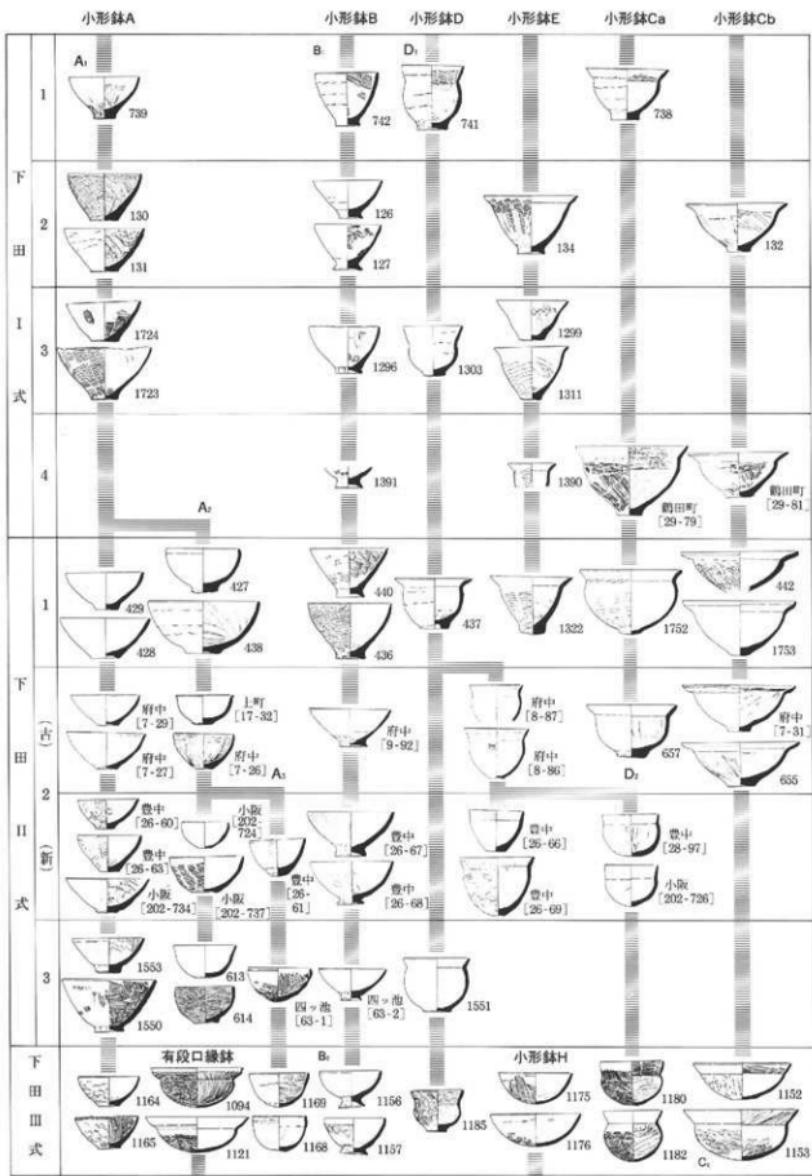


Fig. 446 下田 I ~ III式編年試案(7) S=1/8

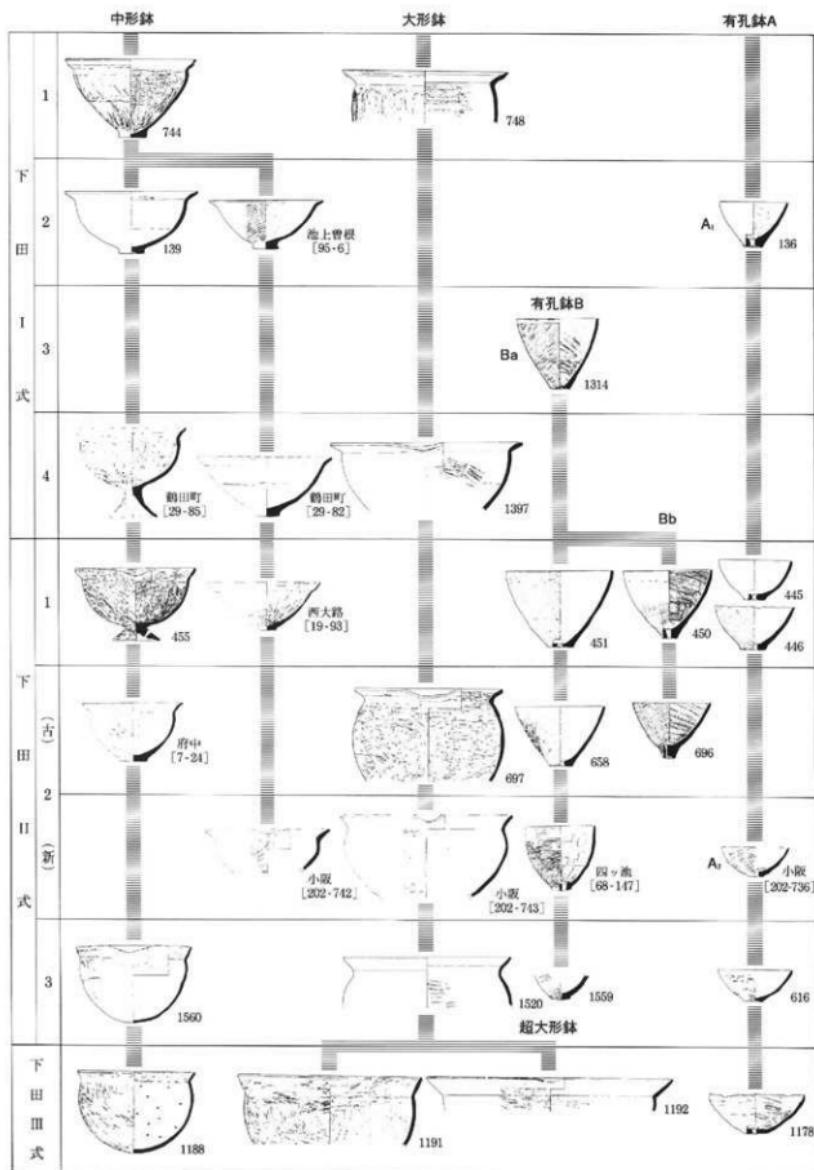


Fig. 447 下田 I ~ III 式編年試案(8) S=1/10

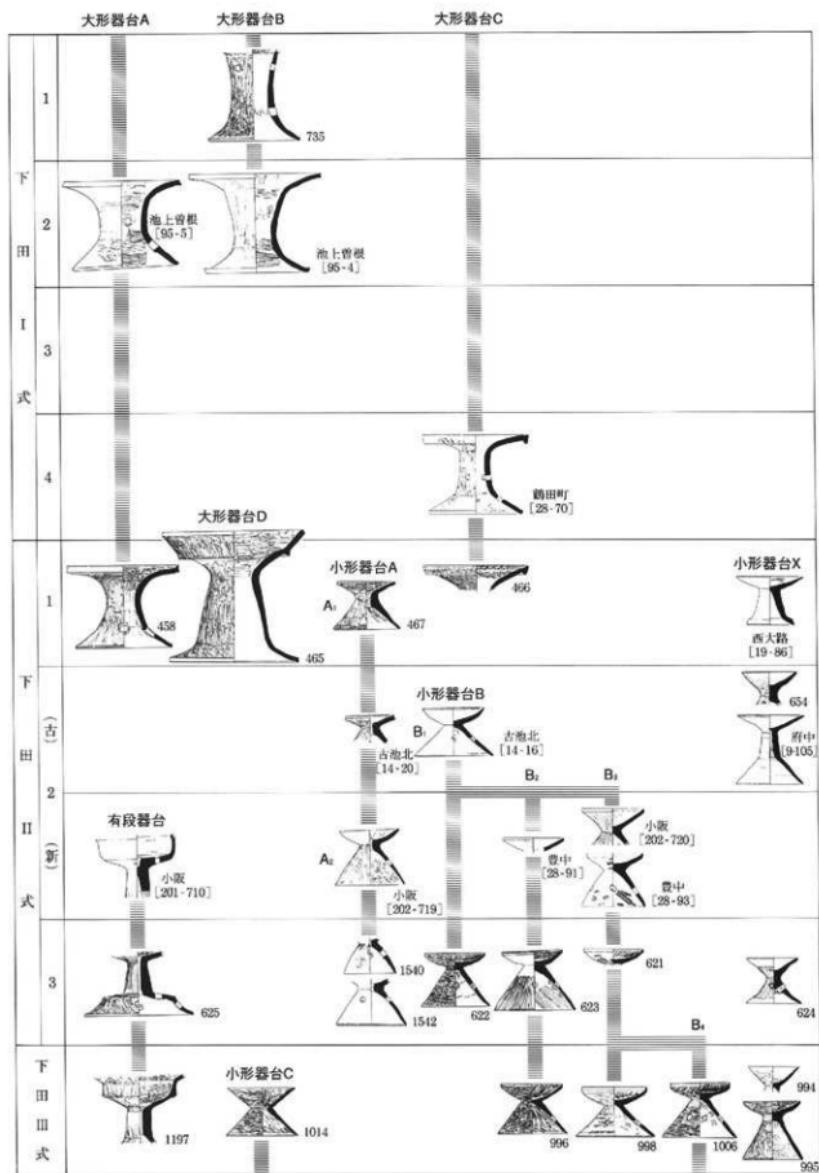


Fig. 448 下田 I ~ III 式編年試案(9) S = 1/8

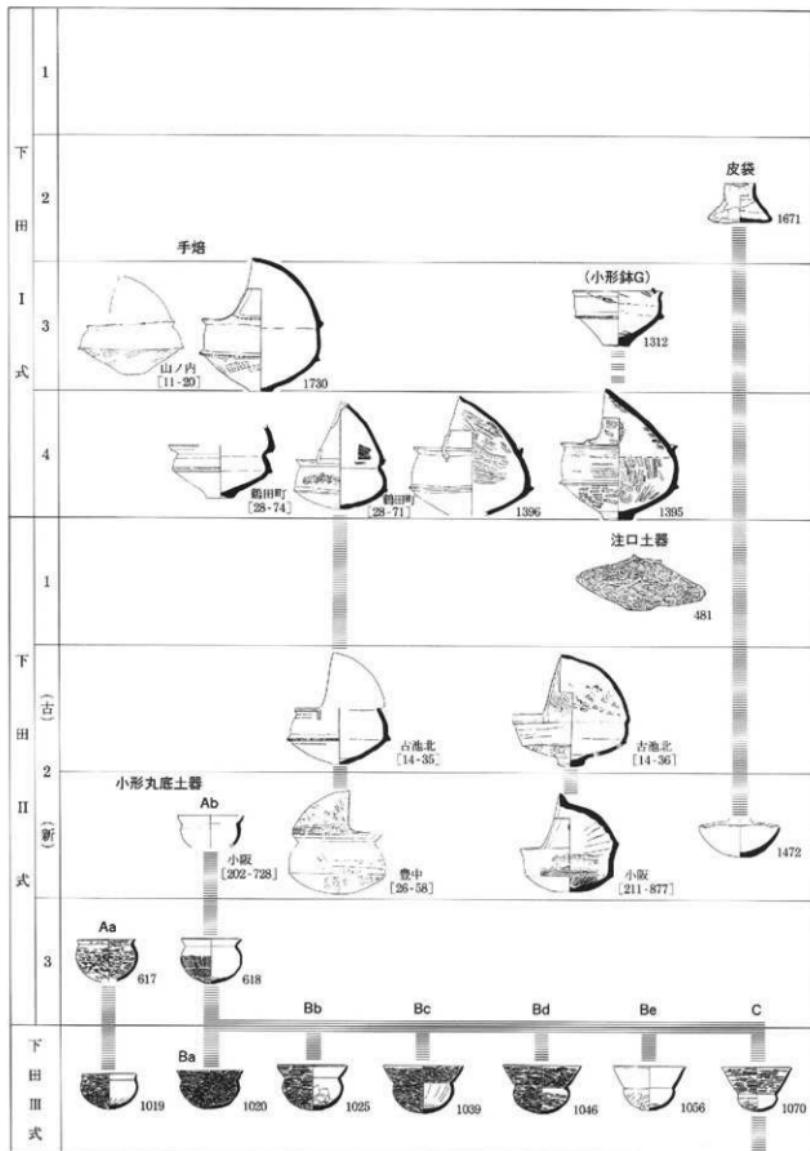


Fig. 449 下田 I ~ III 式編年試案(10) S=1/8

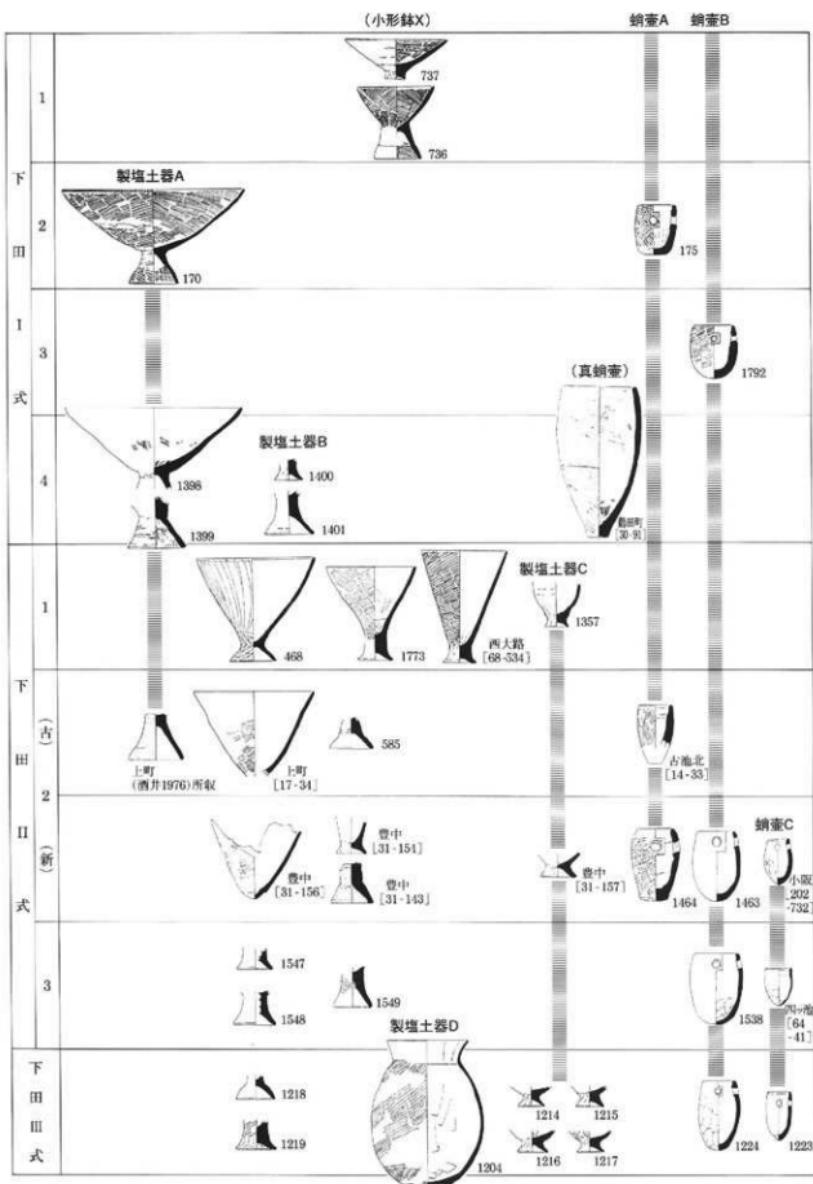


Fig. 450 下田 I ~ III 式編年試案(11) S=1/8

2. 下田I式以前

後期にかかる弥生土器全体の動向を把握することは本稿の目的ではない。しかし後期における下田I式の相対的位置づけを明らかにするため、I式に先行すると考えられる資料群について、若干触れておく必要があろう。ここではI式以前の様式名を設定しないが、四ッ池遺跡第83地区土器溜B(樋口・土山1984)、池上遺跡S G106(大阪文化財センター編1979)、府中遺跡S X03下層(高島・松村1985)などはI-1式の直前の小様式を構成する資料群と考えて大過ないであろう。

四ッ池遺跡土器溜Bは個体数に恵まれない資料で、器種には壺、甕がある。壺は広口壺、長頸壺の2種があり、広口壺では口縁端部を短く垂下させ、あるいは肥厚させている。甕はタタキ成形にハケ調整を併用したものがあり、口縁部形態はいずれもbである。甕の体部はかなり長胴である。

池上遺跡S G106資料の器種には壺、甕、高杯などがある。壺の個体数は比較的多く、広口壺、長頸壺の2種で占められている。広口壺はAが主体のようであるが、口縁端部を肥厚させて擬四線と竹管円形浮紋で装飾した個体もみられる。長頸壺には口縁が直線的に長く延びる典型的な個体の他、広口長頸壺が認められ、体部にタタキ成形痕を残すものもある。甕はいずれもタタキ成形によっており、内面に弱いケズリをもつものがある。口縁部はa・bの2形態が認められる。高杯では椀形高杯が出土している。数個体認められる脚部は緩やかな裾広がりとなり、透孔は2段に設けられたものがある。

府中遺跡S X03下層資料の器種は壺、甕、高杯、鉢、大形器台などで構成されている。壺では広口壺A・Cのほか、口縁端部を幅広く垂下させて外面に凹線を巡らせる広口壺(Cの円形浮紋を欠いたもの)がある。また壺の組成には長頸壺も含まれている。甕の体部はいずれもタタキの分割成形によっており、ハケ調整の併用は認められない。口縁にはa・b・hの各形態がみられるが、また口縁端部を上方に拡張して受口状を作り、外面に凹線を巡らせる個体も存在する。高杯は有棱高杯で、口縁部は直立気味に短く外反する。また脚部は緩やかに裾が広がり、透孔が2段に設けられている。

以上のように下田I-1式の直前の小様式では、壺の主たる組成が広口壺、長頸壺によって二分されていることが分かる。広口壺ではAの他に、口縁端部を垂下、あるいは肥厚させた個体が目立ち、またその端面に加飾を施したものも散見され、必ずしもシンプルな口縁をもつ広口壺Aが主体を占める状況ではない。長頸壺ではほぼ直立する口縁部を備え、かつ口縁部が体部の高さとほぼ等しい典型的な形態を保つ個体もあるが、広口長頸壺や粗製の個体も同時に存在する。従ってこの器種における退潮傾向を看取できるが、個体数の上ではまだ顕著な減少を來していないようである。甕では口縁部形態において主体をなすa・bの他、受口状口縁の外面に凹線を施す形態や、口縁形態hの存在が認められる。体部の成形はタタキを主とし、稀に外面に部分的な平滑技法の併用をみる。体部形状は長胴の傾向が強い。高杯の資料では下田遺跡の有棱高杯Aとの直接的な連絡を見出し難いが、脚部においては脚柱部から緩やかに裾部が広がる形態が古い要素として捉えられよう。また透孔は下田I-1式以降、脚据部に3~4方の円孔を穿つスタイルが一般に定着するが、この段階では4方透孔をもつ個体の存在と共に、脚柱部と脚裾部の2段に円孔を設けたり、6方に設けるなど多孔の傾向が強い。

全体的にみて、退潮の兆しを垣間みせながらも長頸壺がなお盛行すること、広口壺、甕に中期的な凹線紋の残影を残す個体が認められることから、当該小様式は畿内第V様式の前半新段階もしくは後期の中葉に位置すると考えておきたい。河内での編年観に当てはめれば、V様式中葉とされる西ノ辻E(D)式に近く、また上六万寺式までは下らない様相であろう。なお付言すれば、これらをさらに遡る和泉地域の後期の資料は、池上遺跡S G108、および同S L307などである。

3. 下田I式

a. I-1式

様相1を弥生時代後期後半古段階として位置づけ、I-1式に組み替える。本小様式に併行する良好な一括資料は皆見に入らない。従って下田遺跡資料によって器種組成を整理する。

壺は無頸壺、長頸壺A・B、広口壺B・Dなどで構成される。無頸壺(715)は中期の無頸壺に遡源が求められ、下田遺跡S D1305(6・7層)出土のIV様式資料(277)などの系譜上の後裔器種とみなしてよい。(715)は器形の特徴や口縁部外面の僅かな肥厚に中期段階の名残をみるが、体部が遙かに矮小化し型式学的に大きく退行している。長頸壺では口縁部が直線的に長く延びる典型形態ではなく、口縁部がやや短く外反する長頸壺A(713)、口縁部の短い長頸壺B(714)など、型式学的に退潮傾向の強いものが主体をなす。また出土資料中から欠けるが、広口長頸壺、および広口壺AはI式に先行する小様式に存在し、またI-2式の組成中に認められるので、本小様式内の存在は確実である。広口壺では広口壺B(716)・D(717)があり、広口壺Dは口縁端部を垂下気味に肥厚させる形態に前小様式の名残をとどめる。

甕の系譜は、Aa～Aeの法量による分類を基本とし、口縁部形態、体部形態の変遷を加味して導いている。本小様式における甕はすべて弥生形甕Aで、Aa(723)、Ab(721・722)、Ad(718)などがあり、口縁部形態はa(722)、c(721・723)、h(718)が認められる。口縁b形態の甕は、下田遺跡では自然河川N R1104の堆積土資料中に微量の存在が認められたのみで、基本的に下田遺跡の各遺構が出現する段階では消滅する形態といえる。口縁aは前小様式からの連續性をもつ古い特徴を備えた形態であるが、本小様式を以て完全に消滅する。口縁cは型式学的に口縁bからの型式変遷と捉えられる形態で、bの受口状口縁の屈曲が退化し、口縁外面に稜線状の弱い屈曲を残した段階と解される。小形の甕Adは(718)にみられるように、端部を単純に丸くおさめた口縁hが主体を占めていたらしい。体部の成形は分割成形によるタタキを基本とし、内面はハケ、あるいはナデといった平滑技法によっている。ハケ調整はかなり丁寧に施されている。その中でも(723)は体部下半に縱方向のケズリを加える点で、古い属性の名残りがある。底部を残した個体は少ないが、いずれも底部形態Aを示す。

高杯には有稜高杯A・B、椀形高杯Aがある。有稜高杯AはいずれもA₁で、型式学的によく安定している。(728)は長い体部に短く外反する口縁部を備えており、口縁部外面にミガキ原体による鋸歯状紋を有する。脚部は脚柱部から脚裾部へ緩やかに移行し、脚柱部は中空である。透孔は1段であり、これが2段のものは前小様式を以てほぼ消滅するとみられる。また透孔は4方のものが主流として定着するようで、これ以降は一般に多孔の個体がほぼ払拭されている。また口縁端部と脚裾端部にやや強調された端面形成が行われている。椀形高杯A(733・734)はいずれもA₁と思われるが、脚部形態は不明である。口縁は浅い椀形で、口径は有稜高杯よりも小さい傾向がある。

鉢には小形鉢A・B・C・D、中形鉢、大形鉢がある。小形鉢A(739)はA₁の形態をとる。小形鉢B(742)、およびD(741)は口径に対してやや深い体部をもつ。鉢のうち特に小形鉢C(738)、中形鉢(744)、大形鉢(748)は、いずれも体部から屈曲して短く延びる口縁を備えている。小形鉢Cは本小様式において深い半球状の体部をもつ小形鉢Caのみが認められるが、I-2式にはやや浅い体部をもつ小形鉢Cbが存在し、その後II-2式古相まで併存する。中形鉢については、下田遺跡では深い体部の鉢だけが出土しているが、I-2式以降には池上曾根遺跡他に浅い体部を有する中形鉢が認められ、両者の併存が窺える。また大形鉢では本小様式に体部の深いものがあるが、I-4式には浅い体部をもつ個体もあって、両者が併存した節がある。従って資料の制約から同一組列として扱ったが、小形鉢Cや中形鉢

と同様、大形鉢も深い体部と浅い体部の2系統の組合として将来的に分離できる可能性がある。以上に記した小形鉢C、中形鉢、大形鉢の三者を隔てる最も大きな相違は法量であり、形態的にはそれぞれ相似関係に近い特徴をもつ。本小様式の組成中にはいずれも小形鉢Caと体部の深い中形鉢のみが認められるが、小形鉢Cbや体部の浅い中形鉢が出現しているか否かは不明である。しかしながら前者のような深い体部をもつ鉢を基本形として、後者の浅い鉢が分化し併存したとみておきたい。なお中形鉢(744)と大形鉢(748)などは、その口縁部において外面に稜線を有する受口状の弱い屈曲をみせ、弥生形壺Aで分類した口縁cと共に共通の形態を備えている。こうした特徴をもつ口縁は、次の小様式以降には全く姿を消す。有孔鉢は組成中にみられないが、これはV様式前半の段階で存在する器種であるから、本小様式の組成中にも当然含まれるであろう。全体的にみて鉢の系譜は、これ以降も比較的安定しているといつてよい。なお、小形鉢Xとした(736・737)は、その形態から製塙上器の可能性も捨てきることのできない。壺壺は組成中に認められないが存在するであろう。

大形器台の資料は和泉では少なく、系譜の検討がやや困難な状況にあるが、(735)は本小様式における大形器台Bの存在を示す資料である。筒形の体部の上下に透孔を穿っている。

b. I - 2式

様相2を弥生時代後期後半中段階として位置づけ、I - 2式に組み替える。池上遺跡S G114、同SK410出土資料(大阪文化財センター編1979)が、本小様式に属すると考えられる。

壺の組成には無頸壺、短頸壺、長頸壺、広口壺、複合口縁壺などがある。無頸壺(86)はI - 1式と同じく矮小化し、さらに口縁部肥厚の特徴も消失する。体部の作りはさらに鈍くなり、この器種における型式学的な負の到達点を示す。短頸壺(300)は、やや外反気味に短く直立する口縁部と無花果形の体部をもつが、球形に近い体部の短頸壺(302)もある。また最終調整にミガキA、あるいはハケ調整を施すもの他、最終調整を加えずタタキ成形痕を残すものなど一定しない。これら短頸壺はV様式前半からの系譜を引き、個体数の上でかなり目立つ存在ではあるが、次のI - 3式の組成中には認め不得、無頸壺と同じく本小様式を最後に壺組成中からほぼ姿を消す。長頸壺にはA(105)・C(101)、および広口長頸壺(103)がある。口縁が直立気味に短く立ち上がる長頸壺Bも、I - 3式での存在から本小様式でも認め得る。長頸壺Cの形状にはかなりの変異が認められる(99~101)。これら長頸壺系の土器は、壺組成中での退潮傾向がさらに進行し、個体数の上で広口壺の優勢が明確となる。広口壺はA・C・Dがあり、また広口壺Bも前後的小様式に認められるので、当然ながら本小様式でも存在する。広口壺Aには倒卵形の体部をもち口縁端面に鈍い擬円線を巡らせたAa(94)、肩の張った体部をもつAb(308)、球形に近い体部に平底をもつAc(310)がある。Aaは丈高な器形や口縁端面の仕様に古い属性を残すもので、型式学的にはAaからAb・Acへの変遷が考えられる。しかし共伴の事実からこれを時間軸に乗った一元的な変遷とせず、この三者を本小様式において共存し得るとした。また今後、資料の増加により図上の分岐線はさらに遡る可能性もある。(310)は本小様式における広口壺Aの体部について、球形に近いものの出現をみたことを証している。広口壺Aaは本小様式を最後に途絶するが、Ab・Acはこの後も主要器種として存続する。広口壺C(83・84)は口縁端部を幅広く垂下させ、その外面に凹線と竹管円形浮紋を配して加飾するもので、(83)は口径からみてかなり大形の壺になろう。これらは、西ノ辻I式の組成を構成する加飾性の垂下口縁広口壺の後裔で、下田I式以前として先に記した府中遺跡S X03下層資料中に認められる他、後期前半の春木八幡山遺跡での出土が知られている(堅田1965)。従って広口壺Cは、少なくとも壺の組成中で主体的な位置ではないが、低率ながらも存続していることを窺わせる。

口縁端部を垂下気味に僅かに肥厚させた広口壺D(87・88)は、本小様式まで残存するが、以後は組成から脱落する。本小様式で初めて複合口縁壺(95・311)が出現する点は重要で、この器種は後の上器様相の中で大きく展開することになる。しかし(95)は口縁部の屈曲が弱く、また(311)は受部擬口縁と口縁部との接合部が、外見上は突堤のように強調されるなど、本小様式における複合口縁壺は初源的で不安定な要素が強い。

弥生形甕Aには、Aa(154・156)、Ab(153・157・158)、Ac(147・148・150・155)、Ad(144～146)、Ae池上曾根[95-3]がある。(156)は下田遺跡出土の弥生形甕のうち最大の個体で、また形態的にも両肩部に逆U字形の耳状把手を備える点で異質な存在である。耳状把手をもつ甕は稀少であるが、兵庫県川西市栄根遺跡第19次B地区溝17に、庄内式併行期の出土例がある(岡野・祭本1989)。口縁部形態は超大形のAaはhのみであるが(156・154)、大形のAbは口縁d(158)の他にf(157)、g(153)形態がみられる。型式的にはd、e、fの順での変遷が考えられるので、e形態も同じく存在するであろう。口縁gもfから繋がると思っておきたいが、あるいはI-1式まで残存する口縁a形態からの系譜かも知れない。中形のAcには口縁c(147)、d(148)、f(155)、h(150)があり、また小形のAdには口縁d(146)、f(145)、h(144)の各形態がある。池上曾根[95-3]の弥生形甕Aeの口縁部にはd形態を認められる。前小様式に普遍的であった口縁cは一部を除いて激減し、その流れをひくd形態をはじめ、口縁細部調整の後退的な多様化が進むようである。体部の形態は、大形以上の個体では概ね長胴の傾向が強く体部上半に最大径がある。また中形以下の個体は、大形のものより短小の体部をもつ。体部の成形はタキ技法によっており、体部における分割成形の圧着や口縁部の接合に部分的なハケ調整の併用が散見されるが、前小様式のようなケズリを加えた個体は皆無となっている。内面の調整はハケが主体である。なお、底部については底部形態Bを主としてAが混在する。

高杯には有稜高杯A、楕形高杯Aがある。有稜高杯A(109)はA₁で、口縁部外面に施された疎らな縱方向のミガキAは、前小様式にみられた鋸歯状紋の退化形とも解釈し得る。他の個体についても鋸歯状紋による施紋法は影を潜め、口縁部外面は縱方向のミガキAが主体となっている。楕形高杯A(304)は前小様式と同じくA₁形態を示すが、体部の内湾傾向がより強くなっている。

鉢には小形鉢A・B・C・E、中形鉢、有孔鉢Aがある。小形鉢AはA₁の形態で、外面の調整はタキ仕上げ(130)とナデ仕上げ(131)がある。小形鉢B(126・127)は前小様式と比較して口径に対し器高が低くなり、体部がやや浅くなっている。小形鉢CはCb(132)が認められるが、Caも併存するであろう。小形鉢E(134)は本小様式で確認される鉢であるが、系譜的にはさらに遡ると思われる。中形鉢には体部の深い(139)と、浅い池上曾根[95-6]がある。現状では本小様式において深い体部の中形鉢から浅いものが分化したと解しておきたい。有孔鉢A(136)はA₁形態をとる。Bの存在については不明。

器台は大形器台A・Bの2系統がある。大形器台Aの池上曾根[95-5]は、体部が短く口径が裾径よりも僅かに大きい。また透孔は体部および裾部に設けられている。大形器台Bの池上曾根[95-4]は、上向きに広がる筒状の体部と大きく開いた口縁部を備え、透孔は全く設けられていない。A・Bともに口縁端部、裾端部には明瞭な端面形成が行われている。

製塩土器については、その出土量から下田遺跡は消費地であったと考えられ、塩業生産に直接関与していた形跡が窺えない。製塩土器の編年は、製塩活動に携わったであろう生産遺跡単位ごとに行われる事が望ましく、従って本小様式以降の各段階における製塩土器の状況は、下田遺跡他の消費地における製塩土器の搬入形態を示すものである。しかしながら消費遺跡を中心とした編年は、生産遺跡では把

握しにくい他器種との共存関係を明らかにできることが利点といえよう。本小様式における製塙土器はAのみで占められる。製塙土器A(170)は製塙土器と認定し得る後期最古の例で、口縁部は体部と一体化して鉢形に浅く大きく広がり、外面にはタタキ成形痕が明瞭に残されている。脚台は肉厚の器壁で頑丈に作られた脚台I式(広瀬1994)に相当し、大きく広がった体部に対応した形態であることが分かる。製塙土器Aは、製塙遺跡として知られる渕遺跡の第1調査区「谷」状落ち込み(鈴木1982)や、集落遺跡である西大路遺跡の河川501-O Rからも検出されている(橋本・岡戸・岡本編1988)。西大路遺跡501-O R出土土器の様相は、下田I式から布留式までの幅があつて製塙土器Aの帰属を特定できないが、口径20cm前後と下田遺跡出土例より小形で、製塙土器Aの体部に各種の法量があったことが知られる。

蛸壺も製塙土器と同じく、下田遺跡ではその消費地での動向を示すものである。蛸壺はA(175)が認められるが、Bもまた存在するであろう。また稀少器種の皮袋(1671)が本小様式の組成に含まれる。

c. I - 3式

様相3を弥生時代後期後半新段階として位置づけ、I - 3式に組み替える。本小様式に併行する良好な一括資料は管見に入らない。従って下田遺跡資料によって基本組成を整理するが、手焙を出土した山ノ内遺跡第1次調査、堅穴住居866-O D(渡辺・森井・虎間1988)は、ほぼ併行する資料と見なす。同遺跡では弥生時代後期の自然河川に挟まれた微高地上の方形堅穴住居、866-O Dから手焙が出土した。手焙以外の出土土器量は極めて少なく、広口壺、高杯、弥生形甕がそれぞれ破片で出土したのみである。従って、全体として後期後半に属することは確実であるが、細かい時期の比定は困難である。しかし出土手焙は様相3の手焙片との類似点が認められることから、本小様式に含めて考えておきたい。

本小様式では、壺の大半が広口壺で占められ、僅かに長頸壺が残存している。広口壺ではA・Bが認められるが、Cも存在するであろう。広口壺Ab(1256)は肩の張った体部をもち、最大径は体部上半にある。また本小様式では確認できなかったが、広口壺Aaが併存するであろう。しかしAaは前小様式で組成から脱落していると思われる。なお、一般に広口壺Aは加飾されない器種であるが、(1256)では口縁部外面に刻目を巡らせている。この点に関して口縁部刻目をもつ個体を他に求めると、I - 2式の製塙土器A(170)、II - 1式の弥生形甕A(390)、細頸直口壺(324)、また同じくII - 1式の楕円高杯B(423)の脚裾部端面などにみられ、通常では加飾されることのない器種に散見される。従ってこうした器種における刻目は、浮紋やクシメ原体による一般的な装飾法とは異なった意味合いをもつものと思われる。広口壺B(1719・1720)は頸部からの立ち上がりがI - 1式段階より短くなり、Aの口縁形状に近づく。壺組成中に占める長頸壺の割合は激減するようである。SA2216床面出土資料には長頸壺Cと広口長頸壺が認められる。しかし広口長頸壺は口縁破片のみの出土であり、本住居が廃絶した時点で完存品は皆無と思われることから、ほぼ廃れゆく器種であったかも知れない。またこの住居では長頸壺B(1260)も出土しているが、これは建替え以前の第1次住居を構成する主柱穴S P2279内からの検出であるため、これを住居廃絶時の一括遺物に含めることはできない。しかしS K2351の組成にはB(1791)が含まれるので、長頸壺B・C、広口長頸壺の系譜は本小様式に僅かながら残るが、末期的な様相であつて以後は途絶すると考えておきたい。複合口縁壺は出土していないが、本小様式中に存在するであろう。

壺はすべて弥生形甕Aで、Ab(1275・1276)、Ac(1273・1274)、Ad(1271)がある。口縁部形態はh(1271・1273・1276)を主体として他に口縁e(1275)を認めるが、また口縁c(1274)の残存をみる。口縁cはI - 1式を最盛期とするが、d・e・fなどを派生しながら急速に衰退し、本小様式を以て姿を消す形態である。本小様式に残存する口縁c(1274)には端面形成が行われておらず、型式学的な退化傾向

を認めることができる。体部は右上がりのタタキ技法による分割成形で、前小様式に散見されたハケ調整の併用はみられない。また形状については、体部上半の膨らみが強いが下半はやや絞られ、前小様式に顕著であった長胴傾向は薄らいでいる。底部形態はAを主体にBも存在する。

高杯には有稜高杯A、椀形高杯Aがある。有稜高杯A(1282)はA₂の形態をとる。口縁部外面は斜めあるいは横方向のミガキAで、縱方向ミガキAが主体のI-2式とは異なった調整法が用いられている。椀形高杯AはA₁(1283)からA₂(1286)が派生し本小様式で併存する。椀形高杯A₂はA₁と比較して口径が小さく、また脚部が脚柱部から脚裾部へ明瞭に屈曲する特徴をもつ高杯で、II-1式にはこの系譜下に椀形高杯Bが誕生すると考えられる。

鉢には小形鉢A・B・D・E・G、有孔鉢Bがあるが、本小様式の前後関係から小形鉢C、中形鉢、大形鉢、有孔鉢Aも当然ながら存在するであろう。また他に小形鉢Fが組成に含まれている。小形鉢A(1723・1724)・B(1296)・D(1303)・E(1299・1311)は、前小様式と形態上の大きな変化が認められない。小形鉢Aは前小様式と同じく、外面の調整がタタキ仕上げ(1723)とナデ仕上げ(1724)がある。小形鉢G(1312)については手焙に関連して述べる。有孔鉢B(1314)は本小様式で初めて確認され、底部形態Bに穿孔した有孔鉢B_aの形態である。有孔鉢Bの存在が出現期を示すか否かは不明で、系譜的にはさらに遡ることもあり得る。なお、小形鉢Fは本小様式だけで確認できたが、これらは壺など本来は異なった用途の土器底部の再利用と考えられ、当初から特定の目的で製作された鉢とは見なし難い。小形鉢Fについては、本小様式基準資料の比較的良好な出土状況から鉢としての器種を推定したが、破損土器の再利用はごく自然な発想であり、他の小様式でもその確認が困難なだけで、Fに含まれるべき他器種底部の存在する可能性は十分に考慮すべきであろう。

手焙はS A2216から(1294)が検出されており、小破片であることから住居廃絶時の一括資料には含まれないかも知れないが、本小様式の組成を構成していた可能性が高い。また小形鉢G(1312)は手焙の覆部を欠いた異形の鉢で、系譜的に手焙と密接な関連をもつと考えられ、本小様式における手焙の存在を傍証する。(1294)は体部上半と覆部との接合部分において断面三角形の低い突帯状を呈するが、内面は平坦に作られている。これは体部上端を短く外反させて形成した擬口縁の内面に、覆部となる粘土板を接着し平滑技法の併用によって擬口縁を突帯状に残存させたものである。また覆部の開口部は口縁部から緩やかな円弧を描いている。S K2244から検出された手焙(1730)もこれと同様の形態的特徴を備えており、また体部の上下に配された突帯上には刻目が施されている。小形鉢G(1312)の形態は(1730)に近く、いずれも体部はほぼ垂直な立ち上がりをみせている。山ノ内遺跡の手焙[11-20]は、体部上半と覆部の接合法が上記の資料群と同手法によっており、本小様式に含めて考えておきたい。山ノ内[11-20]は体部が強く内傾しながら立ち上がる点で他の手焙と異なっている。また体部と底部の境界に強調された稜線をもつが、突帯は形成されていないようである。いずれも底部の形態は平底のAもしくはBであるが、やや突出した(1312・1730)、突出しない山ノ内[11-20]がある。

製塙土器は組成中にみられないが、前後関係から本小様式における製塙土器Aの存在は確実である。しかし製塙土器Bはまだ出現していない可能性が高い。

焰壺はタタキ成形痕を残した焰壺B(1792)の存在が認められる。

なお器台の資料は確認されていないが、本小様式でも大形器台A・Bは確実に存在するであろう。

d. I-4式

様相4を弥生時代後期末として位置づけ、I-4式に組み替える。鶴田町遺跡 S D007出土資料(池峯

1995)が、本小様式に属すると考えられる。下田遺跡内のI-4式の内容は資料に乏しいことから不明な点が多く、鶴田町遺跡出土土器はこれを補完する重要な資料である。鶴田町遺跡は下田遺跡の南方約500mの至近距離に立地し、しかも地理的に同一の沖積平野上にある。このため下田集落の一部とみなすことも無謀な推論ではなく、少なくとも立地的にみれば土器様式の地域偏差を考慮する必要性はまず認められない。SD007は調査区をほぼ南北に縱断する溝で、大別5層中の2層と最下層に土器が集中する。溝内の2層と下層の遺物では多少の時間幅が存在する可能性を有し、溝全体では遺物の一括性は低下するおそれがある。しかし各地点ごとに短期的・集中的に土器の投棄が行われたと考えられており、出土状況の詳細な検討によって一括性の高い資料群の抽出は可能であろう。ここでは一括性の検討が不可能であるが、報告書で公にされた土器の様相は下田II式にかかるものではなく、また複数の小様式に分離すべき必要性を認め得ないので、一括あるいは近似した時間帯の集積遺物とみなして取り扱う。土器の器種には壺、甕、高杯、器台、鉢、手焙、婧壺などがある。

壺には広口壺、長頸壺、広口直口壺などがあるが、広口壺A[22-1]・B[22-2・7]が安定して存在する。組成中にはなおも長頸壺A[22-10]が存在するが、頸部は短小化の傾向が窺え、最大径部が体部の中央まで下降している。本例はおそらく和泉における長頸壺の最終末の資料で、本小様式を最後に長頸壺は壺の組成から脱落する。これに代わって本小様式で出現する壺に広口直口壺[23-16]があり、決して主たる存在とはならないが、下田II式に至るまで壺組成中で低率を占める器種となる。これらの他に外来系土器I類として紀伊か阿波産とされる複合口縁壺、また紀伊産かとされる細頸壺がある。

甕は大半が在来系土器I類の弥生形甕Aで構成されており、河内産の胎土をもつ在来系土器II類の甕が僅かに混在する。法量による分類ではAa[24-17]、Ab[26-45・46・52]、Ac[24-25・25-34・27-62]、Ad[25-33・27-58]などの諸形態が認められる。口縁部形態については口縁d[24-25]も存在するが稀で、口縁f[25-34・26-46・27-58]・g[26-45]・h[24-17・25-33・26-52・27-62]が多くなっている。調整は一般的に外面タタキ技法、内面平滑技法によるが、一部に外面ハケ調整、内面にケズリを併用した個体もみられる。

高杯には有稜高杯A、楕円高杯Aなどがある。有稜高杯A[28-65]はA₁形態で、下田遺跡S A2218床面出土の有稜高杯A(1377)と形態や法量がよく一致している。楕円高杯はA₁[28-63]が存続してA₂[28-67]もこれと併存する。楕円高杯A₁はI-1式以来、大幅な形態変化をみせることなく、本小様式を最後に系譜が途絶えてII式以降には継承されない。これに対しA₂は、前小様式と比較すると脚柱部が短くなっている器高を減じ、また脚部が広がり口径と脚幅径が接近するなどの変化が看取され、II式の楕円高杯Bとの過渡的な形態を備えていることが分かる。

鉢には小形鉢、中形鉢がある。小形鉢は良好な資料に恵まれず全容は不明ながら、小形鉢C_a[29-79]・C_b[29-81]の存在が認められる。いずれもI式前半段階と比べ形態上の顕著な変化はない。ただC_aの法量はI-1式よりやや大きく、またII式の小形鉢C_aに関しても、同じく他の小形鉢より大きい傾向が認められる。中形鉢には深い体部をもつ[29-85]、浅い体部をもつ[29-82]といったI-2式以来の2系統が継承されている。中形鉢[29-85]には低い脚台が付加されており、この傾向は次のII-1式まで存続する。以上の他に、下田遺跡の資料から小形鉢B(1391)・E(1390)、大形鉢(1397)を鉢の組成に加えることができる。小形鉢A・D、有孔鉢A・Bもまた存在するであろう。なお大形鉢は口縁部に片口を有しているが、これは本小様式以降も中形鉢以上の法量の鉢に散見される仕様である。

器台では大形器台C[28-70]が存在する。大形器台Cは肉厚に垂下させた口縁部外面を波状紋で飾る

特徴から、第Ⅳ様式の垂下口縁を有した器台を淵源とする古い属性を備えた器台と考えられる。従って大形器台Cは第Ⅴ様式全般を通じて系譜を温存させたとみられ、大形器台A・BはCから派生し発達した可能性が高い。大形器台AはII-1式に残存することから本小様式でも存在するであろう。大形器台BについてはI-2式以降の動態が明らかでない。しかし資料数の豊富なII-1式の器台の組成には含まれないことから、Aに先行してI式の中で系譜が途絶すると考えておきたい。

手焙は本小様式に限って資料数に恵まれ、下田遺跡で2点、鶴田町遺跡で6点が出土している。下田遺跡出土資料(1395・1396)はほぼ同形同大であるが、体部の立ち上がりが(1395)では垂直、(1396)はやや内傾する。I-3式に普遍的であった擬口縁と覆部の接合法は、本小様式には全く継承されていない。いずれも擬口縁を外反させて内側に覆部を接着する点は同じであるが、(1395・1396)では突帯を形成することなく擬口縁端部を外反したまま残している。覆部の開口部は口縁部から円弧を描かずほぼ垂直に取り付き、また口縁部と開口部の接点に耳状突起が貼付されている。これと同様の形態的特徴をもつ手焙は、耳状突起の有無は不明ながらも鶴田町遺跡出土資料中で2点を認め、本小様式における安定的な存在が窺える。また前小様式の手焙との系譜関係は不明であるが、山ノ内遺跡例を除けば体部以下の形態は小形鉢Gも含めて近似し、何等かの関連性を窺うことは可能であろう。鶴田町遺跡では他に[28-71・74]などの資料がある。この両者は体部が内湾しつつ内傾し、また擬口縁を強く外反させてその内面に覆部を接着する点で共通する。すなわち内湾した体部はその上端で一旦強く外反して覆部に至るという形態をもつ。手焙は山城・近江地域の受口状口縁鉢に起源をもつと推定されているが(森岡1990)、[28-71・74]はこうした手焙のオリジナルの形態に近く、特に[28-74]は体部の形態や受口状の口縁部などにその特徴をよく伝えるもので、系譜的にはより遡る可能性もある。また[28-71]はそれから派生した形態であるが、口縁がやや短く、また体部がより長くなっている点で、(1395・1396)に近い特徴も兼ね備える。底部に関しては、(1395)・[28-74]などには明瞭な平底が作られているが、[28-71]などは丸底に近い退化した平底である。なお、手焙を出土する遺構の種類は「溝状遺構・河川・自然流路・沼沢・井戸など水に関係するもの、住居址など直接生活に関係するもの、方形周溝墓・古墳などの墳墓に関係するものなどに大別でき」とされている(岡本1985)。下田遺跡では竪穴住居床面出土に対し、隣接した鶴田町遺跡では溝内から一括出土していることからも、もとより一元的な目的のために作られた道具であったとは考えられない。またその背景に、地域的・時代的な要因を多分に考慮する必要がある。その中にあって、下田遺跡および前小様式に含めた山ノ内遺跡の各事例は、地域・時代が接近し、その使用目的に一定の示唆が与えられよう。山ノ内遺跡第1次調査の手焙の出土状況については「住居床面上で少量の遺物を検出した。南東隅で完形の手焙形土器が開口部を南方向に向け、正立した状態で出土した。内部は炭化物を含む住居跡と同質の土で充満していた」(渡辺・森井・虎間1988)と述べられている。下田遺跡SA2218と山ノ内遺跡866-ODの共通要素として以下の3点が抽出できる。1つはいずれも焼失住居であること。2つは住居床面に遺物がほとんど残されていないこと。3つは前記の状況にも関わらず完形、もしくはそれに近い手焙が、床面の壁際や壁溝から正立状態で出土していることである。こうした諸要素の一一致は偶然ではなく、その背後にある一定の意思の反映と見なすことができよう。住居床面からの出土遺物の少なさは、おそらく住居の廃絶に際して生活物資の大半が住居外に搬出されたことに起因する。また手焙の出土状況は、これが住居焼失以前に床面や壁溝に設置されたことを示しており、住居構造物が意図的に焼却処分されたことを暗示する。従ってこの場合の手焙の使用目的は、住居廃絶に臨んでの祭祀行為に関わるものと解釈される。もちろん下田遺跡SA2217をはじめ、

近似した属性を備えながら手焙の出土をみない住居も数多く、これが全てに適用できる原理とはいえないが、その使用の有無は住居が廃絶するに至った諸要因により左右された可能性も十分に考えられよう。

製塙土器は鶴田町遺跡からは出土していないが、下田遺跡で製塙土器A・Bの併存が確認された。製塙土器A(1398・1399)はI-2式段階のものと比べ、形態や法量に大きな変化をしていないが、ナデ仕上げでタタキ痕跡をほとんど残さない点が異なっている。製塙土器B(1400・1401)は脚台のみのため体部の形態は明らかでないが、Aと比較して脚台の器壁が薄くまた法量も小さい。Bは脚台II式に相当するが、脚台の形状からみて体部は大きく広がらず、本小様式においてII-1式以降にみるような比較的強く立ち上がりの形態が獲得されていたと思われる。型式学的には体部が大きく開いた製塙土器Aを基本形として、体部の立ち上がりの強いBが派生したとみなすことが可能で、湊遺跡の西落ち込み(土器群I)には脚台II式ながらも、体部の開き方においてAとBの過渡的な形態を示す例がある(鈴木1993)。

本小様式では蛸壺の資料は確認されていないが、蛸壺A・Bともに存在するであろう。これら相対的に小さい蛸壺は、飯蛸など小形の蛸の捕獲を主目的としたと考えられるが、鶴田町遺跡からは真蛸など大形蛸の漁を目的としたらしい真蛸壺[30-91]も出土している。同様の真蛸壺は海浜部に位置する脇浜遺跡88-O R, 91-O Rからも多量に検出されているが、内陸部での出土量は少ない。

4. 下田II式

様相5~8をII式として包括し、庄内式併行期に相当するものとした。本様式は、いわゆる伝統的第V様式土器群を主体とした器種組成に、直口壺、庄内式甕、布留式祖形甕、小形器台、小形丸底土器などの新たな器種が加わり、第V様式的な様相から庄内式・布留式的な様相へと、全体の土器様相が徐々に変貌を遂げる段階である。庄内式併行期の認定は、在来系土器I類の組成中に庄内式甕をはじめとする庄内式土器の共伴によって検証できる。しかし庄内式土器は、その出現期の段階において分布域が限定されており、和泉への伝播が遅れる可能性が充分に考えられる。またこれら庄内式土器の消長は決して単調ではなく、極めて多元的に現れて從来の組成に加わり、あるいは淘汰されていく。従って本様式の認定にあたっては、まず土器組成の変容を以て第V様式と分離し、さらに伝統的な弥生形甕Aとは異なる甕が出現する各過程に画期を求め、庄内式甕の出現をみないII-1式、庄内式甕が出現し盛行するII-2式、庄内式甕の盛行と共に布留式祖形甕が組成に加わるII-3式の3小様式に細分した。

a. II-1式

様相5を庄内式併行期古段階として位置づけ、II-1式に組み替える。西大路遺跡1370-O D, 533-0 X出土資料(橋本・岡戸・岡本編1988)が、本小様式に属すると考えられる。本小様式では小形器台の出現、複合口縁壺Bの出現をはじめとする甕の組成変化、および弥生形甕Aにおける体部球形化の傾向など、主要器種における様相の変容が顕著となる。庄内式甕の存在については、下田遺跡S D1305(4層)の恵まれた資料母数の中でも確認されず、II-1式では確実に共伴しない器種とみてよい。しかし庄内式甕の有無に関わらず、器種構成の大幅な変化、特に来るべき時代の先駆をつける小形器台Aや、複合口縁壺Bの出現を重視し、本小様式をI式から分離して和泉における庄内式併行期の起点として位置づける。なお、和泉地域の資料で府中遺跡S D09下層(高島・松村1985)は有稜高杯A、椀形高杯Bの形態的特徴などから本小様式の一部を含み得る。しかしこの段階での共存関係を認め難い長頸甕Aが共に出土しており、資料群としての一括性に疑義があるとみなして基準資料から除外する。

II-1式では全体に第V様式の様相がなおも根強く継承され、庄内式甕はまず確実に共伴しない。しかし甕組成から長頸甕が脱落して広口甕Aが主体を占め、また複合口縁壺B、椀形高杯B、小形器台が

出現して組成に加わることから、やはり總体として第V様式的組成から逸脱し始めたことを示す。外来系土器の搬入量は極めて少なく、在来系土器が主体を占めている。土器組成を河内の資料と対比すれば、有稜高杯A・弥生形甕Aの形態、細頸直口壺の存在などから、北島池下層式に近い様相を備える。

まず西大路遺跡の土器様相を整理する。1370-O Dは壁に沿って3方に屋内高床部を設けた、いわゆる「下稗田型」(石野1990)の方形竪穴住居の一括資料である。遺物量は少ないが、壺、甕、高杯、鉢、小形器台、製塙土器などの器種が認められる。壺は無紋の複合口縁壺Aが1点認められたのみである。甕は全て弥生形甕Aで、庄内式甕は組成に含まれない。高杯には有稜高杯A₁、橢形高杯B₁が認められる。鉢には小形鉢、中形鉢があるが資料数は少ない。小形鉢はA₁の他に、丸底に近い底部を備えた小形鉢Xがある。中形鉢は体部の浅いもので、外面にはタタキ成形痕を残すが内面は丁寧なミガキが施され、また器壁も極めて薄く仕上げられている。さらに口縁部には緩やかな内湾傾向が表れている。小形器台は浅い皿状の受部と、立ち上がりの強い脚部を備えた不定型な小形器台Xである。製塙土器はタタキ成形痕をよく残したBがほぼ完形で出土している。533-O Xは自然河川の肩上端部で検出された上器層資料であるが、出土状況からみれば一括性についてかなり信頼度の高い一群の上器と認められる。器種には壺、甕、高杯、鉢、製塙土器などがあり、1370-O Dと近似した構成を示すが小形器台を欠く。甕は全点が弥生形甕Aで占められており、大形のAbから超小形のAeまで各種のサイズがある。口縁部形態はhが主体的で、他に口縁f・gなどがあるが量的には少ない。いずれもやや突出した平底を有し、体部は一部に球形化の兆候が窺えるが、やや長い体部をもった甕もまた存在する。壺には広口壺Ac・Bb、複合口縁壺Ba・Xなどがあり、口縁部を竹管紋や円形浮紋で装飾した個体が散見される。高杯には有稜高杯A・B、および橢形高杯Bが認められ、有稜高杯AではA₁の形態をとるもののが安定して存在する。また橢形高杯BはB₁を主体としつつもB₂が共伴している。鉢には小形鉢A₁・A₂・B₁が認められる。製塙土器は4点が出土しているが、いずれもタタキ成形によるBで、体部は急角度で立ち上がっている。西大路遺跡の調査を担当した橋本高明は、1370-O D・533-O Xなど一群の土器について時代的評価を加え「出土した土器の中には「上田町II式」の甕および「小型三種」の土器群は1点も認められなかった。したがって、確実な「庄内式」として捉えることができる土器群を決定できない」としながらも、高杯の形態、並びに「ベッド」付き竪穴住居の存在が短期間に限定される傾向を指摘し、これらの遺構を庄内式併行期に属するものとして結論づけている(橋本1988)。

以上の状況を加味してII-1式の組成を整理する。

壺には広口壺、細頸直口壺、複合口縁壺、広口直口壺などがあり、長頸壺は組成から完全に脱落している。広口壺AにはAb(321)・Ac(313)がある。広口壺AbはI-3式では最大径を体部上半にもつが、本小様式では体部中央まで下降し、同時に体部下半が圧縮されて全体的に扁球形に近い形態をとる。また広口壺Acは体部が上下方向にやや圧縮されたような、弱い扁球形を呈する。無紋の広口壺Baから派生したと思われる加飾されたBb(314)・西大路[60-438]は、口縁端面に竹管紋を一定間隔で配置するという同じ装飾法が行われている。広口壺Caの資料を欠くが、次のII-2式古相の組成中に認められるので、本小様式でも存在するであろう。広口壺Cb(334)については、口縁部を垂下させ、その外面にCaを特徴づける擬凹線に代わって波状紋を配する壺と捉え、系譜的には広口壺Caからの派生を想定した。しかし(334)は口縁部内面や肩部にも波状紋を配するなどCaにはみられない特徴があり、これとは系譜の異なる可能性もある。細頸直口壺は本小様式で突如として出現し、組成に加わる器種である。口縁部および体部の形態は各個体間で安定しているが、個体差は底部の形態に表れており、平底の

底部B(326)、小さくぼみ底の底部D(325)の2形態が認められる。底部形態は前者から後者への型式変化を想定できるが、本小様式の中で両者が共存する。N R1104から出土した細頸直口壺(51)は河道内堆積土からの検出であるため層位学的な検証ができないが、本小様式のものと比較して口縁部が長く延びており、安定性をみせるII-1式資料群より型式学的には先行する可能性がある。細頸直口壺は西大路遺跡の組成には含まれていないが、泉州地域に属する大久保遺跡南東地区からも出土しており(坪之内1996)、和泉地域でも広く分布した可能性がある。この器種は前様式からの系譜関係は不明ながら、体部と底部の形状からみれば、長頸壺の衰退期と前後して出現する細頸壺との関連を彷彿とさせるが、和泉地域では細頸壺の資料が稀薄で、現段階ではこの両者を積極的に連結できない。また下田遺跡の細頸直口壺のうち(51・323・327)など一部の個体では、頸部にヘラ状原体の押圧によって、低く幅の狭い隆起帯が意図的に作り出されたものがあるが、これを突帯などの退化した痕跡とみなすことも可能かも知れない。複合口縁壺は本小様式においてAからBa・Bbが派生し、いずれも共存すると考えられる。複合口縁壺A(330)は前小様式との大きな形態変化がみられない。複合口縁壺Baには口縁部下端に2個一対の竹管円形浮紋を配した西大路[60-442]や、それに加えて頸部下端に刻目を施す貼付突帯を巡らせた(332)がある。Baの基本形態は、加飾の特徴を除けばAと類似している。複合口縁壺Bb(333)は口縁部、受部、頸部の作りが直線的で、A・Baとは基本形態が異なる。(333)は極めて装饰性の強い壺で、頸部下端に刻目突帯を貼付し、口縁部を波状紋、肩部を波状紋・直線紋で飾るほか、口縁端面に2個一対の竹管円形浮紋を配している。またすべて剥落しているが、体部上半にも円形浮紋が貼付されていた形跡がある。この個体の機能については、華美な装饰をもつ点、体部内面にも密なミガキAが施される点において、非日常的で特異な性格が推定される。広口直口壺(318・319)は前小様式で出現した壺で、本小様式でやや大型化しつつ後続の小様式へ継承されるが、既述の如く壺組成中においては低率で出現するに過ぎない。

壺は微量を占める搬入品、および弥生形台付壺(354)を除けばすべて弥生形壺Aで占められ、Aa(389)、Ab(378・379・383・386)、Ac(365・369)、Ad(356・357・550)、Ae(343・348・352)など各種法量のものがある。口縁部形態の大半は口縁h(348・352・357・369・386・389)で占められ、他に口縁d(550)、e(378)、f(343・356・365・383)、g(379)などの各種形態があるが、前小様式と同様に口縁dの形態をもつ個体は稀である。体部は右上がりを主とするタタキ技法を駆使し、分割成形によって製作されている。Aeのごく一部には体部外面にハケ調整の併用があり、前小様式以前の手法の残存を垣間みせてはいるが、弥生形壺Aの大多数はタタキ成形のみに依存している。内面の調整にはハケ、板ナデ、ナデといった各種の平滑技法が用いられているが、ナデを採用した壺が量的に多い。体部の形態について、統計的には大形のものはど縦長となる傾向を既に指摘したが、大形壺でも個別にみれば(379)など球形に近い体部や、(386)などやや長胴気味の体部が混在する。小形の弥生形壺Aeでは、最大径が体部下半にある下彫れの(352)などが存在するが稀であり、Ad以上の大きさの壺では下彫れの個体は全く存在していない。底部形態はA・Bの両者が認められるが、底部形態Aが主体的な存在である。なお、本小様式に含めたSK2245出土の弥生形壺X(1740)は生駒西麓産の胎土をもつ搬入土器で、右上がりのタタキ技法で分割成形され、基本的には第V様式の技術系統下に製作された弥生形壺である。しかし体部はやや圧縮された倒卵形であり、底部は突出せず径の小さい平底を有する点で、一般的な弥生形壺のプロポーションとは異質である。また体部外面にはタタキの後、肩部から最大径部以下の広い範囲で縦方向ハケが施されている。口縁部はタタキ出し手法によって成形され、口縁端部は上方に

拡張気味で外面に弱い端面を有する。内面ケズリこそ行われてはいないが、形態や技法の上で庄内式甕の先駆形態とも捉えられるべき特徴を、萌芽的に備えた点で看過できない資料である。

高杯には有稜高杯A・B、椀形高杯Bなどがある。有稜高杯Aは概ねA₁の形態で、型式学的に安定した一群を形成する。口縁部外面の調整はいずれもミガキAによるが、一般的な縱方向のミガキ調整の他、I-3式にみられたような斜・横方向ミガキによる個体が散見される。また口縁部内面は少なくともI-1式からI-3式まで、全ての有稜高杯Aで横方向ミガキのみによっていたのに対し、本小様式では横方向ミガキも一部に残存しながら、調整の主体は縱方向ミガキに移行している。椀形高杯Aは前小様式を以て消滅し、系譜的にはA₂の延長上に位置したBの出現がみられる。椀形高杯B₁(423)はA₂に直結した特徴をもつ高杯で、A₂と比べて脚柱部が極端に短小化し、底径が口径を僅かに凌ぐ。またB₁をプロトタイプとして本様式の中でB₂が派生し、II式を通じて共存関係が保たれる。なお、下田遺跡S D1305(4層)の高杯組成をみると、在来系土器I類の有稜高杯が高杯全体の85%を占めるのに対し、椀形高杯Bは僅か6%を占めるに過ぎない。また西大路遺跡533-O Xにおいても椀形高杯Bの個体数は有稜高杯Aと比べて遙かに少なく、椀形高杯の量的な劣勢が第V様式から受け継がれている。

鉢には小形鉢A～E、中形鉢、有孔鉢A・Bがある。小形鉢Aは、本小様式でA₁(428・429)からA₂(427・438)が分化し、以後もこの両者が共存する。A₂では通常の法量よりやや大きい個体が存在し、また西大路遺跡533-O Xでも小形鉢A₂の中で同様の傾向を示す個体が認められる。A₂の大形化傾向が普遍的な現象か否かは不明であるが、この傾向はII-2式以降にはみられない。小形鉢B(436・440)は、I式の段階と比べて形態上の大きな変化は認められない。小形鉢CにはC a(1752)・C b(442・1753)があり、特に体部の深いC bでは(1753)のように口縁部が内湾する傾向をもつものがある。小形鉢D(437)は堀に類似した形態をもつ鉢で、ナデ仕上げされている。Dは組成中に占める比率が低い。小形鉢E(1322)も低率で存在する。中形鉢は体部の深い(455)、体部の浅い西大路[19-93]がある。(455)は前小様式と同じく脚台を備えている。また中形鉢は口縁部が内湾するが、その萌芽は前小様式の鶴田町[29-85]に表れている。また口縁部の内湾は小形鉢C bと連動した特徴である。大形鉢の出土例を欠くが、本小様式でも存在するであろう。有孔鉢にはA(445・446)・B(450・451)がある。有孔鉢Aは依然としてA₁の形態をとるが、I式の段階と比較して体部の湾曲が強くなっている。有孔鉢BはI式段階より器高に対する口径の割合が相対的に大きくなっている、体部の立ち上がりが緩やかになると共に、内湾の傾向が看取される。また、平底をもつBa(451)から底部を狭窄するBb(450)が派生し、次の小様式まで併存する。

器台については、前様式からの系譜上にある在来系土器I類の大形器台と、受容土器I類である小形器台が本小様式で共存し、同一もしくは接近した時間帯の中での共存関係が成立していたとみなすことができる。大形器台は伝統的な形態を保持したA・Cの他、Dが存在する。大形器台A(458)はI-2式段階と比べて体部が強く絞られ、透孔が裾部付近に單列に施されている点で、大形器台Aの組列で最も新相を示すものである。口縁部には明瞭な端面が作られ、端部は僅かに上方に拡張されている。大形器台C(466)は前小様式の鶴田町[28-70]に後続するものであるが、口縁部外面の垂下帯が断面三角形状に退化、縮小して内傾傾向が著しい。また垂下帯外面、及び口縁部直下内面には波状紋が巡るが、その施紋形状は第V様式までと異なり、庄内式にみられるややぎこちない原体の運びとなっている。口縁部を複合口縁状に成形した大形器台D(465)は本小様式で出現し、I式からの系譜を辿ることができない。大形器台Dと類似した資料は、兵庫県津名郡今出川遺跡ほか淡路島内から出土しており、「淡路型

器台」と仮称されている(松下1980)。しかし大形器台Dは稀少器種ではあるが、纏向遺跡東田地区北溝(北部)下層、大阪府八尾市大竹遺跡第10地点溝状遺構内第4層(村川他1980)、大阪府茨木市東奈良遺跡溝I下層(井上1989)などに類例が散見されるので、本例を含めて大和・河内・和泉・攝津・淡路など大阪湾周辺部および内陸部に点々と分布域をもつことが分かる。本小様式では大形器台が個体数の上で小形器台を大きく上回るが、全ての大形器台の系列はこれを最後として姿を消し、以後は完全に小形器台と置換される。下田遺跡にみられる状況は、器台の組成が転換する端緒の様相を捉えたものといえよう。(467)は和泉地域における最古の小形器台の一例である。本例は受部と脚部が貫通した小形器台A₁で、貫通孔が比較的長く、口縁端部が拡張されずに平坦な作りになっている。また透孔が設けられておらず、最終調整は伝統的なミガキAによっている。西大路遺跡にみられる小形器台X[19-86]は小形器台A・Bの系譜に連絡しない類例のない形態で、受容開始当初における定型化が果たされていない状況を示す遺物と解しておきたい。不定型の小形器台Xは、この後も皿式まで低率ながらも組成に含まれることから、小形器台を用いて行う祭祀形態の思想が浸透した結果、原形となるモデルを在地で模倣していく過程が部分的にあったことが窺える。下田遺跡では本小様式で小形器台A₁の出現をみており、初源の状況下にあるこの段階では集落によって受容形態に格差が生じていたのであろう。これら小形器台の出現は庄内様式の幕開けを告げると共に、小形丸底土器とのセット関係を中心とした、後に大きく展開する小形精製土器の先駆をつけるものとして重要視されねばならない。

製塙土器はB・Cが認められる。前小様式でその出現が確認された製塙土器Bは、本小様式で増加し普遍的な存在となる。体部はタタキ成形痕を残した(1773)・西大路[68-534]が一般的であるが、(468)のようにナデで仕上げた個体もある。このような平滑技法を行う製塙土器Bは、西大路遺跡の堅穴住居1384-O Dに類例がある。1384-O Dは、1370-O Dと同じく屋内高床部を巡らせた「下种田型」の方形堅穴住居で、遺物量は僅少ながらも有稜高杯A₁、弥生形甕A、製塙土器Bなどが検出されており、有稜高杯Aの形態からII-1式に帰属する住居と考えられる。本住居出土の製塙土器Bは口縁部が比較的大きく広がり、また外面ナデ調整で仕上げた点で(468)と共通した特徴を有する。製塙土器Aの資料は未検出であるが、本小様式でも数を減らしながら存在するであろう。その他、本小様式ではまだ稀少ながら脚台III式に相当する製塙土器C(1357)の出現をみる。製塙土器Cの系譜は大阪府柏原市船橋遺跡井戸-5第2層(安村1994)、兵庫県津名郡舟木遺跡E-2グリッド堅穴住居第6層(伊藤1993)等の出土例からも、庄内式(併行)期に遡ることは確実で、なかでも(1357)は溯源的な存在といえよう。

その他の器種として、注口土器(481)が全様式中で1点のみ出土している。類例は纏向1式とされる纏向遺跡東田地区北溝(北部)中・下層から出土している。纏向例と比べると、下田例は口縁部が短く注口部が狭い。形態的には皮袋との関連性が窺えるかも知れない。

b. II-2式

様相6・7を庄内式併行期中段階として位置づけ、II-2式に組み替えると共に、和泉における庄内式甕の出現期を古相、盛行期を新相として二分した。

かつて酒井龍一は上町遺跡「井戸」状遺構出土土器について、伝統的第V様式・上田町II式甕・裝飾性の強い土器群という組み合せから「過渡期II」として位置づけ、伝統的第V様式のみで構成される「過渡期I」との分離を図った(酒井1975)。そして豊中遺跡「河川」状遺構出土土器は、器種構成において上町遺跡と類似するも庄内式甕が著しく多く、杯・壇・小形器台・有段高杯など新たな器形を含むことから、両者を「過渡期II」の基本組成中の古相・新相として理解しようとした(酒井1976)。本小

様式における時代区分の原理も、およそ基本的に酒井の編年観を追認する。

b-1. II-2式古相

様相6をII-2式古相として組み替える。古相に属すると考えられる一括資料は、上町遺跡第1次調査「井戸」状遺構(灰掛・酒井1975)、府中遺跡第1次調査1号住居(灰掛1978)、古池北遺跡大溝(石神・鈴木1978)などから出土している。

上町遺跡第1次調査「井戸」状遺構出土土器は、かつて酒井龍一が「伝統的第V様式」の概念を初めて導入し、時代的な評価を加えた点において、学史的にも重要な位置にある(酒井1975)。しかし基準資料となり得る質を備えながらも、公にされた資料は写真図版だけであったため、編年研究上に障害を生じていた。この度、和泉市教育委員会のご厚意により、下田編年案の比較検討資料として土器の一部に

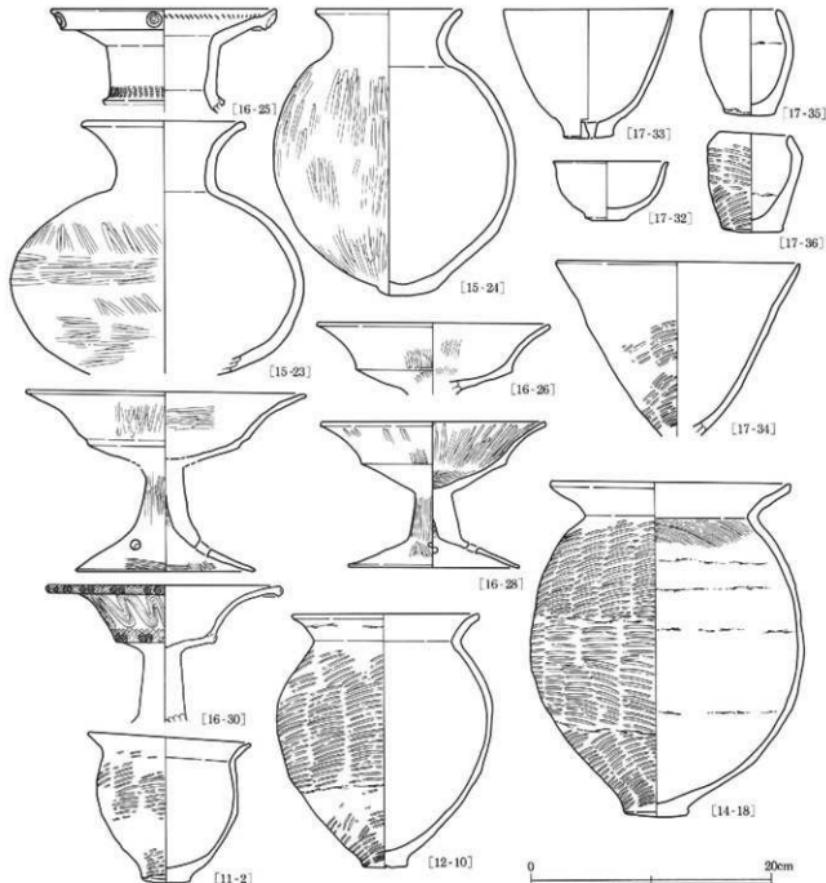


Fig. 451 上町遺跡「井戸」状遺構出土土器実測図

ついて実測の機会を得ると共に、市教委作成の図面の供与を受けた。これら一括資料のほぼ全点は、最近刊行された上町遺跡の報告書(白石1996)に記載されているので、この場では主要器種の実測図を提示し(Fig.451)、組成に触れておきたい。遺物番号は既刊報告書(灰掛・酒井1975)と対応する。

上町遺跡出土土器の器種は広口壺、壺X、弥生形甕、庄内式甕、有稜高杯A・X、小形鉢、有孔鉢、製塩土器で、全般的に灰白色系の色調を呈した個体が多い。広口壺は無紋のAで、体部の形態は扁平化した[15-23]、球形に近い[15-24]がある。[15-24]はかなり退化した不安定な底部を備える。いずれも外面の最終調整はミガキAによっている。壺X[16-25]は口縁端部に粘土帯を貼付して肥厚させ、外面に竹管円形浮紋、内面に列点紋を配した加飾性の壺である。頸部に貼付突帯を設け、その直上に列点紋を巡らせている。破片のため口縁部外面の竹管円形浮紋の単位は不明である。弥生形甕はAのみで、Ab[14-18]、Ac[12-10]、Ae[11-2]など各種法量の個体がある。体部はタタキによる分割成形によっており、最大径を体部上半もしくは中央にもつ。いずれも底部は僅かに突出したA・B形態である。庄内式甕は量的に少なく、また細片のため固形化できないが、黒褐色を呈し多量の雲母を含んだ庄内式甕Aである。有稜高杯AにはAs[16-26・28]とA[無番号]がある。無番号の有稜高杯は報告書記載外の資料であるが、同じく「井戸」状遺構出土遺物である。有稜高杯X[16-30]は短い体部と、稜線を挟んで大きく広がる口縁部を備えた加飾性の強い高杯である。拡張した口縁端面、および口縁部の外面と下端に波状紋を巡らせ、さらに口縁端面と稜線直上に2個一対の竹管円形浮紋を配している。小形鉢にはA[17-32]、X[17-35・36]がある。小形鉢Aは体部が強く湾曲したAで、ナデで仕上げられている。コップ様の小形鉢X[17-35・36]はあまり類例をみない。婧壺に類似した形態であるが、ほぼ完存する[17-36]の口縁部付近には確実に穿孔がなく、鉢に分類される。有孔鉢[17-33]は、底部形態Aの中央部に穿孔を施した有孔鉢Baで、最終調整はナデによっている。製塩土器[17-34]は脚台を欠く資料で、口縁部が斜上方に比較的大きく開く製塩土器Bである。外面にはタタキ成形痕が残されている。

上町遺跡「井戸」状遺構の土器様相は、広口壺A、弥生形甕A、有稜高杯A、小形鉢Aなど、第V様式系統の土器群を主体に残しつつ加飾性の強い器種を組成に含み、下田II-1式の内容と近似する。しかしながら、微量とはいえ庄内式甕Aの共存は、前小様式と画されるべき最も重要な相違点である。

府中遺跡第1次調査1号住居は、ベッド状遺構を伴った「下碑田型」方形竪穴住居である。資料は2種に大別される出土状況を示しており、第1群および第2群上器群として分離されている。調査を担当した灰掛薫はこれを時期差と解し、第2群が第1群より後出の様相とみている(灰掛1978)。

第1土器群は、広口壺Ca・Cb、複合口縁壺A・Ba、細頸直口壺、弥生形甕A、小形鉢A・Cb・X、有稜高杯A・X、楕形高杯B、小形器台X、製塩土器Bなどで構成されており、多彩な内容をもつ。壺には外来系と考えられる個体も含まれ、全体的に下田遺跡でみられる様相6の壺組成より多様性に富み、本小様式における壺の変異を知る上で良好な資料を提供している。広口壺C、複合口縁壺Ba、またその他の加飾を属性とする壺は、竹管円形浮紋、竹管紋を等間隔で配置したり、直線紋、波状紋、擬凹線などの意匠によって飾られる。甕は全て弥生形甕Aで、底部はA・B形態の平底を備えている。有稜高杯は在来系のものがAで占められる他、口縁部に直線紋、波状紋、竹管円形浮紋などを施した加飾性の強いXが安定して存在する。楕形高杯の形態はBである。小形鉢はA・Cbの他に異形のXがある。小形器台は定型化していないXで、他に三角形透孔を有する器台がある。

第2土器群は広口壺A、細頸直口壺、広口直口壺、直口壺A、弥生形甕A、庄内式甕A、有稜高杯A・B、小形鉢B・D、小形器台X、製塩土器Bなどで構成され、他に外来系土器I類として酒津式の甕がある。

ある。壺には加飾性のものが全く含まれていない。壺は弥生形壺Aを主体とするが、量的に僅少ながらも庄内式壺Aの細片も出土している。弥生形壺Aの中には僅かではあるが、丸底を指向したものが認められる。有稜高杯はA₄が主体であるがA₅に近い形態も含まれている。小形鉢にはB・Dがあり、Bには片口を設けた個体がある。小形器台Xは第1土器群と同形態を示す。

この両土器群を比較すると、第1土器群には加飾性の強い壺、高杯が組成中に多く含まれており、簡素な傾向を示す第2土器群との組成には一見すると確かに偏りがある。しかし有稜高杯がA₄を主体とすること、また小形器台Xは同じ形態であり、細頸直口壺が両者共に存在することから、両土器群はほぼ同じ様相に属する見なししてよく、あえて時期差を考慮する必要性は認められない。

古池北遺跡の大溝出土資料は、出土層位や状況から一括性の検討を行ひ得ないが、その土器様相は本小様式古相の特徴をよく備えている。器種は広口壺、複合口縁壺、弥生形壺、庄内式壺、高杯、小形鉢、有孔鉢、小形器台、手焙、製塙土器、蜻壺などである。広口壺Aは体部の張ったAbで、また複合口縁壺にはBa・Cb・Xがある。弥生形壺はすべてAで、法量による分類ではAb・Ac・Aeを認め、さらに器高10cm以下という極小の個体もある。体部の球形化が進行し、また下彫れの個体もあるが、いずれも底部形態A・Bの平底を備える。庄内式壺はいずれもAで、その占有比率は壺組成の8%を占める。高杯は有稜高杯A・B、高杯Xで、有稜高杯AはA₅の形態をとる。小形鉢はA₁・B・Xがあり、A₁では前小様式と同じくやや法量の大きい個体がある。有孔鉢は尖底気味でBbに近い形態をとる。器台に関しては小形器台A₁、B₁の共存が認められるほか、三角形透孔をもつ器台X、脚部に有段部を備えた器台Xなど多様である。器台Xはいずれも外来系土器I類であろう。手焙は3点が出土し、公表された2点はそれぞれ異なる形態の特徴を備える。製塙土器はBで、タタキ成形のものと、口縁部がやや大きく開くナデ仕上げのものがある。蜻壺は底部を欠損するが、下方へ径を縮める形状から蜻壺Aであろう。高杯X、脚部のみを残す高杯、および有段部を備えた器台Xは、調整をミガキBに委ねる。

なお古相の資料中において、上町・府中の両遺跡と、古池北遺跡の各出土土器のミガキ調整を比較すると、前者はミガキAで占められるが、後者では搬入されたと思しき土器を中心にミガキBが散見される。また古池北遺跡の庄内式壺Aは、壺組成中の占有比率が他の2遺跡より多い。このことから、古池北遺跡資料は古相に属しながらも、やや新相に傾斜した過渡的様相が窺える。

b - 2. II - 2式新相

次に、様相7をII-2式の新相として組み替える。本小様式新相に属する一括資料は、豊中遺跡「河川」状遺構(豊中・古池遺跡調査会編1976)、小阪遺跡G地区溝30-a(大阪文化財センター編1992)、四ツ池遺跡第83地区S K30焼土坑(樋口・土山1984)などにおいて認められる。

豊中遺跡「河川」状遺構出土資料は、広口壺、複合口縁壺、直口壺、弥生形壺、庄内式壺、有稜高杯、楕形高杯、有段高杯、小形鉢、小形器台、手焙、製塙土器など多彩な器種がある。広口壺にはA・Bがある。複合口縁壺にはBb・Xが認められる。Xは口縁部外面に幅の広い断面三角形の突帯を貼付け、外見上は複合口縁としたもので、古池北遺跡大溝で検出された複合口縁壺Xもまた同様の作りである。直口壺は平底をもつAaである。壺は弥生形壺A、庄内式壺Aの二者で占められている。弥生形壺Aは体部の球形化が進んだものが多く、また下彫れの個体も認められるが、いずれも底部形態Aもしくは退化した平底を備えている。Ab、Ac、Aeなど各種法量がある。庄内式壺Aは最大径を体部上半、あるいは体部中央にもち、底部は緩やかな尖底の形態を示す。また庄内式壺Aは壺全体の30%以上という高率で存在しており、研究小史で触れた和泉における庄内式壺の搬入比率が高いとの研究者の一般的認識

は、豊中遺跡の様相に大きく影響されている。有稜高杯にはA・Bがあり、AはA₁とA₂がほぼ折半している。椀形高杯はB₂を主体とするが、脚部が口径に及ばない変則的な個体も存在する。有段高杯は外面ミガキB、内面ミガキCが施されたシャープな形態をとる。高杯にはその他、外来系土器I類と思われる高杯Xがある。小形鉢にはA₁・A₂・B・D₁・D₂が認められる。小形器台はBのみで、B₂・B₃の二者がある。製塙土器はほとんどが脚台のみであるが、いずれも製塙土器Bである。

小阪遺跡G地区溝30-a出土土器群には、広口壺、複合口縁壺、直口壺、弥生形甕、庄内式甕、椀形高杯、有段高杯、小形鉢、中形鉢、大形鉢、有孔鉢、小形器台、有段器台、器台X、小形丸底土器、手焙、婧壺など豊富な器種が認められる。

壺は個体数に恵まれず組成の詳細を窺うことができない。広口壺A、直口壺Aの他、垂下する口縁部に竹管紋を配したり、また複合口縁の外面に波状紋を巡らせるなど、加飾性の壺が依然存在する。口縁部を内傾させた複合口縁壺Xもある。甕の組成は、弥生形甕Aの他に「生駒西麓産の「庄内甕」をまねた在地産のもの」、および庄内式甕の3系統の存在が指摘されている。この中で「生駒西麓産の「庄内甕」をまねた在地産」の甕とされている個体は、実見したところ[202-746]が弥生形甕B、[202-749]が庄内式甕Bで、その他は庄内式甕Aであった。これを整理すると甕は弥生形甕A・B、庄内式甕A・Bによって構成され、布留式祖形甕は存在しない。甕の主体は弥生形甕Aで占められる。弥生形甕Aは全て右上がり、あるいは横方向のタタキで分割成形され、口縁部叩き出し手法も散見される。またAb、Ad、Aeなど各法量の個体がある。口縁部形態はhを主体とし、他にf・gなどが認められる。底部を残した個体は、いずれも底部形態AもしくはBの平底である。庄内式甕Aは甕組成中に約18%の比率で存在する。口縁部の形態は1を示すものが多いが、口縁1も認められる。その他、弥生形甕B、庄内式甕Bはいずれも各1点と極微量を占めるに過ぎない。高杯には椀形高杯B、有段高杯があるが、典型的な有稜高杯Aが含まれない。椀形高杯BはB₂、B₃があり、外面をミガキBで調整した個体もある。有段高杯は口縁部長において各種の形態が認められる。小形鉢にはA・B・Dがあり、AはA₁およびA₂の形態が併存している。また小形鉢Dは底部が退化したD₂である。中形鉢、大形鉢はタタキ成形されたもので、内面にはミガキAが施される。いずれも片口を設ける。有孔鉢は半球形の体部をもち、しかも扁平化の進んだA₂である。小形器台にはA₁・B₃が認められ、A₂は下田遺跡の資料的欠落を補っている。有段器台は受部の底付近に穿孔を有しており、また受部底面中央に小穴を設けているが脚部まで貫通していない。器台Xは拡張した口縁部外面に3本1単位の棒状浮紋を配し、さらに鋸歯紋をヘラ描きする点で異質な特徴を備えた器台である。小形丸底土器は底部を欠損しているが、おそらく退化した平底を備えたAbと思われる。手焙は底部に突出しない平坦面をもつが、ほぼ丸底化している。体部はやや外反し、覆部の開口部はやや外方に拡張されている。婧壺は小形で砲弾形を呈するCである。

その他、同じく新相に属すると考えられる四ッ池遺跡第83地区S K30焼土坑からは、複合口縁壺A、弥生形甕A・B、庄内式甕A、有孔鉢Ba、高杯などが出土している。

b-3. II-2式古相から新相の主要器種の動態

本小様式では壺、甕などの器種に大きな画期を認めることができる。壺には広口壺A・B・C、複合口縁壺A・B、細頸直口壺、広口直口壺、直口壺などがある。広口壺Aは古相では伝統的な形態が保持されたAbの古池北[13-15]もあるが、底部に退化傾向が表れたAcの上町[15-24]も出現する。広口壺Baは豊中[25-47]から新相までの存続が認められるが、これを最後としてII-3式以降には継承されていない。またBbは前小様式の中で出現し、また同じ小様式の中で途絶えるようである。広口壺Ca

の府中[6-7, 7-51・53]は西ノ辻I式からの命脈を保った壺で、下田I式段階のものと比べて口径が縮小し口縁部の拡張が弱まるが、その外面に擬四線と竹管円形浮紋を飾る伝統的な装飾法はそのまま遵守されている。広口壺CbもCaと同じく、口縁部の拡張が萎縮して断面三角形となっている。そして広口壺Cの系列はCa・Cbともに古相を最後として組成から脱落する。なお、このように口縁部を拡張、垂下させる個体については型式学的な退潮傾向が相互に連動して起こっており、その兆候は前小様式における大形器台Cの口縁部にみられる。複合口縁壺は前小様式に引き続き、無紋のAである府中[6-5]の他、加飾されたBの古池北[13-14]が存在する。複合口縁壺BはBa・Bbとも、資料的な欠落はあるが本小様式を通じて存在するであろう。複合口縁壺Baは古相の資料として古池北[13-14]があげられ、口径が大きく、口縁部下端に2個一対の竹管円形浮紋を飾る点で、前小様式の形態的特徴や装飾原理がそのまま踏襲されている。複合口縁壺Bbは新相の資料に豊中[25-52・53]があるが、口径は前小様式のものより縮小している。口径の縮小化はBaではII-3式に認められ、またBbではIII式に継承されている。従って複合口縁壺Aより一般に大きい傾向をもつ複合口縁壺Bは、おそらく本小様式新相の段階で法量の縮小があったと解釈でき、ここに加飾性の複合口縁壺における退潮傾向の訪れを看取できる。細頸直口壺の府中[6-15, 8-56]はII-1式で出現しII-2式古相までは存在するが、新相では早くも壺の組成から脱落するなど寿命が短く、当該時期の示準となり得る器種である。前小様式と比べて口縁部、体部に大きな変化はみられないが、底部は退化縮小して府中[8-56]のように弱い尖底に変化する。広口直口壺は古相の(650)、新相の豊中[25-45]を通じて僅かながらも存在する。直口壺は古相で初めて出現して後に継承され、特にIII式において大きな展開をみせる壺である。古相の資料には府中[6-65, 8-63]などがあり、府中[6-65]は球形のタタキ成形された体部と、やや突出した底部形態Aの平底を備え、技法や形態の上で古い様相の名残が偲ばれる。口縁部の形状は直線的に立ち上がる府中[8-63]とやや外反する府中[6-65]がある。直口壺は新相において豊中[25-44]のように出突しない平底となり、また体部は最終調整にミガキAを施し、タタキ成形痕をほぼ消去している。

甕は本小様式で新たに庄内式甕が加わり、弥生形甕と組成を二分するようになるのが最も大きな変化である。弥生形甕は古相段階には全てAで、Aaの府中[9-77]・上町[14-18]、Abの古池北[13-1・2]、Ac(1681・1683)、Ad(574・577・578)、Ae(575・579)・古池北[13-5]など各法量がある。体部の形態については、前小様式においてAeが先行して下膨れの個体を出現させているが、このような下膨れの体部をもつ甕は、本小様式古相の段階で古池北[13-2]のように大形のAbにもみられるようになるが、量的にはまだ少ない。また一方でAaの府中[9-77]が示すように長胴の特徴をなおも保った個体が共存する。体部は右上がりのタタキによる分割成形が主流で、また外面にはハケなどの調整の併用はみられない。口縁部形態はf・hが主であるが、口縁d・eも僅かに残存している。底部の形態はやや突出したAあるいはBが大半を占めるが、古池北[13-5]のようにはぼ球形の体部に、極めて退化した痕跡的な底部を備えた甕も出現する。しかしながら丸底化は果たされていない。弥生形甕Aの新相にはAbの豊中[22-2]、Acの豊中[22-1・3・4]、Adの四ヶ池[68-142]、Aeの豊中[22-6]など各法量の甕がみられるが、これ以降にはAaの存在が認められないことから、本小様式新相を以て超大形のものは弥生形甕Aの組成より脱落すると考えられる。体部の形態は豊中[22-1・2・4]のように、体部下半に重心の移った下膨れの個体が稀ではなくなる。また体部下半の張りが強くなることで、底部の突出は相対的に目立たなくなるが、平底への執着は依然として根強い。新相では庄内式甕の影響を受けて、体部内面にケズリを加えた弥生形甕Bが出現するが、量的には微々たる存在である。

本小様式における庄内式壺の出現は、組成変化の中で最も重要な契機のひとつとなる。庄内式壺の大半はAで占められているが、新相では微量ながらBが壺の組成に加わってくる。庄内式壺Aの動態について、古相と新相で壺組成中の比率が相違することは既に述べた。古相における庄内式壺Aは、組成中で府中[9-81]のように微量の細片として存在するか、あるいは全く見出せない場合もある。すなわち弥生形壺Aが壺組成の主体をなし、庄内式壺Aは組成比の上で僅かな位置を占めるに過ぎない。従って、古相段階の庄内式壺Aにおける形態的特徴の抽出は困難である。このように弥生形壺が壺組成の大半を占有することは、よりもなおさず第V様式の様相を濃厚に残存させる要因のひとつになっている。しかし、古相では稀であった庄内式壺Aは、新相には大幅な数量的増加をみせ、壺組成中で20~30%前後を占めるようになる。庄内式壺Aは(1446)の他、豊中遺跡で多量に検出されている。庄内式壺Aは体部の上半もしくは中位に最大径がある。外面には細筋の右上がりタキが明瞭に残され、また縦方向のハケ調整が肩部以下に加えられ、特に体部中位以下では密である。底部は弱い尖底を有し、口縁部の形態は1である。新相では庄内式壺Aの隆盛と共に、これらとは異なる胎土、すなわち生駒西麓以外の素地をもつ庄内式壺Bの小阪[202-749]が出現するが、量的には微々たるものである。

有稜高杯Aは、古相ではA₁(1672)、新相ではA₂(1441)が主な存在である。椀形高杯BはB₁(665)が本小様式を通じて存在すると思われ、また古相でB₂(666)からB₃が派生し、おそらくいずれもIII式まで共存する。杯部の形態については、B₁およびB₂に大きな違いが認められないが、B₃はこれらより口径が小さく半球状を呈する点で異なっている。椀形高杯はやはり高杯の組成に占める個体数が少ない。椀形高杯Bの杯部外面はミガキAあるいはBによる調整が一般的であるが、(665)は口縁部に比較的強いカキメ状のハケを全周させ、その下部にミガキAを加えている。これと同手法による椀形高杯Bは西大路遺跡の河川501-O Rから出土しており、低率ながらある程度面的な分布域を有していた意匠であった可能性も考えられる。有段高杯は古相で出現してIII式まで引き継がれる高杯で、古相(664)に比べて新相の豊中[28-87]・小阪[201-717]の口縁有段部は、より強い屈曲を示す傾向が認められる。外面の調整はミガキBを主体とする。なお、上町、府中遺跡では加飾性の強い高杯が出現するが、その存続期間は短いようであり、また下田遺跡における高杯は加飾を受けにくい器種なので、加飾された高杯は搬入土器もしくは地域偏差の可能性を考慮すべきかも知れない。

鉢には小形鉢A・B・Ca・Cb・D、中形鉢、大型鉢、有孔鉢A・Bがあり、基本組成に大きな変化は認められないが、これまでも出現率が低く、かつ形態的にやや不安定であった小形鉢Eが、本小様式以降は組成から脱落している。小形鉢Aは古相ではA₁の府中[7-27・29]、A₂の上町[17-32]・府中[7-26]の二者がある。新相に至って同じくA₁の豊中[26-60・63]・小阪[202-734]、A₂の小阪[202-724・737]が存在すると共に、A₂から底部が丸底化したA₃の豊中[26-61]が派生し、いずれも共存関係を保ちながら併存する。A₃はA₂より体部の内湾が強く、半球形の体部を呈している。これは前小様式からみられる傾向である。小形鉢Bは古相では府中[9-92]のように、前小様式より口径に対する体部高が低くなり、さらに新相の豊中[26-67・68]では体部の内湾傾向が強まる。小形鉢Caは古相(657)まで存在するが、新相以降には姿を消すようである。小形鉢Cbの古相、(655)・府中[7-31]には、前小様式で萌芽した口縁部の内湾する特徴が継承されている。Cbは本小様式新相からII-3式までの資料を欠いている。小形鉢Dは直接的な資料はないが、本小様式を通じて底部形態AもしくはBの、典型的なD₁が存在すると思われる。またこれよりやや形態的に退化し、突出しない底部を備えたものが古相では府中[8-86]、新相では豊中[26-66・69]として存在する。さらに新相ではこれらより

体部の扁平化が進むとともに、丸底を指向した豊中[28-97]・小阪[202-726]などのD₂が分派し、小形鉢Dの基本形態とそれから派生したいずれの形態も共存する。中形鉢では古相で深い体部をもつ府中[7-24]、新相で浅い体部をもつ小阪[202-742]がある。また大形鉢も古相では(697)、新相では小阪[202-743]が認められ、2種の中形鉢と大形鉢の、おそらく機能的な使い分けによる共存関係が、少なくともI-2式以降、本小様式に至るまで大きな変化をみせていないことがわかる。有孔鉢Aは古相の資料を欠くが、新相の小阪[202-736]では体部の扁平化が進行したA₂となっている。有孔鉢B_aは古相では(658)のように、前小様式と形態上の大きな変化は認められないが、新相の四ッ池[68-147]では体部下半の球形化が進んでいる。B_bは古相の(696)を最後に姿を消すようである。

小形器台は古相の段階で、前小様式から引き続きA・Xを認め、またB_aが出現して組成に加わる。古池北[14-20]は、口縁部の拡張を伴わずに端面形成を行う点で、前小様式と共通の特徴を有する小形器台A_aである。(654)・府中[9-105]は小形器台Xで、形状が安定しない。小形器台Bの古池北[14-16]は、口縁端部に拡張を伴わず丸くおさめたB_aである。統いて新相の段階では、小形器台A・B_aの他に有段器台が器台の組成に加わる。小形器台Aの小阪[202-719]は新相から貫通孔が短いA₂となり、また口縁部の端面形成も行われなくなる。小形器台Bについては、B_aが資料的に欠落しているが、新相で口縁端部の拡張が進行したB_aの豊中[28-91]、およびB_aの小阪[202-720]・豊中[28-93]が派生し、B_aを含めておそらくいずれも共存する。有段器台の資料として小阪[201-710]が挙げられるが、この個体は受部底中央の貫通孔であるべき穿孔が貫通しておらず、形態的にはやや不安定な要素がある。

小形丸底土器は本小様式新相で初めて出現する。小阪[202-728]は口縁部が短く外反し、また底部の形状が不明ながら、おそらく退化した平底を有するAbと思われる。小形丸底土器の存在は、本小様式の段階ではまだ極めて稀少である。

手焙は古相の段階で、古池北[14-35・36]が認められる。前者は体部が内湾し、覆部がおそらく擬口縁部付近で屈曲するもので、鶴田町[28-71]からの系譜を引くと思われる。この個体は退化した平底を備えており、体部下端に刻目をもつ突帯を巡らせるほか、口縁部付近に耳上突起を貼付する点で古い形態的特徴をとどめている。後者は覆部の擬口縁付近における退化した屈曲形態から、前者より派生した可能性を残すが、本小様式以前にはみられなかった体部の外傾という新たな特徴がみられる。また突出した平底をもつが、以前の手焙にはほとんど付随する属性であった体部下端の突帯を失っており、型式学的に大幅な退化傾向を窺うことができる。新相の手焙は、古相の古池北[14-35]の系譜に乗る豊中[26-58]と、同じく古相の古池北[14-36]に繋がる小阪[211-877]がある。いずれも底部はほぼ丸底化し、体部下端の突帯を完全に失っている。また後者では覆部の開口部が外側に拡張されるという、新たな形態的特徴が出現する。和泉地域での手焙は、本資料群をもって姿を消すようである。

製塙土器は本小様式を通じて上町[17-34]他のBが認められ、個体数の上でも主体を占める。古相ではAと思われる脚台が上町遺跡(酒井1976所収)から出土している。現状では系譜的に最も遡る製塙土器Aが本小様式古相まで命脈を保っていたことを証する資料であるが、新相以降には途絶する。新相の段階では製塙土器Cと思われる脚台をもつ豊中[31-157]がみられ、CはII-1式以降、極めて低率ながらも組成の一部を構成していたようである。

蛸壺については、Aは古相で古池北[14-33]、新相で(1464)が認められるが、これを最後に次小様式以降には姿を消す。I-3式以降、資料的には空白であった蛸壺Bは、本小様式新相で(1463)が認められ、この間にも継続して存在したことが窺える。また新相では蛸壺A・Bより小形で、やや尖り気味の

底部を有する婧壺Cの小版[202-732]が組成に加わる。

その他、皮袋はI-2式の(1671)以来、組成中にみられなかった稀少器種であるが、本小様式新相で(1472)が含まれることから、その間にも低率で存在した可能性がある。本資料は薄く延ばした粘土板を巻いた程度の粗雑な作りで、この器種の末期的な状況を示すものと思われる。

なお付け加えておけば、上町・府中の両遺跡と下田遺跡の各資料を比較した場合、下田遺跡では資料的制約を考慮しても、高杯や壺の装飾性の点で上町・府中遺跡の方が内容的に豊かなようである。II-2式においては、下田遺跡は周辺他遺跡より第V様式的な様相がより濃厚に残存していたのであろうか。いずれにせよ内容が時間軸の中で刻々と変貌するII式全般の土器様相については、少なくとも水系を軸とした微小な範囲の地域偏差を考慮する余地があり、組成の細部は一元的・画一的に変化せず、いわば水系ごとの個性が表れ易かったのかも知れない。

c. II-3式

様相8を庄内式併行期新段階として位置づけ、II-3式に組み替える。弥生形壺、庄内式壺に加え、新たに布留式祖形壺が出現する点に画期を求めている。本小様式の資料は和泉地域では稀薄であるが、四ッ池遺跡第83地区 S A01住居址(樋口・土山1984)がこれに属すると考えられる。

四ッ池遺跡S A01住居址の器種は、小形壺、弥生形壺A、庄内式壺A、布留式祖形壺、有稜高杯C、椭形高杯B、小形鉢A・B、有孔鉢、小形丸底土器、婧壺などである。小形壺はいずれも類型化できないう。布留式祖形壺の口縁部形態はrである。小形丸底土器の形態はIII式に下る可能性もあるが、V様式系の小形鉢が多く認められる他、全体的に第V様式的色彩がかなり残るため本小様式に含めた。

以上の様相を加味して本小様式の土器組成を整理する。

壺には直口壺、広口壺A、複合口縁壺、広口直口壺などがある。広口壺はかなり丁寧に作られたAc(607)が残存する。しかしこの器種は全体的にみて退潮傾向にあるとみてよい。直口壺(1533)は、おそらく平底を残した大形のAaと推定されるが、この器種のIII式での大幅な数量の増加を考えると、本小様式ではまだ目立った存在とはいえない。広口直口壺(1524)は、やはり低率で壺組成の一部を占めている。複合口縁壺にはA(1525)・Ba(1526)がある。前小様式と比べ、法量の上で小形が主体であった複合口縁壺Aには大きな変化が認められないが、大形の傾向の強かったBaは口径がかなり縮小している。これらはIII式に繼承されない器種であり、複合口縁壺Baの縮小化は退化傾向の一端と捉えることが可能であろう。また複合口縁壺BbはIII式で極微量の存在が認められるので、本小様式でも直接的な資料を欠くが、前小様式から繼續して組成の一部を構成したであろう。

壺は弥生形壺A・B、庄内式壺Aに加えて、布留式祖形壺が組成に加わる。統計資料としては絶対量の点で満足し難いが、本小様式に属するSD2254、およびSW1363における壺の組成を掲げる(Tab.42)。弥生形壺Aは資料数の制約によると思われるが、Ab・Adが確認されるに過ぎない。しかしそらくAaを除く各法量のものが存在したであろう。庄内式壺、布留式祖形壺の存在によって、弥生形壺Aの占有率は相対的に低下するが、なおも壺全体の60%近くを占めており、壺の構成上で主体的な位置にある。弥生形壺Ab(1494)は倒卵形の体部と底部形態Aを備え、古い様相を残した伝統的な壺であるが、全体的に粗略な作りになっている。弥生形壺Adに

は底部形態Bの(1499)と、
平底の底部にタキキを加

Tab.42 下田II-3式資料群における壺の組成

	弥生形壺A	弥生形壺B	庄内式壺A	布留式祖形壺	計
SD2254	18 (55%)	1 (3%)	10 (30%)	4 (12%)	33 (100%)
SW1363	11 (58%)	—	4 (21%)	4 (21%)	19 (100%)

えて丸底様に漬した(1500)があり、いずれも体部は球形化を指向する。弥生形甕Aの口縁部は大多数の個体がh形態をとるが、僅かながらe・f形態も残存する。弥生形甕B(1511)は右上がりのタキで体部を球形に作り、下半に斜方向のハケを施したもので、内面は頸部以下にケズリを加えている。体部の形態や調整に庄内式甕Aの強い影響をみると、口縁部はh形態をとり、体部外面のタキは庄内式ほど細筋ではない。全体に厚ぼったい作りで、技量的に高い水準で模倣されたとはみなし難く、また組成中では微々たる位置を占めるに過ぎない。庄内式甕Aは甕組成の中で20~30%を占めており、II-2式新相でみられた庄内式甕の割合とほぼ同率で推移している。口縁部形態はIを主体としており、m・kが僅かに含まれる。既知の資料群中では庄内式甕Bを認めることができないが、Bは既に前小様式新相において出現をみていることから、本小様式でも低率で存在するであろう。布留式粗形甕は本小様式で初めて出現し組成に加わる甕である。おそらく出現当初の本小様式内では搬入された外来系土器II類が主体と推定しているが、既に甕組成中で10~20%を占める。従って、庄内式甕における出現当初の流通状況と比較すると、かなり急速に普遍化していく様子が窺える。布留式粗形甕にはA(1514・1515)・B(1516)・C(606)・F(603)といった諸形態を認め、口縁部はj・m・o形態である。

高杯には有稜高杯A・C、楕形高杯B、有段高杯などがある。有稜高杯A(1535)はA₁の形態をとる。楕形高杯BにはB₁の四ッ池[63-5]があり、また四ッ池[63-14]は半球形を呈した杯部の特徴からB₂と思われる。有段高杯は完形の資料に恵まれないが、(610)の杯部の有段部は、前小様式よりさらに屈曲が強まり明瞭になっている。(612)は同じく有段高杯の脚部と思われる個体で、脚柱部は中実に作られており、脚裾部には緩やかな浅い段が巡る。また本小様式において、杯部外面にミガキB、内面にミガキCを用いた有段高杯C(608)が初めて出現するが、まだ目立った存在ではない。

鉢には小形鉢A・B・D、中形鉢、大形鉢、有孔鉢、台付鉢などがある。小形鉢Aは前小様式から引き続いているA₁(1550・1553)、A₂(613・614)、およびA₃の四ッ池[63-1]が存在する。小形鉢Bの四ッ池[63-2]は口径に対して体部高が低いもので、前小様式古相で獲得された形態的特徴がそのまま踏襲されている。小形鉢Dとして平底のD₁(1551)があり、また直接的な資料を欠くが、丸底のD₂も存在するであろう。なお、小形鉢C₁は確認されていないが、III式にみられることから本小様式でも存在すると考えておきたい。中形鉢では体部の浅い鉢が姿を消し、深い体部をもつ鉢だけが残存する。中形鉢(1560)の底部は完全に丸底化して体部が半球形を呈する。大形鉢(1520)についてもIII式の状況をみると、本小様式で中形鉢と同様、深い体部をもつものが主流となる傾向が看取される。有孔鉢はB₁(616)、B₂(1559)があり、いずれも前小様式と比べて大きな形態変化はない。またB₂は本小様式を最後として姿を消す。これらの他に若干の台付鉢がみられる。

器台には小形器台A・B・X、有段器台がある。小形器台Aは貫通孔の短いA₁(1540・1542)で、脚部は内湾傾向がある。Aは本小様式を以て消滅し、III式には継承されない。小形器台BにはB₁(622)、B₂(623)、B₃(621)が認められ、B₁以外はIII式に受け継がれていく。外面の調整はミガキAによるもの(623)と、ミガキBによるもの(621・622)が混在する。小形器台では他にX(624)がある。Xは皿形の受部をもち、脚部に透孔を有することから、形態的には小形器台Bと類縁関係にあるが、甚だしく粗製である。有段器台(625)は脚柱部が貫通し、脚裾の有段部が明瞭でシャープな作りになっている。

小形丸底土器にはAa(617)、Ab(618)が認められ、(618)は痕跡的な小さい平底を有する。外面の調整はミガキB(617)、ハケ(618)がある。小形丸底土器は量的にまだ目立った存在ではない。

製塙土器は依然としてB(1547~1549)を主体とし、脚台の形態や法量に顕著な変化はない。また本小

様式での出土例を欠くが、前小様式新相にみるよう、若干量のCは存在したであろう。

蛸壺は引き続きB(1538)、Cの四ッ池[64-41]が存在する。いずれも前小様式新相の資料と比べてほとんど形態上の変化が認められない。

5. 下田Ⅲ式

様相9を庄内式併行期の直後に続く布留式期と認識し、ここに大様式の境界を設け下田Ⅲ式として組み替える。第V様式系統下の器種が衰微し、II式あるいは本様式で出現する新たな器種を軸に新たな組成が構築される。本様式に属する資料は船尾西遺跡SG-001(樋口1978)、四ッ池遺跡第83地区SA03住居址(樋口・土山1984)、大庭寺遺跡B76-OW(森村・有井編1989)出土遺物にみられる。

船尾西遺跡SG-001は梢円形の素掘り井戸である。調査では第1~6次まで層位的に土器を取り上げられているが、第1~5次面からは布留式祖形甕、第6次面からは製塙土器Dが検出されており、あえて層位による大きな時期幅を考える必要はなかろう。器種は直口壺A、布留式祖形甕C・F、大形鉢、有稜高杯C、布留系高杯、小形丸底土器B、小形器台、製塙土器Dなどで構成される。小形器台は破片につき詳細は不明であるが、脚部は無孔で小形器台Cの可能性がある。

四ッ池遺跡第83地区SA03住居址出土土器は、本様式に属する資料を主体としているが、一部の布留式甕の口縁部は明瞭に内傾する端面をもつT形態であることから、III式よりも新しい布留式前半の土器が混在する可能性がある。III式と考えられる器種には、直口壺B、布留式祖形甕F、布留式甕、有段高杯、有稜高杯C、布留系高杯、椀形高杯、低脚高杯、小形器台Bなどがある。

大庭寺遺跡B76-OWは素掘り井戸で、内部から出土した遺物の器種は甕に偏っており、布留式甕、および外面ハケ調整の甕Xがある。破片のため断言できないが、おそらく布留式祖形甕も存在する。

さて、本様式の状況を把握するためには、量的に恵まれた下田遺跡SD1108(3層)出土土器群を中心と資料化するのが最も適切である。各器種における組成比はTab.40に即して算出した。

壺はSD1108(3層)から122点が出土し、同層出土の土器総数の12.2%を占める。

第V様式の系譜に乗る広口壺A(860)が残存しているが、この器種は甕組成中の2.5%を占めるに過ぎず、I・II式における主体的な座から脱落したこと示している。

広口壺の減少を補うかのように増加をみせるのが、壺のうちの47.5%を占める直口壺である。直口壺はII-2式から引続いて平底を残したAa(830)が存在するが、これから分化した丸底のAb(789)が主体となるようである。また前様式では大形の直口壺Aが知られるのみであったが、本様式ではAをもとに小形のB(772)が出現し、量的にもまとまった存在となる。完存・完形品による法量分布図(Fig.452)では、A・Bともそれぞれ集中部分が表れ、法量の上でかなり安定した群を形成する。口縁部の形状は直線的か、僅かに外反する特徴を備えた個体が主体的であるが、他にやや内湾するものもある。直口壺A・Bの口径に対する頸部径、および口縁部高的割合による分布図(Fig.453)では、ドットは集中部分を形成せず分散する。すなわち口縁部の形状には統一的な規格性を認め難く、かなりのばらつきが生じている。外面調整は、口縁部については縦・斜方向ハケ、体部については斜方向ハケを施した個体が多く、これらのうちで特に口縁部のハケをヨコナデによって半ばすり消したものも散見される。体部のハケ調整の方向は、前記したように概ね縦・斜で一定しているが、こうした調整の後に、布留式甕と同じく肩部に横方向ハケを巡らせた個体も、少數ながら認めることができる(806・807)。こうした個体は口縁端部においても甕と同じく肥厚する特徴を備え、内面ケズリの位置もまた共通している。直口壺Bでは外面をナデもしくはハケ調整した後、ミガキBによる最終調整を加えた個体も少なからず存在する。

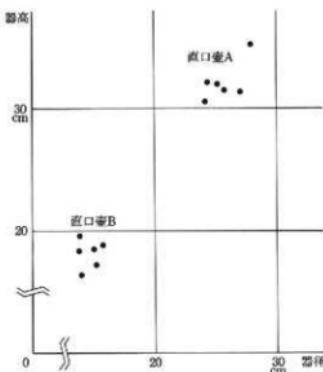


Fig. 452 直口壺の法量分布

ミガキBの使用は一部の直口壺Aにもみられるが、概ね調整箇所が部分的であるか、あるいはやや疎らであって、全体に丁寧なミガキを施した例は少ない。この他の外縫調整には、少数であるがミガキAによる個体があり、中には全面をミガキAで調整し、その後で肩部にミガキBを施した例(817)

もある。体部内面の調整は、ナデ、あるいは斜・横方向ハケの他、これらの後にケズリ調整を加えたものがある。ケズリの位置は底部から体部中央、あるいは肩部までの個体が多く、頸部直下に及ぶものは稀である。

複合口縫壺ではA・Baが姿を消す。また複合口縫壺Bb(866)は残存するが、壺組成中で0.8%と微々たる存在に過ぎず、従ってAおよびBの系譜は本様式にほぼ継承されないとみてよい。これらに代わって本様式で出現する複合口縫壺Cは、壺のうちの12.3%を占めており、直口壺に次いで数量が多い器種となる。複合口縫壺Cは大きく広がるシャープな口縫部を備えた、いわゆる「茶臼山型」の複合口縫壺で、口径からみて相対的に小形のCa(833)、中形のCb(838・842)、大形のCc(843・844)に大別できる。小破片が多いために分類に限界があるが、複合口縫壺Cで一括した中でも、紋様の有無などからさらに細分できる可能性がある。口縫部外面の調整は、無紋のものはミガキBが大勢を占め、少数のミガキAの存在もみられる。(837~839・844)は口縫部外面に波状紋を施し、また竹管円形浮紋や竹管紋をもつ個体もあって、II式以前からの施紋法を部分的に受け継いだ資料であろう。しかし波状紋においては、II式段階の主流であったぎこちない原体の運びはみられず、(844)に代表されるように、おそらく回転力を利用した流麗とも称すべき形状が獲得されている点が異なっている。

広口直口壺(783)はII式から本様式に引き継がれるが、壺のうちで僅か1点、0.8%を占めるに過ぎない。以上の他に、安定した群を形成しない種々の壺を、壺X、複合口縫壺Xとして一括した。壺全体に占める割合は、壺Xが9.0%、複合口縫壺Xが8.2%である。これらの多くは形態や色調などから、外来系土器I類に属する搬入土器と思われるが、(868)について阿波産と推定できる他は、出自を明確にで

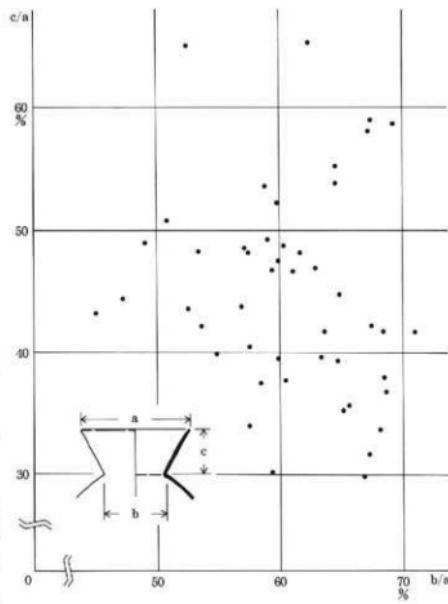


Fig. 453 直口壺口縫部の比較

きない。概して小形品が多いが、(826)のように大形の複合口縁壺Xもある。全様式を通じて彩色を施した壺は稀少であるが、本様式において壺(869)の口縁部内外面に赤彩がみられる他、複合口縁壺X(826)の口縁部内面にも黒色で光沢のある顔料(漆?)が塗布されているようである。

壺は452点、土器総数の45.2%を占めている。弥生形壺、庄内式壺、布留式祖形壺、布留式壺、S字状口縁台付壺、壺Xなどで構成される。

弥生形壺は壺組成中の11.3%である。これらのうち82.4%は弥生形壺A、残りの17.6%は弥生形壺Bで、在来技法の延長上にあるAが、依然として弥生形壺の主体をなす。弥生形壺AにはA b(924・925)、A c(922・923)、A d(928)、A e(931)の各法量がある。体部は右上がり、あるいは水平方向のタタキ技法によって分割成形され、從来通りの成形技法がそのまま踏襲されている。多くの個体では体部が楕円球形を呈するが、完全な丸底化を果たしたAe以外は、退化した平底がなおも設けられている。口縁部形態には「・h・i」がある。なかでも(924)が備える口縁部の内湾、及び端面が内傾するi形態は、弥生形壺に攝取された布留式壺の部分的な特徴かも知れない。また(926)は体部内面にケズリこそもたないが、ハケ調整を併用した倒卵形を呈する体部や、口縁部I形態などから庄内式壺の強い影響を受けたことを窺わせる。しかしこれらは外見上の類似であって、機能面における利便性を追求したものではない。これに対して、体部内面の調整にケズリ技法が採用された弥生形壺B(929)は、庄内式壺、布留式祖形壺、布留式壺などの模倣、あるいはこれらの影響下に成立した在来系土器と考えられる。II式の段階より増加傾向にあるが、弥生形壺の組成中においてもなお低率である。口縁部形態はhを主体とするが、稀にb(932)もみられる。口縁部b形態は、I式以前に位置づけた弥生形壺Aの口縁部にもみられるが、これは早く途絶してI式以降に継承されないため、本様式におけるb形態は明らかに異系統と捉えられる。

庄内式壺は本様式で依然として存続する。しかし壺組成中の占有率は8.2%であり、前小様式における数値、20~30%と比べれば大幅な低下をみせている。またII式から引き続きA(872)・B(876)の2系統が認められるが、II-3式まで庄内式壺の主体であったAに限れば、壺全体の中で僅かに2.7%を占めるに過ぎず、明確な減少傾向が看取される。庄内式壺Aの口縁部はm形態で、体部外面の調整は極めて細筋の右上がりタタキ成形の後、肩部以下に斜方向ハケが加えられている。頸部のくびれ部分にやや強いヨコナデを施した個体もある。口縁端部の造作や内面頸部に及ぶケズリは、やや粗雑化して鈍くなっている。なお、体部の全面をハケ調整した個体はない。庄内式壺Aの減少は、前小様式まで極めて稀少であった庄内式壺Bの増加によって、あたかも補完されるかのようにみえる。庄内式壺AとBの数量比は約1:2であり、少なくとも量的にBがAを大きく凌駕し倍量に達するという、II式までとは逆転した現象がおこっている。庄内式壺Bの口縁部形態はlもしくはmであり、I形態が主体的である。口縁部外面の端面に弱い擬凹線をもつ個体もある。体部はやや尖底気味の丸底を呈し、調整はほぼ庄内式壺Aと同様である。庄内式壺Bの出自に関して、胎土砂礫分析を実施した範囲内ではすべて播磨の流紋岩組成との結果が得られた(分析篇第6章)。すなわちこの壺について、播磨産庄内式壺の可能性が指摘されたわけである。河内・大和以外の庄内式壺生産地として播磨地域が提唱され、從来より大和産と考えられてきた長越遺跡の庄内式壺の出自に疑問が投じられて以来(米田1992)、播磨産庄内式壺の存在は龍野市尾崎遺跡(岸本・古本1995)ほか、播磨地域の複数の遺跡で追認されるに及んでいる。こうした播磨地域の遺跡の現状から、その存在を否定すること自体はもはや困難であり、播磨において庄内式壺が組織的に生産されたこと、また河内型・大和型それぞれの特徴をもつ2系統の庄内式壺が存在したこ

とは、まず疑いの余地はないと考えられる。しかしその編年上の位置づけに関しては、庄内式壺の播磨発祥を唱える米田敏幸(米田1992)、播磨での発生を困難とみる岸本道昭(岸本1996)など、現段階では不確定な部分が残されている。下田遺跡から出土した庄内式壺Bは、形態、および製作技法をAとはほぼ同じくし、いずれも河内型庄内式壺と称し得るものである。従って胎土の相違を除けば、形態・技法上の特徴をもって庄内式壺A・Bの両者を明確に岐別することは、現段階では困難である。下田遺跡出土の庄内式壺Bが正しく播磨産であるか否かの解決には、考古学的観察法に基づいた客観的な事実を積み上げていく以外にならう。岸本は尾崎遺跡16-溝の播磨の庄内式壺を、総体的には河内型としながらも「口縁部のつまみ上げられた外端面がやや内傾すること、口縁部直下外面のナデがないこと、底部の尖り方があまいこと」を相違点として集約した(岸本・古本1995)。下田Ⅲ式の庄内式壺BがAと異なる点は、外面タタキメがより深く明瞭に刻まれること、内面ケズリが底部付近から頸部直下まで連続的で、しかも左上方向に削られる傾向が強いことである。

前小様式で初めて出現した布留式祖形壺は、本様式でも引き継がれている。肩部以下まで残存しない布留式祖形壺では、布留式壺との区分が困難な場合があるため、この両者を分離して正確な数量比率を算出することができない。このため、それぞれの個体数を合算して壺全体に占める割合をみると、76.3%の数値が得られる。しかし完形品、及びそれに近い個体の数から類推すれば、その大半は布留式祖形壺で占められ、布留式壺は決して目立つ存在ではないようである。従って布留式祖形壺が、壺組成の中での主体的な位置にあると考えられる。本様式における布留式祖形壺は、II-3式でみられたAが消滅し、B(884)・C(883)・F(894)が存続するほか、D(880)・E(889)の出現を見る。布留式祖形壺それぞれの数量比は、布留式壺と同様の理由で正確に算出することができない。法量からみれば器高20cm前後の大型品と、器高10~15cm前後の小形品があり、前者が大多数を占める。器高10cm前後の小さい壺では、内面ケズリをもたない布留式祖形壺Bが目立つ。布留式祖形壺は全般的におよそ球形の体部をもち、底部はすべて丸底で平底の痕跡すら認められない。また体部外面の調整にハケを主体とした平滑技法が用いられ、内面にケズリを施した個体では、その前段階としてハケ調整を行う場合が多いようである。しかし、口縁部形態。頸部ヨコナデの強弱、内面ケズリの有無やその位置など、その他の諸属性に細かい相違点を抽出でき、上記の如き分類が可能となる。こうした相違は、布留式祖形壺として便宜的に一括した土器群の、系譜上の差異に起因すると考えられる。形態上の特徴から、庄内式壺との関連を考慮する余地があるのは、布留式祖形壺Cである。Cの口縁部はm形態で、体部はやや肩が張った球形を呈し、丸底あるいは尖底気味の丸底を備える。ケズリは頸部直下に及ぶものと、肩部内面以下をケズるものがあるが、いずれも頸部内面の屈曲は比較的鋭い。従って系統上は、庄内式壺の型式学的な発展形態と見なすこととも可能である。しかし布留式祖形壺Cは、いずれも胎土が生駒西麓産のものではなく、庄内式壺Aと直接的な系統関係をもたないようである。胎土砂礫分析では播磨産の個体が含まれるとされ、あるいは庄内式壺Bとの有機的関係をもち得るかも知れない。布留式壺との関連を想定できるのは、布留式祖形壺Fである。Fの口縁部はj・k・m・n・o・pの諸形態が認められる。体部は球形で丸底、あるいはやや尖底気味の丸底をもち、体部内面ケズリは頸部まで及ばない個体が多い。頸部外面は強いヨコナデが施され、また頸部内面の屈曲は鈍い。このように布留式祖形壺Fは、仮に肩部の横方向ハケを付加すれば、布留式壺に分類されるべき形態的特徴を備えたものといえる。以上その他、布留式祖形壺B・D・Eについては、おそらく庄内式・布留式両系統の特徴が部分的に融合しているとみられ、いずれの系譜下に属するのか決定し難い。なお、布留式祖形壺のうち肩部施紋をもつ個体は、線刻を有する

布留式祖形甕B(904)のみで、他に列点紋や波状紋をもつ例は皆無である。

布留式甕(910)は本様式で出現する甕である。器高20~25cm前後の大形品と、器高15cm前後の小形品があるが、小形品は極めて少ない。体部は概ね球形、もしくは僅かに長胴気味の球形で、後者は前者より器高が高い傾向がある。また稀に倒卵形に近い体部形態のものもある。底部は丸底で、内面に指頭圧痕の観察される個体が多い。布留式甕は先に触れたように、布留式祖形甕Fと類縁関係をもつ可能性がある。しかしながら、その口縁部はm・n・o・p・q・r形態をとっている。型式学的には布留式祖形甕群より新しい様相を垣間みせている。ただし、口縁部端面が内傾するr形態は本様式において稀で、しかも端面形成が不明瞭である。口縁部は内湾傾向をもつ個体もあるが、外上方へ直線的に延びる例も少なくない。このように本様式の布留式甕には、型式学的に一般化できない不安定な要素が強い。なお、布留式甕を特徴づける肩部の横方向ハケは、連続的で単位の長いハケと、断続的で単位の短いハケの2種があり、個体数の上で前者が主体を占める。

明らかな外来系上器I類の甕として、東海系のS字状口縁台付甕が3点出土した(956~958)。甕組成中では0.7%に満たず、微々たる存在である。相対的に口径16cmを越える大形品と、口径7~8cmの小形品があり、この両者の胎土、色調はそれぞれ異なっている。いずれも口縁部はS字状に屈曲しており、体部外面に縦あるいは斜方向のハケ調整を施す。大形品は小形品と比べて、口縁部第2段の外方への拡張が強く、またハケ調整原体の単位が粗い。小形品の口縁部は第2段が上方に拡張されている。以上のような特徴を当該郡の濃尾平野における土器分類に照らせば、大形の(958)は甕C₄、小形の(956・957)は甕C₅に相当する(赤塚1990)。従って廻間編年の7~8期、すなわち廻間III式1~2段階を当てることができ、下田III式との併行関係について一定の示唆が得られる。

甕全体の中で2.0%は、上記のいずれにも属さない甕Xが占めており、およそ粗製で型式学的に不安定な小形の甕群である。屈曲の弱い口縁部とタタキ成形後にハケ調整された体部をもつ(951・953)などは、第V様式系の弥生形甕Aと近縁ながら、より技術的な退潮傾向が体現された例とみてよからう。

高杯は40点が出土し、土器総数の4.0%を占めている。有稜高杯A・C、椀形高杯B、有段高杯、布留系高杯、低脚高杯、高杯Xなどがある。

有稜高杯Aは高杯組成中で2.5%を占めるに過ぎず、もはや主要たり得ない器種となっている。(969)は本様式で唯一の有稜高杯Aの例で、前小様式でのA₅より口径に対して杯部稜径がさらに縮小し、脚裾部も狭窄する傾向が強く表れたA₅である。器面の調整は粗雑なミガキAで、この器種においては、遂にミガキBが採用されることはない。

有段高杯C(960)は高杯の中で17.5%を占め、激減する有稜高杯Aとは対照的に、前様式における状況と比べて大幅な増加傾向が看取される。杯部の形態は、口径と稜径が前様式のものより少し接近して、口縁部が比較的急角度で直線的に立ち上がるようになる。調整は斜方向ハケとミガキBが併用され、また杯部内面にはミガキCを施すものがある。脚柱部は中空で、器壁は比較的薄い。

椀形高杯Bは高杯組成中の10.0%で、下田遺跡ではB₁(970・971)だけで占められるが、四ッ池遺跡ではB₁[66-95]が出土している。B₁はII-2式古相ではやや長めであった脚柱部が、本様式では再び短小化してII-1式の形態と類似するようになる。B₁は完形品に恵まれないが、半球形の杯部と大きく直線的に開いた脚裾部を備えている。脚柱部は中実で短いようである。本様式では全体としてBは主要な器種ではなく、なかでもB₁も稀な存在であったろう。

有段高杯はII-2式以降に低率ながらも存在する高杯であるが、SD1108(3層)出土の高杯中におい

ても2.5%と、同じく占有率は低い。有段高杯の型式変化は、杯部有段部の屈曲が強くなる方向に進んでいる。本様式における[四ッ池64-53]は、有段部がほぼ垂直に立ち上がって、前様式段階のものと比較して最も強調された屈曲をみせている。

布留系高杯は本様式で初めて出現する高杯である。高杯組成中の2.5%に位置するに過ぎない。最終調整にミガキを用いず、ハケの後にナデを施すなど、平滑技法を主体に仕上げられた高杯である。胎土は精良で、器壁は薄く繊細な作りである。

高杯組成中の40.0%を占める低脚高杯は、個体数の上で優勢である。しかし前述したように、低脚高杯は個々の形態差が大きく、複数にまたがる系譜の集合体とも考えられるため、これらを全て同じ器種として認識するにはなお検討の余地がある。

高杯Xはその他の形態的特徴を備えた高杯の総称で、外米系土器が主体と考えられるが、その出自は不明である。高杯組成中の17.5%を占めている。

鉢は234点を数え、土器総体の23.4%を占める。甕に次いで個体数が多い。小形鉢、中形鉢、大形鉢、有孔鉢など、II式以前からの系譜を引く第V様式系の鉢に、新たに有段口縁鉢などが組成に加わる。

小形鉢にはA~D・Hなどがある。これらのうち第V様式系の伝統的な小形鉢はA~Dで、Hは本様式で出現する。第V様式系の小形鉢が、鉢組成に占める割合は23.9%である。中でもCは11.5%と最も多く、A・B・Dが残りをほぼ三分する。小形鉢AはA₁(1164・1165)、A₂(1168・1169)の二者が認められるが、A₂の存在する可能性も高い。小形鉢B(1156・1157)は体部が半球形である。小形鉢CはCc(1153)を主体にCb(1152)も残存する。丸底を指向するが、鈍い平底をもつものや底部外面に木葉痕を残す個体があり、技術面でも伝統的な様相が強い。小形鉢Dでは、平底を呈するD₁(1185)が残存するも數は少なく、丸底のD₂(1180・1182)が主体になっている。ハケ調整を基本とし、内面にケズリを施す個体も散見される。小形鉢H(1175・1176)は、小形鉢A₂との関連も可能性として想定し得るが、底部の作りが総じて在来系とは見なし難い整ったもので、本様式で出現する鉢として捉えた。鉢組成中では3.4%を占めるに過ぎない。Hは隣接する第1調査区河道1にも出土例がある(下田遺跡調査団編1990)。

中形鉢、大形鉢は前様式から存続し、また本様式で超大型鉢の出現をみる。中形鉢(1188)は鉢組成中において3.0%、大形鉢(1191)は1.3%という低率で存在する。中形鉢の場合、底部はほぼ完全な丸底を呈するものと、鈍い平底をもつものがある。本様式において、おそらく大形鉢を母胎に超大形鉢(1192)が分化し出現する。鉢組成中で1.7%と、やはり低率である。これら中形以上の鉢は、主としてタタキ成形の後にハケ調整されるが、稀にミガキBを併用した例もある。

有孔鉢(1178)は僅かにAが1点のみ出土した。本例は粗いナデ仕上げの粗雑な製品で、口縁部は著しく歪んで梢円形を呈する。型式学的に最も退化した弥生系の有孔鉢であろう。

本様式の鉢組成における最も大きな変化は、有段口縁鉢の出現によって達成されている。有段口縁鉢(1094・1121)は鉢組成の59.4%を占めており、本様式で出現して爆発的と形容できるほど急激に増加したことを窺わせる。有段口縁鉢は口縁部に必ず有段部を備えた鉢で、有段部は強く屈曲するもの、屈曲の極めて弱いもの、またその中间のものなど各形態がある。法量は口径12~18cm前後の幅を有する。器面調整はナデ、ハケ、板ナデを用いた平滑技法によるものと、ミガキBによるものがある。ミガキAは前者に補助的に用いられる。口縁部の調整は、ミガキをもつ個体以外は概ねヨコナデによっている。体部内面、口縁部内面、もしくは両者に繊細なミガキCを施すものがあるが、こうした例は外側ミガキB調整の個体に限られる。平滑技法の有段口縁鉢の場合は、稀に内面にミガキCを指向した縦方向の粗雑

なミガキAが施される程度である。また胎土は総体的にミガキB調整のものが精良で、平滑技法では粗い素地をもつ傾向にある。なお、一般に有段口縁鉢は「小型土器三種」「小型精製三種」などの用語が示すように、小形器台・小形丸底土器と共に小形精製器種のセットとして捉えられる傾向がある。東大寺山古墳出土の石製模造品の存在から、小形器台と小形丸底土器が祭祀に関連したセット関係をもつことは確実である。しかし有段口縁鉢は、他の2器種のような「小形」の器種とは捉え難い法量を有している。また下田遺跡の状況からみて、その用途についても弥生系鉢の減少を補う実用器種としての側面を重視すべきと考え、有段口縁鉢をいわゆる「三種の土器」などの用語で、祭祀関係の小形器種と同列の視点で捉えることには、疑問を呈しておきたい。

器台は41点、土器総数の4.1%であるが、その内訳は小形器台が97.6%、有段器台が2.4%で、器台組成の大半を小形器台が占めている。小形器台にはB・C・Xの三者がある。小形器台Aは完全に消滅しており、その片鱗すら残していない。

小形器台Bは前様式からそのまま継承され、小形器台のうちで75.0%を占めるなど、本様式において盛行する。小形器台Bの中でもB₁はII-3式を以て姿を消すが、B₂(996)、B₃(998)は引続いて存在している。またこれらよりも口縁部の立ち上がりが発達したB₄(1006)が出現する。B₄の拡張された端面外面には、いずれも擬凹線状のくぼみが巡り、口縁端部が僅かに外反する傾向が窺える。この擬凹線状のくぼみはB₅(1002)にもその兆候を認めることができる。型式的にはB₂～B₄への変遷を考えられ、いずれもIII式の中で共存する。ただし時間の推移に伴って、本様式の当初から退潮傾向にあるB₂から主流となるB₃・B₄へと、その構成比における重点を徐々に移行させたと認識しておく。最終調整はミガキBによるものが多いが、ミガキAやハケで完成された個体も存在する。また小形器台B₄(999)は、受部をミガキB、脚部をミガキAで調整し、同一個体の部位によってミガキの調整法が異なっている。すなわち新旧の技法の融合と見なし得る点で注意を要する。

小形器台Cは本様式で新たに出現して組成に加わる器台である。小形器台の組成中では17.5%を占めており、Bの1/4以下の数量である。小形器台Cは受部と脚部の間に貫通孔を有するが、小形器台Aとは全く別系統である。小形器台C(1014)は受部、脚部ともシャープな円錐形を呈し、それぞれの頂部で両者が接合されている。接合部のくびれの位置は器高の中央よりやや上位にあり、また透孔は設けられない。口縁端部および脚部端部に、微弱な外反傾向のある個体が存在する。胎土は極めてよく精製されており、器壁は薄く繊細な作りのものが目立つ。また全て緻密なミガキBで仕上げられている。小形器台Cに関しては外来系土器II類と考える余地もある。

小形器台のうち7.5%は小形器台Xで、Bを基本形としながら、細部はこれから外れた比較的粗製の器台である。小形器台Bの不出来な模倣品かも知れない。

有段器台(1197)は前小様式から継続するが、外面のミガキ調整は粗雑で、また極めて少数であることから、この器種の末期的な様相を示すものと思われる。

小形丸底土器は72点が出土し、土器総体の7.2%を占める。小形丸底土器にはA～D・Xがあり、なかでも型式学的に直接関わるものはA～Cの三者で、Dは異系譜、Xは外来系土器II類と推定される。いわゆる「小型丸底壺」の範疇に属するものは小形丸底土器B・Cで、Aはこれらの祖形的な存在として捉えられる。従って、まずD・Xを除外し小形丸底土器A～Cに限定した分析を行う必要がある。

これらの器種における形態上の特徴を比較するため、III式を代表するものとして、下田遺跡S D1108(3層)出土資料から小形丸底土器A～Cを抽出して検討を加える。法量のデータとして、完形品の計測

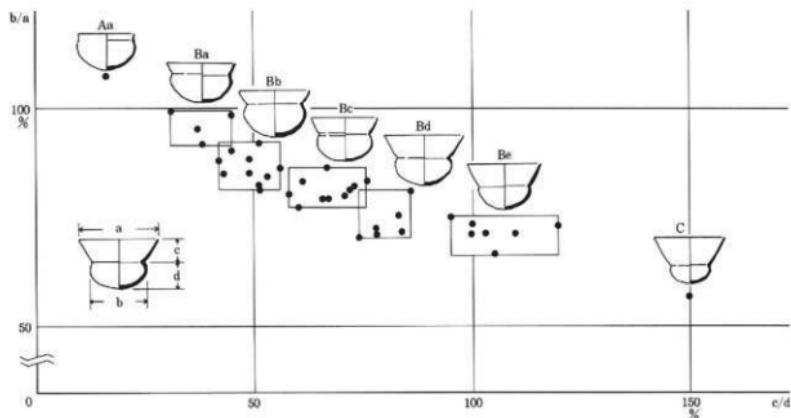


Fig. 454 小形丸底土器の法量分布

値もしくは完形品に近く計測にほとんど支障のない資料から(復原)計測値を求めた。Fig.454では体部径 b を口径 a で除した百分比を縦軸、口縁部高 c を体部高 d で除した百分比を横軸にとり、口縁部と体部における法量の関係を表している。小形丸底土器A～Cは、この器種の中で86.1%を占める。相互の百分比をみると、 $A : B : C \approx 2 : 95 : 3$ で、組成の大部分はBである。小形丸底土器Aとして確認できるのはAa(1019)で、外面は密なミガキBで調整されている。本例はⅢ式の中で b/a の数値が100%を超える、体部径が口径を凌駕する稀な例である。小形丸底土器Bは、前小様式でみられたAbをおそらく母胎に、本様式で出現する。Aaはほぼ直立する口縁部をもち、透視的な様相が強い。しかしAbはこれと異なって、口縁部が外上方に伸び出す特徴を備えることから、型式学的にはさらに後出と見なし得る。Abに備わった型式学的な方向性の兆候は、本様式で顕著に具現して小形丸底土器Bの誕生を見る。こうした型式学上の変化は、小形丸底土器Cに至るまで口縁部がさらに発達を遂げ、体部は逆に縮小して容量を減じる方向に進行する。小形丸底土器Bは口縁部の発達程度からBa(1020)・Bb(1025)・Bc(1039)・Bd(1046)・Be(1056)に細分できる。ただし、Bd・Beはそれぞれ法量分布にまとまりがあるが、Ba～Bcの数値は比較的なだらかに移行して、その境界は曖昧である。これらの正確な組成比は算出できないが、Bb～Beはほぼ等量とみられるのに対し、Baは個体数の上で劣勢である。小形丸底土器Bの調整は、ヨコナデ、ナデ、ハケなどの平滑技法によるものと、ミガキBに委ねるものがある。いずれも最終調整以前に、体部最大径付近や底部をケズリによって成形するものが含まれる。ミガキBで最終調整する小形丸底土器は、先行調整にハケを用いた例が目立ち、また胎土は概ね精良である。これに対して、平滑技法のみで調整を行う小形丸底土器は、口縁部外面に接合痕や、表面に亀裂を残すものが珍しくなく、また胎土も粗い傾向にあることから、いわゆる精製器種としては捉え難い一群である。口縁部内面にミガキCを施した個体が稀にあるが、その施紋に際して、主調整が平滑技法のものではミガキAの原体、ミガキBのものでは同じBの原体が用いられている。小形丸底土器C(1070)は、極小の体部に大きく広がる口縁部をもち、典型的な「小型丸底壺」の形態を備えている。これは小形丸底土器Bの系譜が、さらに型式学的変遷を辿った結果として到達した形態であろう。しかし法量分布をみると、最も接近したBeと比較しても、Cの数値が隔絶した位置にあることが分かる。Cは組成の中で極めて

低い位置にあることから、先行取得的に新しい器形を獲得した小形丸底土器と考えておく。実際にはBとCの間を埋める資料がIII式以降に存在し、隔絶は生じないのであるが、その詳細は次節に譲る。

小形丸底土器Dは、小形丸底土器の組成中で11.1%を占める。扁球状の体部をもち、僅かに外上方へ広がりながら立ち上がる口縁部を備えている。口縁部高は器高の1/3前後である。頸部には幅の狭いヨコナデが加えられ、くびれが強調される傾向がある。外面の調整はすべてミガキBによっており、内面はナデの他に、口縁部にミガキCを施す例が多い。小形丸底土器DはBに類似した特徴もあるが、口縁部の広がりがBと比べてかなり弱く、むしろ垂直に近い状態で立ち上がるものもある。また器形や調整法が共通した一群を形成しており、小形丸底土器Aに起源をもつCまでの型式学的変遷過程とは直接の関連をもたず、異系譜の器種と考えておきたい。

小形丸底土器Xは(1073・1074)の2点で、小形丸底土器の組成中で2.8%を占める。いずれも体部径はやや大きく、広がった口縁部を備える。体部は径と比べて浅く、鉢の形状に近い。調整は(1073)がハケ、(1074)がミガキAに委ねている。この両者は、色調や胎土が在来系と推定される他の小形丸底土器とは異なる。また形態も特異であることから外系土器と考えられるが、その出自は不明である。

製塙土器は29点、土器総体の2.9%を占める。製塙土器のうちB(1218・1219)は本様式に残っているが13.8%と組成上は低い数値となり、代わりに34.5%のC(1214~1217)、および51.7%のD(1204)へと主体が移行している。II式の段階で僅かにみられた製塙土器Cは、本様式で大幅に増加する。いずれも強い二次焼成を受けた脚台のみが残存するが、その全体形状は脇浜遺跡91-O R肩部から出土した脇浜分類III式の製塙土器と同様の形状であろう。製塙土器Dは本様式で出現し、他の製塙土器を圧するよう增加する。この形態に類似した一群の土器は「師楽式土器」(坪井1956)、「斐形製塙土器」(広瀬1978)として製塙活動との関わりが早くから認識されていた。近年ではその分類や編年観について再整理が試みられている(山内1994)。下田遺跡におけるDには、強い二次焼成を受けた赤変部分をもつものや、器表面に白色物質が析出した個体が存在する。また高度な熱により破損し、焼け歪んで復原に支障を來す個体もみられた。こうした激しい焼損の状況は、布留式粗形甕など他の甕にはみられない独特のものであり、Dを製塙土器として支持する重要な根拠となっている。ただし、当該上器の化学組成分析では、製塙に関与したという積極的な結果は得られず(分析篇第5章)、またDの中には二次焼成をあまり受けていない個体も含まれていることを付記しておく。製塙土器Dはいずれもほぼ同様の形態ながら、タタキ技法によって成形を終えたものと、最終調整にハケ、あるいはナデを加えたものがある。底部は概ね丸底であるが、一部にやや尖り気味の丸底を備えた個体があり、後者では底部の器壁がやや厚くなっている。体部内の調整は平滑技法を主とするが、ケズリを加える例も僅かに認められる。法量からみると器高20cm、器径16~18cm前後の一群と、器高25cm、器径18~21cm前後の一群がある。

蛸壺は9点、土器総体の0.9%である。前小様式から引き続いているB(1224)・C(1223)が認められるが、蛸壺組成中でBが11.1%、Cが88.9%を占めており、砲弾状で小形の蛸壺Cが優勢となる。

これら特殊な生産に関わる製塙土器、および蛸壺の組成変化は、おそらく海浜部における生産遺跡の状況を比較的忠実に反映すると考えてよい。しかし当然ながら、土器総体の中での存在比率は遺跡ごとに異なるはずであり、一般化されるべき数値と区別する必要がある。

さて、下田III式の土器組成を概括すると、第V様式的・庄内式的要素をもった土器が混在するものの、主流となる土器群は布留式に大きく傾斜している。特に布留式前半期における主要組成である直口壺、布留式甕、小形器台、小形丸底土器、有段口縁鉢が出揃っていることは、本様式土器群が紛れもなく布

留式に属することを証する。またⅢ式土器群は、胎土の選択や焼成法など、包括的にみた土器製作技術体系に、Ⅱ式までのものと隔絶が看取される点は重要である。従ってこの観点からも庄内式の衰退による末期段階として捉えるのではなく、Ⅲ式をもって布留式期に突入したと見なさねばならない。

これら各器種の出現時期には幾つかの段階がある。直口壺、小形器台B、小形丸底土器は庄内式期に祖形があり、その末期には布留式祖形壺が出現、そしてⅢ式に至って布留式壺、有段口縁鉢、小形器台Cが加わり器種構成として完成をみている。次に調整技法をみると、壺・壺などの器種では最終調整にハケを用いたものが多数を占めるが、細部については一定せず、共通した技法としての確立をみていない。こうした不安定な要素は、壺や壺類の口縁部における調整にも端的に表れている。壺と壺の口縁端部の作りには技法的に通じる部分が認められる。しかし調整の細部は多様で固定化されておらず、不確定な要素が目立つ。このような状況は、取捨選択されて確定した器種の上に、まだ不安定な状態の細部が乗っていると表現できる。すなわち、主要器種においては細部を含めた定型化までは至らず、いわば搖籃期における萌芽、模索の段階として把握できよう。布留式壺には口縁端部の肥厚や肩部のヨコハケなど、定型化に近づいた個体もみられる。しかしこれらの土器はまだ極めて少数派であって、いわば先行取得的な土器の一群と解されよう。これら主要な器種に対し、例外もあるが高杯、鉢などは総じて粗製かつ多様であり、全体的な組成の流れに対して極めて鈍感な動きを示している。むしろ高杯などは技法的に退行の兆しすら窺え、直口壺その他の選択された土器群が先鋭的な動向をみせるのとは対照的である。少しがら典型的布留式の系列に連なる布留系高杯も出現しているが、大半の高杯は型式の崩壊によって後退的に多様化したとみなすことが可能であろう。

なお、大溝S D1108出土木製品については年輪年代測定を実施した。計測の可能な試料は、ヒノキ製腰掛天板(W134)1点のみであったが、本試料の最外輪の年代について「A.D.247年」の測定結果を得た(分析篇第9章)。この計測値は、木製品と同一時間帯での存在が確実視されるS D1108出土の土器群、すなわち下田Ⅲ式土器群の実年代を比定する上で重要な示唆を与えよう。試料は加工によって樹皮周辺が削り取られていることから、素材となったヒノキ原木の伐採年は、測定で得られた年代に幾ばくかの年限を加算しなければならない。自然科学的所見によれば、試料に素材外縁に近い辺材が残されているので、伐採年にかなり迫る数値が示されている。一方、考古学的な所見によれば、一般に木器の有効寿命は土器のそれと比べて長期に及び得ると考えられる。さらにこの腰掛けは最終的に粗として転用されているので、使用期間はやや長く見積るべきである。以上を総合すれば、製作から廃棄までの年限について、測定数値より數十年以内と考えるのが妥当であろう。従って下田Ⅲ式の実年代は、A.D.247年を基準として、短く見積れば3世紀後半、長く見積っても4世紀初頭までに確実に収まるであろう。今回の成果と近年における年代観についての趨勢から、下田Ⅰ式を2世紀にはば収まるものと考え、Ⅱ式を3世紀初頭～後半、Ⅲ式を3世紀末葉として捉えておきたい。

第5項 下田Ⅰ～Ⅲ式における有稜高杯Aの動態

前項までに和泉北部域の土器を概観してきたが、本項においては、有稜高杯Aの動態について再び取り上げる。その目的は、前節で提示した諸様相内での有稜高杯Aの法量分布図(Fig.423)を基準に、和泉北部の各遺跡出土例を加えて資料の平準化を図ることにある。下田Ⅰ～2・4式～Ⅱ～2式新相に属する、下田遺跡を除く諸遺跡においても、有稜高杯Aの傍系にあたる有稜高杯Bの存在を認める場合があったが、やはり主体はAで構成されている。従って下田遺跡例を基準にBを排除し、Aと認められる